

令和4年度 学位請求論文

# 都市体験と郁達夫

日本大学大学院芸術学研究科

博士後期課程芸術専攻

王梓玥

WANG ZIYUE

## 凡例

①引用文献の日本語訳は、注に訳者名が明記されているもの以外は私(王梓玥)が翻訳した。

②中文のタイトルは原則として原タイトルを使用し、その和訳は付録で一覧できるようにした。なお、タイトルが和文で表記されている場合は、日本語版が存在し、その書誌情報は注の中で示した。

③郁達夫のシンガポールでの政治論と詩などの他のジャンルの創作は、この考察から除外する。

## 要旨

キーワード：都市体験 郁達夫 小説 現代性 苦悶

郁達夫は、中国現代文学史上重要な作家である。彼は生涯に中国と日本の多くの都市を流転した。これらの都市は郁達夫の人生の中で重要な居住地となる一方、そこで彼は重要な作品を次々と生み出していった。都市の生活体験は、郁達夫の創作理念、審美観、恋愛観、婚姻観、社会観などに大きな影響を与えた。

都市がグローバル化する流れの中で、郁達夫の都市生活の体験は、生活空間の変化だけではなく、彼の精神生活にも影響を与えた。日本に留学した郁達夫は、祖国、故郷を想う一方で、弱国の民としての苦悶を抱えていた。西洋と日本の文化が彼を啓蒙し、それまで体験したことのない都市生活は、彼に衝撃を与え、感情や衝動を解放する欲求を強めた。また、その後、中国の各都市での生活体験は、郁達夫の思考様式や心の拠り所へと導くのに重要な役割を果たしている。

本論は郁達夫の文学創作に影響を与えた都市を選び、日本の東京、名古屋、中国の上海、北京、杭州を研究対象として、郁達夫の各都市における生活体験と創作の関係を系統的に考察し、都市生活、都市文化、そしてそれら各都市特有の自然が、いかに作家の創作に影響を与えたかについて考察した。さらには、彼の作品の分析を通じて、当時の中国の作家の生存と精神の状態、都市生活における思想や文学創作の変化にまで論及した。

本論は六つの部分に分かれる。序では、研究動機と目的、先行研究、研究方法について明らかにした。

郁達夫は「自叙伝的小説」を提唱した作家であり、彼の作品は彼の現実生活に深く繋がっている。郁達夫は故意に都市について書いたわけではないが、彼の作品の中には都市に関する多くの描写や夢がある。郁達夫は中国の伝統的な田舎から海外の都市に居を移し、そして海外の都市から中国の現代都市に戻って生活した。彼は都市のイメージとして、街路、劇場、公園、学校、旅館、病院、遊郭など、各都市の代表的な風景を選んでいる。都市のいたるところで見られるこれらの風景は、田舎の風景とは異なり、作家に違った感覚を与えたに違いない。彼の都市体験は、独特なものがあり、本論ではそれに注目して、都市体験は作家の創作活動の形成にどのような影響を与えたのか、都市空間の構成が作家にどのような体験や感情をもたらすのかを考察した。

これまでの郁達夫研究は、郁達夫の作品の起源に集中し、作品の特徴と価値、外来文化の影響などについての考察、同時代作家との比較などが多かった。郁達夫が接した都市文化と、それが作品にもたらした影響についての研究は少なく、また系統的な分類分析は皆無である。したがって、本論ではそのような点に留意しながら、先行研究を補完すべく、関連資料の収集とその検討を行ない、そのうえで、中国現代作家と都市との関係の考察も試みた。

研究方法としては文献研究法と比較研究法を用い、都市の生活体験の郁達夫に対する影響について考察した。

第一章では名古屋と東京における郁達夫について考察した。郁達夫が日本にいた十年間は、日本の大正期にあたるが、日本の歴史の中でも、大正期は特異

な時期である。この頃には、政治、経済、文化、人々の日常生活が大きく変化した。大正期の日本文学は、ヨーロッパの自然主義、ロマン主義、耽美主義、リアリズムなどを吸収した。この時期の日本文壇には、さまざまな流派があらわれ、永井荷風、谷崎潤一郎、太宰治、志賀直哉、佐藤春夫、厨川白村等、多くの優れた文学者を生み出した。このうち、佐藤春夫と厨川白村については、本論でも特に紙幅を割いて論じた。またこの時期は、日本近代文学の一大転換期とも言えるが、郁達夫はその衝撃を身をもって体験した。

しかし、日本の都市のエキゾチックな文化は、郁達夫のような留学生たちに大いなる刺激を与えると同時に、弱国の民である自分たちへの強い劣等感を抱かせ、その一方で文化的アイデンティティの危機をもたらした。多くの中国人留学生と同じく、日本の都市体験は、他国での生活の苦しさや無力感を郁達夫に与えた。そして彼は孤立し強い危機意識を抱くようになる。金銭にまみれた物質的な都市空間で、郁達夫は欲望にかられ、またそのような自分を恐れた。彼は性の苦悶と生の苦悶について思考し始める。伝統と現代の対立と不安の中で、やがて郁達夫の自己意識が目覚め、日本の都市生活の体験と豊富な読書量が、彼の創作意欲をかき立てた。日本の文学上の先人たちとの交流や励ましもあり、郁達夫の基本の創作理念やスタイルは日本で形成された。

第二章では上海の郁達夫について検討した。卒業後、郁達夫は日本から上海に帰国した。この頃の上海は、中国の田舎から逃避してきた人々の封建的な思想と、国際的・現代的な思想が交錯する半植民地的な都市であった。ここでは、郁達夫は都市に生じる様々な思想の衝突と社会の激動を感じた。

1921年10月、郁達夫の短篇小説集『沈淪』の出版は、社会に大きな反響を巻き起こした。『沈淪』は、郁達夫の日本留学体験をもとにした自伝のような色合いを持つ作品である。小説の中には、大胆な暴露的描写があり、それについて多くの論争が起こった。その中のリアルな孤独感、辛さ、苦悶、感傷は、故郷を離れて上海で生活する多くの若者の心に響いた。彼らは、郁達夫の小説に自分自身を投影し、人生のもうひとつの可能性を見出し、それを受け入れたのである。上海の自由な出版環境と読者の美意識の選択は、郁達夫の小説が評価される状況を生み出していた。『沈淪』出版のセンセーションは、郁達夫の創作に大きな励みとなり、創作の道を明確にし、執筆を続けることができるようになった。

上海の代表的な空間は弄堂、外灘、亭子間などであるが、全て郁達夫の小説の中に表われている。これらの空間は、人物の物語の背景になりつつ、物語の進行上の重要な役割を果たす。郁達夫の上海滞在時の作品は、自分の内的な苦悶だけに注目しているのではなく、抑圧された下層社会の人々に視線が向けられる。「春風沈酔の夜」、「空虚」、「茫茫夜」等は、当時の上海の階層社会の暗い現実を背景として、社会の実相を暴いている。彼の上海での創作は、全体的に上海の現実が直接的にまたは、間接的に反映された哀れで抑圧的な心情が基調である。これらの作品が描いたインテリは皆、理想と志を持ちながら、暗い現実の中で挫折を味わうことになるが、現実と折り合いをつけようとせず、ジレンマを抱えたままである。

第三章では北京の郁達夫について検討した。郁達夫は3回北京に行っており、その中で一番長かったのは1923年から1926年の4年間である。郁達夫にとって、北京はもはや地理的な概念ではなく、再適応しなければならない新しい空

間であった。北京と上海の全く異なる文化的雰囲気は、彼に新しい思考と選択肢を与えた。

1923年、郁達夫は北京大学で自分の得意とする文学ではなく、統計学を教えており、退屈な仕事に、不満を覚えた。郁達夫は、自分のことを、社会から見捨てられ、悲劇的な運命から逃れられない余計者と感じ、彼は北京に住んでも、北京に帰属意識はなく。短編作品「余計者」（「零余者」）を創作した。郁達夫は、北京の街をさまよひ、都会の人々から距離を置き、身を局外に置いた視点で世界を観察している。当時、郁達夫と同じ体験をしたインテリは多く、郁達夫が作品の中で描いたインテリは皆、ひどく痩せこけており、神経質で、非常に繊細である。彼らは高い文化的の教養を持ち、現代人の精神を持っているが、自らの運命を掌握する力はない。彼らは社会の暗闇を憎み、自らの惨めさを嘆く、覚醒者として世界を見直した。自分たちが社会にとって余計な存在であることを知りながら、また沈淪するのも悔しいまま、最終的に、苦悶の中でもがくしかない。彼は北京の下層階級の暗闇を批判する一方で、自然の美しさや風習を賞賛している。自然の景色は、彼に世の中の苦悶を暫く忘れさせた。

第四章では杭州の郁達夫を扱う。杭州は、郁達夫にとって思い出の地であり、憧れの都市であった。他の都市は彼に緊張や不安を与えたが、杭州と向き合うことで安心感を得た。郁達夫の杭州は、江南の風情を漂わせ、淡く清らかな描写は、読者を静かで優しい雰囲気へ導いてくれる。郁達夫の杭州を舞台とした小説の中の主人公は、もはや感傷や苦痛、憂鬱に満ちた余計者ではなく、自由闊達な人生観を抱いている。彼が杭州で「風雨茅廬」を建てたのは、沈淪の運命から逃避し、悠々自適の隠遁生活を送るためである。しかし、胸の内では中国の将来を心配しており、世の中の不安状況はまだ彼を悩ませていた。彼はいつれにしろ現実から逃げられないと気付いた。1938年、杭州で隠遁する夢が打ち砕かれ、郁達夫はシンガポールに向けて出発した。

結語では、以上の研究と考察を次のようにまとめた――

郁達夫は生涯に多くの都市を変遷した。彼の敏感な神経と率直な性格は、それぞれの都市について鋭くて、深い観察を行い、様々な都市体験を活かした作品を創作した。日本の名古屋と東京、中国の上海と北京、杭州が、郁達夫の文化や文学に関する意識を発展させ、創作モチーフや創作スタイルにも大きな影響を与えた。これらの都市の歴史や文化そして人々の息吹は、彼の作品に反映され、彼の人生にとっても大きな財産となった。

これらの都市文化は彼に豊かな生活体験と精神力をもたらし、それぞれ異なる歴史・文化の背景や景観は、郁達夫に人間存在を見直す機会を与えた。都市に対する想像と思考を働かせることで、最終的には独特な都市体験文学を完成し、中国現代文学史に重要なものを残した。そして、郁達夫の都市体験は彼だけのものではなく、当時の他の中国の現代作家たちの現代社会における都市体験を代表しているとも言える。

## 目次

序.....	1
1 研究動機と目的.....	1
2 先行研究.....	6
2-1 日本の先行研究.....	6
2-2 中国の先行研究.....	9
3 研究方法.....	12
I 名古屋の啓蒙と東京の苦悶.....	13
I-1 日本における郁達夫の審美体験と創作素材.....	15
I-1-1 郁達夫の意識的覚醒.....	15
I-1-2 男女関係の新たな体験.....	17
I-1-3 日本の都市に溶け込めない苦悶.....	20
I-2 日本の都市体験は郁達夫の創作を啓発した.....	23
I-2-1 豊富な読書量と思考.....	23
I-2-2 日本の作家との交流.....	28
I-2-3 日本の都市体験に基づく創作.....	31
I-2-3-1 日本の私小説.....	31
I-2-3-2 自叙伝の特徴.....	32
I-2-3-3 郁達夫の小説の中の女性.....	35
II 上海の憂鬱.....	37
II-1 上海の文化的な背景.....	37
II-2 郁達夫のデビュー.....	42
II-3 郁達夫の上海における創作.....	44
II-3-1 小説の舞台としての上海の空間.....	47
II-3-2 自己アイデンティティの危機.....	49
III 北京の余計者.....	52
III-1 行き場のない余計者.....	55
III-2 余計者の目に映る都市のランドマーク.....	59
III-3 余計者の逃避.....	62
IV 杭州の倦鳥.....	68
IV-1 詩的な避難所.....	70
IV-2 杭州の郁達夫の小説創作への影響.....	74
IV-2-1 杭州の名勝による文脈構成.....	75
IV-2-2 杭州は小説の舞台となる.....	77
IV-2-3 水のように弱々しく柔らかい人物像.....	78
IV-3 隠遁の夢が打ち砕かれた.....	80
結語.....	82
参考文献.....	84
付録1.....	92
付録2.....	94
謝辞.....	113

## 序

### 1 研究動機と目的

私の修士論文は「佐藤春夫の郁達夫への影響」（2018）である。当時は郁達夫関連の資料を収集し、それを読み込むことで、「中国における郁達夫作品に関する先行研究とその考察」、「厨川白村と郁達夫の文芸観の比較」、「『物の哀れ』と郁達夫』について検討した。そして、私は、郁達夫が多くの都市に住んでいたことに着目して、彼の創作は彼の生活した都市体験と関係があると結論した。これはその時代の作家の共有した特異点であり、田舎から都市に来て、急速に都市化する歴史的過程を体験した当時の多くの作家に共通する特徴である。彼ら自身の生活のあり方や精神状況はその影響を大きく受けている。郁達夫は「自叙伝的小説」を提唱した作家であり、彼の作品は彼の現実生活に深く繋がっている。郁達夫は故意に都市について書いたわけではないが、彼の作品の中には都市に関する多くの描写や夢想がある。「沈淪」、「銀灰色的死」、

「南遷」は留学中の東京や名古屋での生活体験を取材し、「春風沈酔の夜」は上海、「ささやかな供えもの」は北京、「遅咲きの木犀」は杭州での生活体験をもとにして創作した。これらの作品は例外なく、彼の都市体験である。そこで、私は郁達夫の現存する作品を次のように整理した。そのうち2編は名古屋について、6編は東京について、11編は北京について、13編は上海について、11編は杭州を舞台にした作品である。

タイトル	創作時期	創作地	主に描写した所
「銀灰色的死」	1921. 7	東京	街路、公園、学校、図書館、居酒屋
「沈淪」	1921. 10	名古屋	学校、市外旅館、山上梅園、遊郭、筑港
「胃病」	1921	東京	病院、客寓、教会堂
「南遷」	1921. 7	東京、房州	公園、電車、海辺
「茫々夜」	1922. 2	上海、安慶	学校、公園、黄浦灘、遊郭、客舎、城外、大観亭
「怀乡病者」	1922. 4	東京、北京	街巷、周辺地域、寓所、植物園
「空虚」	1922. 7	名古屋、東京、上海	街路、公園、温泉
「血泪」	1922. 8	上海、北京、銭塘	街路、公園、旅館、駅、居酒屋
「蔦蘿行」	1923. 4	東京、上海、安慶	街路、公園
「青烟」	1923. 5	上海	部屋、窓からの景色
「春風沈酔の夜」	1923. 7	上海	街路、寓所、貧民窟、電車
「落日」	1923. 9	上海	街路、屋上、遊郭、劇場、居酒屋、貧

			民窟
「人妖」	1923. 12	北京	街路、城門、城南游芸園
「还乡记」	1923. 7	上海、杭州、錢塘	街路、城門、旅館、競馬場、駅、貧民窟
「还乡后记」	1923. 8	杭州、錢塘	街路、城門、城壁
「零余者」	1924. 1	北京	街路、京包線、城外
「ささやかな供えもの」	1924. 8	北京	街路、城門、城外、劇場
「小春天气」	1924. 10	北京	街路、公園、城門、城外
「十一月初三」	1924. 12	北京	寓所、劇場、居酒屋、城門、城外
「街灯」	1925. 5	北京	街路、遊郭、居酒屋、劇場、城門
「烟影」	1926. 3	上海、杭州、錢塘	街路、寓所
「過去」	1927. 1	上海、港市	街路、居酒屋
「清冷的午后」	1927. 1	北京	街路、遊郭
「微雪的早晨」	1927. 7	北京	図書館、郊外白云觀、ホテル
「祈愿」	1927. 8	北京	遊郭、城外白云潭
「迷羊」	1927. 12	上海、杭州、安慶、南京	街路、公園、旅館、迎江寺、鷄鳴寺、夫子廟、病院、上海舞台劇場
「在寒风里」	1929. 1	上海、揚州城外	旅館、故郷
「楊梅燒酎」	1930. 8	杭州	西湖、病院、居酒屋、駅
「十三夜」	1930. 10	杭州	旅館、西湖、三潭映月
「蜃楼」	1931. 3	杭州	街路、旅館、ホテル、病院、西湖、西湖周辺の観光地
「她是一个弱女子」	1932. 3	上海、杭州	街路、駅、学校、西湖、工場、亭子間
「遅咲きの木犀」	1932. 10	杭州	街路、駅、城外、五云山
「瓢儿和尚」	1932. 12	杭州	山路、胜果寺
「迟暮」	1933. 5	杭州	駅、寓所、西湖

これらの作品の中で、郁達夫は都市のイメージとして、街路、劇場、公園、学校、旅館、ホテル、病院、遊郭など、各都市の代表的な風景を選んでいる。このうち、街路に関するものが21編、居酒屋に関するものが7編、公園に関するものが8編、遊郭に関するものが6編、劇場に関するものが5編である。都市のいたるところで見られるこれらの風景は、田舎の風景とは異なり、作家



に違った感覚を与えたに違いない。

郁達夫は中国の伝統的な田舎から海外の都市に居を移し、そして海外の都市から中国の現代都市に戻って生活した。彼の都市体験は、独特なものがあり、私はそれに注目して、都市体験は作家の創作活動の形成にどのような影響を与えたのか、都市空間の構成が作家にどのような体験や感情をもたらすのかを考えた。

このため、私は作家の創作と都市体験に関する著作や論文を探し、特に都市空間、文化地理等の文献も収集した。陣内秀信の『東京の空間人類学』、前田愛の『都市空間のなかの文学』、『近代日本の文学空間』、加藤周一の『日本文化における時間と空間』、南後由和の『ひとり空間の都市論』、李欧梵の『上海モダン：中国の新しい都市文化』（『上海摩登：一种新都市文化在中国』）、呉福輝の『都市の渦流のなかにおける上海都市小説』（『都市漩流中的海派小说』）、趙園の『北京：都市と人々』（『北京：城与人』）、陳平原、王德威の『北京：都市想像と文化記憶』（『北京：都市想象与文化记忆』）、龍迪勇の『空間の物語論』（『空間叙事学』）など、いずれも私が本論を執筆する上で重要なインスピレーションを与えてくれた。

都市は、人類歴史の発展過程の中で出現した物質的、人工的空間である。都市空間は自然空間とは一定の距離があり、人々が目にする風景や建物は、自然の山、川、湖、花などではなく、建築家自身が大衆生活の空間に対する理解と想像から作られたものである。近現代では、交通手段の発達により、人は速く空間移動ができるようになり、豊かな都市空間は、人々の物質的な欲求を満たすだけでなく、精神的な活動にも広い空間を提供している。都市には、田舎や小さな町とは異なる空間的な特徴や人間環境があり、農村の伝統的な生活習慣と近代的な都市文明が混在する複合的な空間である。政治、経済、文化の中心地である都市は、独特の階級性と距離が持つ人間関係などの特徴がある。実用的な機能と大衆の審美両方を備えた、このような空間に住んでいると、人々は伝統的な文化から分化され、その精神は物質化によって疎外され、本来の興味、美的指向が変化することになる。アメリカのシカゴ学派を代表するロバート・E・パーク（Robert Ezra Park）は次のように言った。

都市は、文明人の生まれつきの居住地（habitat）だと呼ばれてきた、人間は、都市においてこそ、哲学や科学を発展させたし、また、単なる理性的動物から洗練された動物となった。＜中略＞都市あるいは都市的環境とは、人間が思い通りに自分の住む世界を改造しようとした試みの中でも、もっとも長続きをしました全体としてもっとも成功した試みの成果なのである。けれど、都市が人間の創造した世界だとするならば、それはまた人間が今後生活し続けていくように運命づけられた世界でもある。こうして間接的に、そして自分の作業の本質的性格にはっきりと気づかぬままに、人間は、都市をつくる作業を通じて自らを改造してきた。<sup>1</sup>

<sup>1</sup> ロバート・E・パーク著、町村敬志、好井裕明編訳（1986）『実験室としての都市——パーク社会学論文選』御茶の水書房、11頁。

都市は文学に舞台と素材を提供した。前田愛は次のように書いている。

都市小説のテキストに現実の地名を織りこむことは、清水徹のいうように、「現実のある都市の内部にひとつの虚構の物語をかしあたえ」ることであり、また地名を媒介に、編みあげられたイメージを現実の場所にかぶせることなのである。特定の場所のイメージを喚起し、統合するそうした地名の効果は、たとえば、『たけくらべ』の吉原、『雁』の無縁坂、『彼岸過迄』の小川町などにたくみに生かされている。＜中略＞文学作品が提供する特定の場所をめぐる情報や風景のイメージは、テキストの「内空間」を構成する素材ではあるものの、「内空間」そのものではない。<sup>2</sup>

都市の多様性は、作家たちに審美的刺激と感情を託す場所になり、ユニークな空間として、作家の生活空間であるだけでなく、作家の気質を養い、彼らの作品は、その街の独特な記憶を鮮明に残していく。都市空間の現代的な建物やさまざまな人々が、文章の中に実存の主体があり、同時に作家の想像でもある。彼らは都市の汚い九尺二間で田舎の牧歌的な美しさを思い起こし、ネオンサインの下で都市の腐敗、犯罪、冷酷、非情に直面する。

文学のテキストを読みすすめる過程で読者がつつみこまれて行く「空間」は、どこか夢のなかにあらわれる空間と似たところがある。<sup>3</sup>

文学における都市空間は、単に現実の都市空間を表現したものではなく、作家が自らの人生体験や理解を創造した空間である。

空間の意義は、小説の構造の一環として不可欠であり、それ自体も特別な意味をもつ。小説が成熟してからは、小説の中の空間は客観的な現実からかけ離れ、作家の仮想となる。<sup>4</sup>

こういう仮想は、作家の独特な都市体験による想像である。郁達夫も自分の都市体験を記録し、創作を行った。

郁達夫は中国の古い封建時代から現代社会に触れたインテリとして、幼い頃から中国の伝統文化を学び、留学することで、西洋と日本の文化に大きな影響を受けた。彼が日本にいた九年は、はっきりと中国の貧困と立ち後れを認識し、祖国が富んで、強くなることを望んだ。帰国後、上海、北京、杭州の市井の人情は、彼に中国政治の腐敗と暗黒の現実を見せつけた。戦乱で混乱し、不安を抱えながら、自分の理想を託す場所を必死に探している。彼の作品は「性の苦悶」から「生の苦悶」へと変換し、社会現実に対する関心を強めていった。

1894年日清戦争を経て、日本は明治維新後の全盛期を迎え、特に大正天皇の時代、1912年から1926年にかけて、日本の独占資本は急速に成長し、アジ

<sup>2</sup> 前田愛 (1992) 『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫、25頁。

<sup>3</sup> 前田愛 (1992) 『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫、11頁。

<sup>4</sup> 李芳民 (2006) 『故事的来源、场景与意味—唐人小说中佛寺的艺术功能与文化蕴涵』商务印书馆、396頁。

アで唯一の帝国主義国となった。大正期の政治では民主主義、哲学では新カント派、文学では白樺派が代表的である。白樺派は人道主義や理想主義や個性尊重などを唱えて、自然の意志と人間の意志を尊重して、個人の生き方を探る。この時期の文化や思想は、個人主義や理性主義、民主自由の雰囲気は濃く、日本の田舎まで影響を受けている。それと同時に、中国の伝統的な社会秩序は完全に崩壊し、都市と農村は両極に分化する、沿海都市での近代化の加速によって、社会階級の格差が徐々に拡大した。伝統的な農業社会から近代的な工業社会への発展する過程で、中国の政治、経済、文化は歴史的な変化を遂げた。外国資本主義の浸透により、中国の都市は急速に近代化し、あらゆる階層の人々が都市に集まり、都市の貿易や商業が盛んになり、商業化機能が都市で重要な位置を占めるようになった。また、公共施設も大きく改革され、様々な交通手段が現れ、公園も建って、都市文明が飛躍的に発展し、人々の審美意識や価値観が根本的に変化した。外の人々から見れば、都市は極めて先進的であり、憧れである。1920-1930年の上海と北京はすでに国際的な大都市の特徴を持っている。歴史と機会がこれまでにない都市文明を生み出し、都市の人々は新しい理念に適応すると同時に、新しい生活を創造している。郁達夫は異なる都市の風習に触れながら、社会の主流思想と価値観について深く思考をした。

郁達夫の都市体験は共感を呼び、彼は当時の他の中国の現代作家たちの都市文明の体験を代表している。彼らは都市生活の中で、時代のあり方と自己の生のあり方を考え抜いた。あの時期の多くのインテリが、都市の繁栄を目指して、そこは運命を変え、理想を実現するための目的地と見られた。彼らは田舎や小さな町から、都市に集まってくる。そして、都会の喧騒の裏側には、残酷な一面があることを認識した。暖かい田舎の詩的な雰囲気の代わりに、無尽の孤独と苦しむ魂が存在する。

作家たちは都市に来て、徐々に都市は新たな芸術を生む環境は、知識階級の活動の中心であり、激しい思想の衝突の中心であると意識した。

大都市の成長は読書人口を非常に増大させた。読書は田舎では贅沢なものであったが、都市では必要欠くべからざるものとなった。都市的環境では、読み書き能力は話す能力自体とほとんど同程度に必要なものである。<sup>5</sup>

その影響で、郁達夫は現代都市の角度から、個体の存在の意味、生命の価値、自由と平等の問題を意識した。

彼らは都市に住み、その和やかな雰囲気を共有し、享受しながら、インテリ・作家として、都市と人々を注視する。彼らは定住者であり、観察者である。後者のアイデンティティは、彼らの限定された帰属を決めて、都市を美的対象として、彼らは都市の内にいるとともに外にもいる。<sup>6</sup>

郁達夫の小説は都市に関連した作品が多い、それぞれに独特な地域や文化を表現した。とりわけ、空間の描写に力を入れている。彼は人物の外界に対する

<sup>5</sup> ロバート・E・パーク著、W・シュラム編、学習院大学社会学研究室訳（1954）「新聞の博物学」『マス・コミュニケーション』東京創元社、5頁。

<sup>6</sup> 趙園（2002）『北京：城与人』北京大学出版社、12頁。

主観的な感情を通して、当時の社会のインテリの体験を書いた。作品の中には自然の風景も描かれたが、それはあくまでも主人公が都市空間で感じる「苦悶」の逃げ場である。

当時の中国文学では、都市と田舎は対立する。都市は文明、開放と進歩、田舎は封建、保守と立ち後れの象徴である。

清朝末期以降、中国の近代文学は都市生活から栄養を吸収する。五四時代には「新文学」へと発展し、同時に都市のインテリたちの声を出した。しかし、社会に対する強い不満のため、都市の作家たちは田舎に目を向けるようになった。<sup>7</sup>

したがって、これらの作家のアイデンティティは内面では不確定である。一方では、都市の寛容さや個性の自由を肯定しながら、他方では、都市文明によって見えなくなっている人間性の疎外を見た。彼らは故郷から離れ、また都市に溶け込めず、内心は常に漂泊していた。郁達夫にはそれが典型的にあらわれている。

郁達夫が描いた多くの主人公は、都市のよそ者「余計者」である。精神的に苦悶を感じ、苦難に満ちた生活を送り、都市から都市へと漂泊しながら生きていく、彼らは都市への帰属感がなく、都市で生きる能力もないため、都市に溶け込めない。生存の重圧と精神的苦痛から、都会とは相容れない劣等感と孤独を感じた。東京では屈辱と差別を受ける弱小国家の民の苦悶、上海では戦乱の時代がもたらす不安と悲しみ、北京では古都の風景と複雑な人間関係による憂鬱と孤独、杭州では詩的な風景の中で、隠遁出来ず無力を感じた。郁達夫の作品ごとに異なるスタイルでそこでの体験を表現している。彼の作品を分析することで、当時中国の作家の生存と精神の状態、都市生活における思想や文学創作の変化について考察することが可能である。

本論は郁達夫の文学創作に影響を与えた都市を選び、日本の東京、名古屋、中国の上海、北京、杭州を研究対象として、主に彼の小説について考察を行う。郁達夫のシンガポールでの政治論と詩などの他のジャンルの創作は、この考察から除外する。

## 2 先行研究

### 2-1 日本の先行研究

山口慎一は、1927年に郁達夫に関する研究を開始した。彼の研究は本当の意味での文学研究ではなく、郁達夫の経歴と作品の特徴について紹介したものである。その後、金子光一、大内隆雄、池田孝、小田嶽夫らの日本学者がまとめた『名鑑』、『辞典』や各種の文学雑誌などに、郁達夫と彼の作品を紹介する文章が二十数編発表された。

最初に郁達夫を全面的に研究したのは竹内好である。1934年、竹内好は『郁達夫研究』論文で東京帝国大学中国文学科を卒業した。この論文は二つの部分に分けられている。第一部は郁達夫の生涯に関する記述と考証である。第二部

<sup>7</sup> 李欧梵 (2000) 『現代性的追求』三联书店、328頁。

は郁達夫の前期創作の整理と分析である。この論文の中で、郁達夫の「詩人」から「作家」への発展過程を分析した。作品を分析した上で、郁達夫の小説は非理性的な傾向をもつという結論を出した。また、郁達夫の小説と日本の現代文学との関係を分析し、田山花袋の『蒲団』の郁達夫の小説に対する影響を指摘している。この論文は1982年に発表されたが、竹内好が提起した問題はその後の研究の中でも、取り上げられ、日本の学界の郁達夫研究についての基本的な研究スタイルを打ち立てた。

1950年代末から60年代初めにかけて、伊藤虎丸は竹内好の研究スタイルを引き継いで、日本の現代文学と郁達夫の関係から、郁達夫の生活と創作経歴、文学作品の内容を研究対象として、郁達夫の小説について深く研究した。伊藤虎丸は、郁達夫の創作は封建文人の自我的なものを多く保留しており、そして佐藤春夫らの影響もあり、彼の頽廢は伝統的な感傷的悲哀と考えた。

1969年、伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫の3人の学者は、共同で資料集『郁達夫資料』を編集し、その後、1974年に補編を出版した。その前後に、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターが「東洋学文献センター叢刊」の一つとして印刷出版した。この資料には、郁達夫の作品の目録、作品発表の新聞と雑誌の目録、参考資料目録と年譜などが収録されている。最も貴重なのは、編集者による元日本憲兵への郁達夫の死に関するインタビューの記録である。

1983年の平井博の「郁達夫—その文学的模索」<sup>8</sup>は、郁達夫の創作思想と作品について研究したものであるが、作家の創作意図の角度から小説を研究しただけでなく、創作思想と創作理念の変化を探求し、彼の小説、エッセー、雑文、政治論文、文学理論などの作品を詳しく分析したものである。平井博は郁達夫の多くの作品を詳しく評価し、「過去」の技術が成熟しており、作家は作品の中で自分の内面的な思考を表現していると評価しているが、「迷羊」「她是一个弱女子」と「出奔」は創作上の失敗と考えた。

1989年、伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫らは『郁達夫資料総目録附年譜』上・下2冊をまとめ、この著作は郁達夫の生涯考証、創作研究と資料考証を一体化しており、現在日本で最も完備な郁達夫研究書である。この著作は、日本の学界における科学的実証方法によるものであり、郁達夫に関する研究の基盤となった。

1990年代以降、日本では郁達夫研究における多くの新しい方法と視点が現れた。研究者は郁達夫と日本との関係についての研究を続け、その際、前期の研究成果に対して、質疑を行い、新しい結論を出した。鈴木正夫、大久保洋子、桑島道夫、大東和重、高文軍、李麗君、胡金定、坂井洋史、井上薫らが新しい研究成果を提出している。

鈴木正夫の著書『郁達夫—悲劇の時代作家』<sup>9</sup>は、合計8篇の研究論文を収録しており、郁達夫が創造社<sup>10</sup>を脱退した後の文学活動について考証したものである。もう一冊の『スマトラの郁達夫—太平洋戦争と中国作家』<sup>11</sup>では、郁

<sup>8</sup> 平井博 (1983.1) (1985.12) 「郁達夫—その文学的模索」上下、「無名」第3号、第5号。転引高文軍 (2000) 「郁達夫研究を通じて見る中日両国の現代文学研究について」名古屋大学中国語学文学論集13、62頁。

<sup>9</sup> 鈴木正夫 (1994) 『郁達夫—悲劇の時代作家』、研文出版。

<sup>10</sup> 創造社とは：1921年(大正10)6月、日本に留学していた郭沫若、郁達夫、田漢などの中国人留学生らによって共同結成された、中国現代文学の社団である。

<sup>11</sup> 鈴木正夫 (1995) 『スマトラの郁達夫—太平洋戦争と中国作家』東方書店。

達夫の晩年の生活と死についての真相を述べている。

桑島道夫の「郁達夫における社会と芸術-滞日期、帰国前後の文芸観に見られる〈反抗〉の考察を中心として」<sup>12</sup>と「〈天才主義〉の背景・その2-郁達夫の「芸文私見」を中心として」<sup>13</sup>は、主に郁達夫と西洋浪漫主義作家、及び日本の私小説作家との比較を通して彼の芸術観と表現について検討している。

また、中国の研究者が日本語で日本の雑誌に発表したものもある。胡金定は、郁達夫の小説と旧体詩について研究し、1993年に「郁達夫の小説」<sup>14</sup>、1994年に「郁達夫詩試論」<sup>15</sup>を出版している。また1999年、張志晶は「中日近代文学の相互交流、影響関係の考察-郁達夫を中心に」<sup>16</sup>を出版し、2000年には高文軍が「郁達夫研究を通じて見る中日両国の現代文学研究について」<sup>17</sup>を出版している。さらに、2012年に高彩雯は「旅人としての郁達夫:文化史的角度からの考察」<sup>18</sup>を出版し、2013年には張洋が「郁達夫の文学における「自我」研究」<sup>19</sup>を出版した。

2012年1月に刊行された大東和重の『郁達夫と大正文学〈自己表現〉から〈自己実現〉の時代へ』<sup>20</sup>は、2014年に「日本比較文学会賞」を受賞した。大東和重は、郁達夫と大正文学関係を考察することを通して、伝統的な文学史と距離を置き、「もう一つの日本大正文学史」を書こうと試みたものである。

総説の方は、特に代表的なのは2005年の大久保洋子による「日本にある郁達夫の小説研究」<sup>21</sup>であり、郁達夫の小説に関する日本研究の総説である。大久保洋子は、論文の中で郁達夫の日本での受容過程は大体三つの段階に分けられるとしている。第一段階は1927年から1945年までで、竹内好の研究を代表とし、第二段階は1946年から1989年までであり、この段階は伊藤虎丸と鈴木正夫の研究を代表としている。第三段階は90年代から現在までとし、桑島道夫を代表とする。この3つの異なる時期に、日本の学者による郁達夫の小説研究は、それぞれ異なる観点と研究方法があったとした。

しかし、都市体験と郁達夫に関する研究は少ない、CiNiiで検索すると、以下の通りである。「郁達夫「沈淪」における風景描写から見る語りの視点」劉靚、『表現文化研究(12)』、19-26、2016-03。「郁達夫の「南遷」に描かれた房総の風景と人々」欒殿武、『城西国際大学日本研究センター紀要(3)』、61-71、2008。「郁達夫「沈淪」における名古屋と名古屋人の描写について」寇振鋒、『多元文化』(第7号)、103-117、2007-03。

<sup>12</sup> 桑島道夫(1995)「郁達夫における社会と芸術:滞日期、帰国前後の文芸観に見られる〈反抗〉の考察を中心として」『中国中世文学研究(28)』、95-114頁。

<sup>13</sup> 桑島道夫(1996.03)「〈天才主義〉の背景・その2-郁達夫の「芸文私見」を中心として」『人文学報(273)』、135-147頁。

<sup>14</sup> 胡金定(1993.09)「郁達夫の小説」『阪南論集人文・自然科学編29(2)』、1-8頁。

<sup>15</sup> 胡金定(1994.03)「郁達夫詩試論」『阪南論集人文・自然科学編29(4)』、21-29頁。

<sup>16</sup> 張志晶(1999)「中日近代文学の相互交流、影響関係の考察-郁達夫を中心に」『教育研究所紀要(8)』、67-73頁。

<sup>17</sup> 高文軍(2000)「郁達夫研究を通じて見る中日両国の現代文学研究について」『名古屋大学中国語学文学論集13』、43-63頁。

<sup>18</sup> 高彩雯(2012.10)「旅人としての郁達夫:文化史的角度からの考察」『東京大学中国語中国文学研究室紀要(15)』、96-124頁。

<sup>19</sup> 張洋(2013)「郁達夫の文学における「自我」研究」『比較日本文化研究(6)』、48-59頁。

<sup>20</sup> 大東和重(2012)『郁達夫と大正文学〈自己表現〉から〈自己実現〉の時代へ』東京大学出版会、155-160頁。

<sup>21</sup> 大久保洋子(2005)「郁達夫小説研究在日本」(「日本にある郁達夫の小説研究」)『中国現代文学研究叢刊』第5号、216-235頁。

これらは、特に日本と『沈淪』との関係に集中した研究であったが、本論では中国の都市も含め、都市全般に関する郁達夫の小説を考察した。

## 2-2 中国の先行研究

中国の学界における郁達夫の研究は、作家の創作とほぼ同時期に開始されている。1921年に郁達夫の最初の作品集『沈淪』が出版された後、彼の作品研究を始めた人物がいる。茅盾は1922年に『小説月報』（小说月报）第13巻第2号に署名雁氷の「通信」一文の中で、『沈淪』に対する自分の見方を提出した。彼は「『沈淪』の主人公の性格の描写はとても「真」である、首尾一貫しているが、作者の自叙の中にある霊と肉の衝突の描写は、失敗である。」とした<sup>22</sup>。茅盾は、この小説を詳しく分析していないが、この言葉は正確に郁達夫創作の真実性の特徴を概括している。その後、多くの作家と評論家が郁達夫の作品を評価した。しかし成仿吾らは郁達夫の作品を批判し、また、周作人らは客観的に批評し作品の芸術性を肯定した。

1980年代、中国文学は新時期<sup>23</sup>に入った、学界の思想が徐々に解放されて、郁達夫研究新しい段階に入った。各種の研究専門書と論文が次々と現れ、80年代中期には空前の盛り上がりを見せた。1982年、王自立、陳子善が共編した『郁達夫研究資料』（上、下）<sup>24</sup>では、前期の研究の全面的な整理を行った。

1985年、北京と富陽の両地で、郁達夫の殉難40周年を記念する座談会と学術討論会が開催された。郁達夫は「一人の天才詩人、一人の人文主義者、一人の真の愛国主義作家（胡愈之語）」<sup>25</sup>と評価され、歴史的地位と文学的地位を確立した。この検討会の後、研究方法と内容は大きな進展がなかったが、郁達夫の研究チームは益々増加し、研究成果も豊富になった。

2019年8月まで、中国「知網」<sup>26</sup>の中に、定期刊行物の一覧にキーワード「郁達夫小説（郁達夫小説）」を入力すると、合計1248例が検索できる。その中には「郁達夫小説（郁達夫小説）」、『沉淪』、「多余人」（余計者）、「自叙伝」、「私小説」、「春风沉醉的晚上」などのテーマが含まれている。また、

<sup>22</sup> 王自立、陳子善（1982.12）『郁達夫研究資料』（下）天津人民出版社、304頁。

<sup>23</sup> 中国新時期文学とは、一九七六年の文革終了後に改革開放政策が実施されると、長く文化的鎖国状態に置かれていた文化界は一気に花開いた。この時期の中国文学は「新時期文学」と呼ばれた。

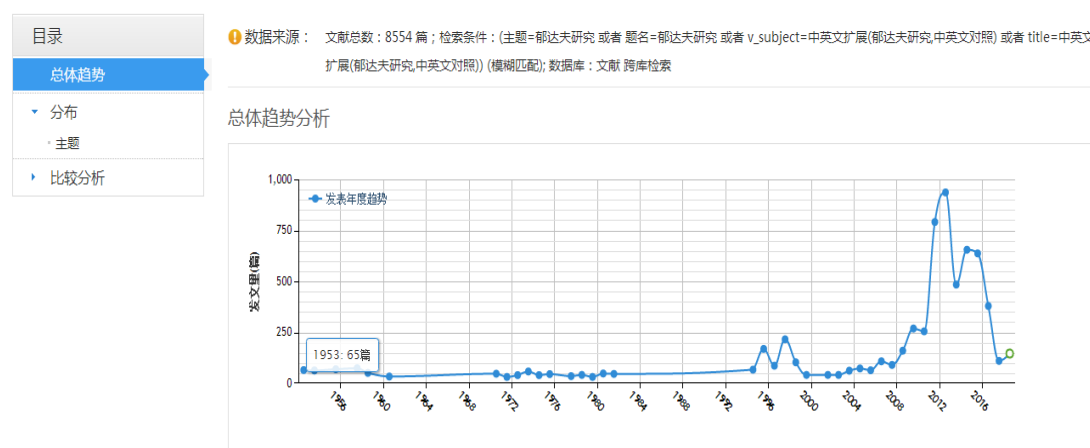
<sup>24</sup> 王自立、陳子善（1982.12）『郁達夫研究資料』（上、下）天津人民出版社。

<sup>25</sup> 王自立、陳子善（1982.12）『郁達夫研究資料』（上）天津人民出版社、88頁。

<sup>26</sup> 中国「知網」：中国学術情報データベース(CNKI:China National Knowledge Infrastructure)は、中国の総合的な学術情報データベースで、学術雑誌、重要新聞、博士・学位論文、重要学術会議論文などの各種データベースを収録している。

キーワード「郁達夫散文」（「郁達夫隨筆」）を入力すると、合計 97 例が検索できる。その中には「散文創作（隨筆創作）」、「游记散文」（「遊記隨筆」）、「叙事散文」（「叙事隨筆」）、「故都的秋」、「郁達夫散文」（「郁達夫隨筆」）などのテーマが含まれている。さらにキーワード「郁達夫旧体詩」（「郁達夫旧体詩」）を入力すると、合計 30 例が検索でき、その中には「旧体詩詞」（「旧体詩詞」）、「郁達夫旧体詩」（「郁達夫旧体詩」）、「艺术特色」（「艺术特色」）、「隐逸思想」（「隱遁思想」）などのテーマが含まれている。そしてキーワード「郁達夫研究」（「郁達夫研究」）を入力すると、中国と海外の文献合計 8554 篇が検索でき、その中には中国語文献 88 篇、外国語文献 8466 篇がある。郁達夫に関する研究は、このように海外への広がりを見せつつある。

#### 計量可視化分析—检索結果



【表一】キーワード「郁達夫研究」 総体趨勢図 文献合計 8554 篇<sup>27</sup>

表一の総体趨勢図からみると、1950年代から現在まで、郁達夫に関する研究は長く行われているが、特に1990年代中後期、2012年前後の時期は、中外学者による郁達夫の研究が最も豊富な時期である。

この8554篇の定期刊行物で発表した論文のなかには、中国語の文献が88篇ある。本論では、この88篇の論文を参考すると同時に、収集してきた1980年代以来の21冊の専門書、さらに他の一千篇ほどの代表的な論文の分析と整理を行う。時系列に従って、研究内容と方法から分類し研究する。

<sup>27</sup> <http://zz.xue1888.com/kns/Visualization/VisualCenter.aspx> (参照日：2019年8月20日)





【表二】キーワード「郁達夫研究」 中国語文献 88 篇<sup>28</sup>

表二から見ると、この 88 篇の論文の分布形態は、大体 1980 年代以来の中国の郁達夫研究の発展態勢を表している。中国「知網」のデータ統計によると、中国の研究者は「郁達夫研究」に関するテーマについて、1983 年から 1989 年までの間に合計 11 編、1991 年から 1999 年までの間に合計 15 編、2001 年から 2010 年までの間に合計 33 編、2011 年から 2019 年までの間に合計 29 編を発表している。これら論文の発表数から、最近の 20 年間の研究総数が前の研究をはるかに超えていることが分かる。

また、郁達夫研究は 1980 年代に小さなブームを巻き起こした後、90 年代中期に上昇し、2006 年は研究の最高峰の時期となった。2007 年の劉茂海による「新时期以来郁达夫其人其作研究综述」<sup>29</sup>はこの段階の研究をまとめている。

彼は、この段階に郁達夫研究の個人論著が大量に出現したことにより、研究領域が広がり、研究方法と視角は更に多元化し、研究チームも日に日に強大になったと考えている。このような研究態勢はその後数年間にわたり発展し維持された。

郁達夫に関する研究の中では、小説に関する研究数が最も多く、中国の「知網」でキーワード「郁達夫小説」を入力すると、共計 1248 篇の論文がヒットする。

<sup>28</sup> <http://zz.xuel888.com/kns/Visualization/VisualCenter.aspx> (参照日：2019 年 8 月 20 日)

<sup>29</sup> 劉茂海 (2007) 「新时期以来郁达夫其人其作研究综述」『西北第二民族学院月報』(哲学社会科学版) 110-116 頁。

目录

总体趋势

关系网络

关键词共现网络

分布

主题

研究层次

作者

机构

基金

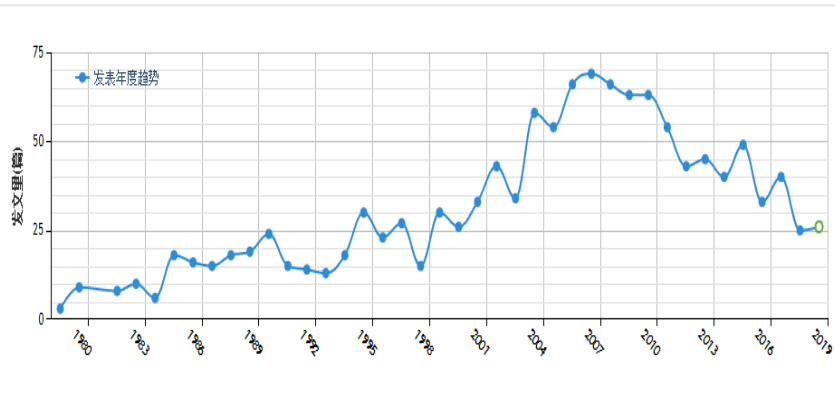
学科分类

文献来源

关键词

数据来源：文献总数：1248 篇；检索条件：(主题=郁达夫小说 或者 题名=郁达夫小说) (模糊匹配); 数据库：文献 跨库检索

总体趋势分析



【表三】キーワード 郁達夫小説 共計 1248 篇<sup>30</sup>

表三に示すように、郁達夫の小説研究のピーク時と全体研究のピーク時はほぼ一致している。その最高点は 2006 年前後である。中国「知網」のデータ統計によると、郁達夫の小説研究は、1979 年に論文 3 篇、1980 年から 1989 年までの間は総計論文数 120 編、1990 年から 1999 年までの間は総計論文数 204 編、2000 年から 2009 年までの間は総計論文数 416 編、2010 年から 2019 年 8 月までの間は総計論文数 284 編が発表されている。

しかし、キーワード「郁達夫 都市」を入力すると、ヒット数はゼロである。一部の論文の中には、郁達夫の小説における風景や都市景観、空間についての研究がある。その中には、2012 年第 10 期『中国现代文学研究丛刊』呉曉東の

「郁达夫与中国现代“风景的发现”」があり、この論文は郁達夫の小説と風景の関係を、地理学の観点から考察した。2013 年第 1 期『现代中文学刊』に発表された張斌の論文「郁达夫小说中的城市景观」で、論者は郁達夫の小説における都市景観を自然景観、社会景観と日常景観の 3 つに分けて分析したうえ、老舎の北京に関する文章と比較している。より総合的な研究とは 2014 年南京大学齐梅の修士論文『论郁达夫小说中的空间』で、アンリ・ルフェーヴル(Henri Lefebvre) の『空間の生産』(La production de l'espace, Paris:Anthropos, 1974) の理論を用いて、郁達夫の小説に登場する空間を、空間形態の観点から自然空間、社会空間と心理空間の 3 つに分け、流動性、絵画的性、象徴性の 3 つの特徴をまとめて、郁達夫の小説の空間の形成は、日本の「私小説」と中国の伝統的な文人の山水や詩歌、酒を愛する気持ちの両方から影響を受けたと指

<sup>30</sup> <http://zz.xue1888.com/kns/Visualization/VisualCenter.aspx> (参照日：2019 年 8 月 20 日)

摘した。また、独立の都市の空間研究に注目した論文もあり、例えば、何琛と段小軍の論文「论郁达夫笔下的上海空间意义生产」は、主に郁達夫の小説の中の上海、他の都市は研究していない。张文斌と瞿华兵の論文「郁达夫小说的安庆书写」のなかに、安慶も郁達夫の小説の舞台であり、これらの小説は 1920 年代の郁達夫の自己矛盾、苦痛と不安の反映でもあると論じた。李暉の「从郁达夫〈迷羊〉看二十年代安庆城市风情」<sup>31</sup>は、小説の観点から安慶の歴史の変遷を探る。李航春の「郁达夫与北京—郁达夫行旅系列之一」<sup>32</sup>のなかでは北京に関連するいくつかの創作について、郁達夫の文化的選択を考察した。韩洪举の「郁达夫对现代小说理论的贡献及其艺术论探析—兼论郁达夫小说创作中的江南时空故事书写」<sup>33</sup>は江南の文化的角度から郁達夫の小説を分析し、江南文化の深さを探究した。

これまでの研究は、郁達夫の作品の生じる源に集中し、作品の特徴と価値、外来文化の影響、同時代作家との比較などが多かった。郁達夫が接した都市文化と、その作品に対する影響についての研究は少なく、また系統的な分類分析は皆無である。したがって郁達夫の都市体験と創作に関する研究から、中国現代作家と都市との関係を探ることができると考える。

### 3 研究方法

文献研究法と比較研究法を用いて、都市の生活体験の郁達夫に対する影響について考察する。

先ず、郁達夫の文学活動を考察する。いつどこでどの作品を創作したか、彼のエッセイ、日記、手紙、創作ノート、親友の回想などから検証する。

そして、郁達夫の各都市における生活のあり方から、当時の都市文化、風景と人々の生活状態を考察する。

最後に、郁達夫と日本の大正作家との関連性を考察する。それぞれの作品を比較分析することで、日本国内の様々な文芸思潮がどれほど郁達夫に影響を与えたかを明らかにする。さらに、彼が大正文学から、何を理解し、何を吸収することで、自分の文学世界を作ったのかを考察する。

#### I 名古屋の啓蒙と東京の苦悶

日本は、1868 年から明治維新の変革を行い、欧米の制度を総合的に学んだ。

<sup>31</sup> 李暉 (1993) 「从郁达夫〈迷羊〉看二十年代安庆城市风情」『阜阳师范学院学报：社会科学版』第 3 期、57-61 頁。

<sup>32</sup> 李航春 (2012) 「郁达夫与北京—郁达夫行旅系列之一」『中文学术前沿』第 1 期、82-89 頁。

<sup>33</sup> 韩洪举 (2018) 「郁达夫对现代小说理论的贡献及其艺术论探析—兼论郁达夫小说创作中的江南时空故事书写」『河南大学学报：社会科学版』第 2 期、96-102 頁。

これにより政治、法律、教育、軍事、文化思想、軍事技術などあらゆる分野で急速に発展し、アジアの強国となった。

一方、中国は衰退期に入っており、清政府の一部知識人は、国が強くなるためには、他国の文明を学び、現代化を推進できる人材を育成する必要があると認識した。日本の思想、歴史、文化、習慣などは中国との共通点が多くあるため、清政府は様々な奨励制度を設け、留学生を日本に派遣した。

1906年、日本に留学した中国人は8,000人を超えた。多くの志のある若者たちが日本に向け海を渡った。魯迅、周作人、郭沫若、郁達夫、田漢、成倣吾など中国現代史上の有名な文化人が日本に留学したのは、そのような時代であった。

1913年9月下旬、郁達夫は日本に留学した。上海から乗船、神戸に上陸。大阪、京都、名古屋を見物しながら上京。10月から東京で生活を始め、小石川に長兄一家と同居。まだ17才の彼は自伝の中に次のように書いている。

秋雨がいくどか訪れて残暑も名残りなく去った。空広く晴れわたった九月下旬のある朝早く、私はわずか数冊の糸綴じの古書をたずさえ、中古の合服を着、兄について故郷をはなれた。<sup>34</sup>

それまで、郁達夫は外国の文学や文化に触れたことがなかった。杭州での高校時代、彼が好きであった戯曲は「桃花扇」と「燕子箋」であり、中国の古文である。これらの作品の中にある中国の伝統的な文人の道德意識や価値観は、彼に大きな影響を与えた。

郁達夫が日本にいた十年間は、日本の大正期にあたるが、日本の歴史の中でも、大正期は特異な時期である。この頃には、政治、経済、文化、人々の日常生活が大きく変化した。やがて、昭和時代の軍国主義が芽生え始め、経済が発展し、都市はかつてないほどの活況を呈し、文学や芸術も大きく発展していく。

大正期の日本文学は、ヨーロッパの自然主義、ロマン主義、耽美主義、リアリズムなどを吸収した。この時期の日本文壇には、さまざまな流派があらわれ、永井荷風、芥川龍之介、谷崎潤一郎、太宰治、志賀直哉、武者小路実篤、竹久夢二、泉鏡花、佐藤春夫、室生犀星、厨川白村等、多くの優れた文学者を生み出した。またこの時期は、日本近代文学の一大転換期とも言えるが、郁達夫はその衝撃を身をもって体験した。

郁達夫のこの時期の認識は次のように書いている。

私がそこに留学した時には、明治の世代はすでに維新の仕事を終えており、古い木には緑の枝が加わり、古い囊には新しい酒が入り、昔のままのものは残っていない。新興国には各所で活気にあふれて雄大で、繁栄する情景が現われている。新興国の人々は闊達であるし、我が東洋の古い国の氣息奄々たる人々にとっては、特に自国の文化の後進性を暴露した中国人留学生にとっては、それは絶大な脅威である。<sup>35</sup>

この自由奔放な時代の日本は、社会が安定し、経済の発展も著しく、人口は

<sup>34</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「わが夢わが青春」『現代中国文学6』、河出書房新社、31頁。

<sup>35</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「雪夜」『郁達夫全集』第四卷游记・自伝、浙江大学出版社、304頁。

急速に増加し、文明は大きな変革を遂げた。近代都市の出現は、明治時代の政治あるいは軍事中心の町の機能を変えた。相対的に成熟して複雑な都市を形成し、多様な都市消費文化の市場は人々の精神的イノベーションを促進した。

東京を訪ねる外国人に、私はいつもつぎのように説明せざるをえない。「東京は世界の首都のなかでも異例な都市だ。何しろ百年前の住宅すら、もはや見つけ出すのが難しいのだから……」

震災と戦災で東京の大半が二度も焼土と化し、しかも高度成長期の破壊と改造は、都市の風景を一変させた。西洋文明を貪欲に摂取してつくり上げられた明治期の独特の都市の相貌も、もはや絵や写真で見るとしかなく、といった異常な状態に我々は置かれている。過去の顔を失ったかに見える巨大都市東京…<sup>36</sup>

この時期には東京駅や凌雲閣、目印になる銅像などが次々と姿を現した。NHK出版の『カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年』を見ると、この時期の建物は西洋化し、英語の看板も出てきて、カレーやビール、チョコ、コーヒー、自動販売機等もあふれて、人々の思想と生活は西洋化の傾向があった。この時期はまた多くの文学者が登場してくる。

繁栄する日本都市は、郁達夫から見ると、「ダンスホール、バー、ミュージッククラブ、映画館などの文化施設は全面的にヨーロッパ化した、男女の衣装や昔の演劇のセットもセリフもチーズクリームの匂いが漂っている、銀座通りの店は洋館に変わり、店名もヨーロッパ語に変え…」<sup>37</sup>

このような都市環境の中で、郁達夫は中国と日本の都市文化の違いを感じ、新しい文化の思潮が少年期の彼に衝撃を与えた。

当時、郁達夫と一緒に日本へ行った留学生は、皆この現実に立ち至った。彼らは、新しい世界を観察し、新たなライフスタイルを始めたのである。「旅という異文化との出会いが、新しい文化的自己意識、集団的自己覚醒を生み出す。」<sup>38</sup>日本の都市のエキゾチックな文化は、留学生たちに近代都市や新しい思潮を歓呼させると同時に、弱国の民である自分たちへの強い劣等感や文化的アイデンティティの危機感を抱かせた。

1915年9月、郁達夫は兄の意思で名古屋第八高等学校第三部医科入学した。その後、第一部（文科）に転部、名古屋で4年間過ごした。当時、名古屋は今ほどの、大都市ではないが、施設も教師も充実しており、講義の内容も東京と大差はなかった。郁達夫はここで、近代文明の衝撃を体験した。都市的な生活環境は、郁達夫に新しい体験を与え、彼の価値観や美意識に影響を与え、創作の素材を提供した。

## I-1 日本における郁達夫の審美体験と創作素材

郁達夫は日本で十年暮らしたが、日中の文化的差異を意識しないことはなか

<sup>36</sup> 陣内秀信（1992）『東京の空間人類学』、ちくま学芸文庫、9頁。

<sup>37</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「日本の文化生活」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、287頁。

<sup>38</sup> 郭少棠（2005）『旅行：跨文化想像』、北京大学出版社、2005年版、18頁。

った。彼は普段の些細なことでも異なる文化の間の衝突と差異を感じた。特に中国の田舎文化と日本の都市文化は、彼を日本に対して複雑な気持ちにさせた。元々繊細で敏感な無口の彼は、さらに神経質になった。

我々は創造社初期の作家たちが書いたものには共通点が読める。それは『近代』日本への接触を通して、もう一度自分の祖国と中国人の時代遅れに対して焦りと危機感を覚えた<中略>彼らは日本人の生活と文化の素朴さ、簡素さ、平和、優美などに深い理解と愛情を表しながら、日本人が「支那人」を侮ることに非常に怒りと屈辱を感じた。<sup>39</sup>

しかし、郁達夫の日本での生活では、いじめや屈辱などの、あらゆる辛酸をなめたが、いざ帰国してみると、また悲しい気持ちになり、未練を残す。

この東洋の島で10年、この異国の地で、僕のバラの露のような青春は、枯れ果ててしまった。彼女には散々な目に遭わされたし、二度と足の裏にキスさせたくなかったけれども<sup>40</sup>、しかし、憎しみが深いだけに、いざ離れようとすると、逆に別れるのが惜しいような気持ちになってしまう。<sup>41</sup>

このような愛と憎悪の交じり合いが、彼の創作と生活に影響を与えた。同時に、郁達夫に大きいなプレッシャーがかかっていた。

もし、ある時代や社会に、生命を完全に支配する力があるとしたら、人生は日々消滅していくしかないだろう<中略>偉大な個性は、環境に左右されない。私たち個人は、一方では、環境や時代の影響から自由ではないものの、他方では環境や時代を創り出す主体でもある。<sup>42</sup>

こういう社会的関心と思考を続けているからこそ、郁達夫の作品にはより広い視野や豊富な内容がある。

### I-1-1 郁達夫の意識的覚醒

日本に来る前に、郁達夫はストライキ事件の首謀者の一人として退学処分を受けた。その後、転学先の奴隷化教育に不満を持ち、学校教育に絶望、独学を決意した。やがて、彼の胸の内には、日本への希望と想像を満ちあふれるようになった。

実際に日本に降り立った彼は、美しい日本海、瀬戸内海、長崎の風景を見て、自由自在の環境に来たと思い、日本のすべてに好感を持った。彼の「自伝」は、船が長崎に着き、瀬戸内海へ入るくだりを次のように叙している。

<sup>39</sup> 童晓燕（2011）『日本影响下的创造社文学之路』社会科学文献出版社、44頁。

<sup>40</sup> 「二度とは足の裏にキスさせたくなかったけれども」とは、二度と日本の地に足を踏み入れたくなかった、という意味である。

<sup>41</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「帰航」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、1-2頁。

<sup>42</sup> 郁達夫著、邝雪林等編（1983）『郁達夫文集』第五卷文论、花城出版社、85頁。

船は長崎港口に着いた。小さい島があちらこちらにあり、山青く水碧の日本西部のこの通商港の海岸で、私ははじめて日本の文化、日本の風俗習慣に接した。後年フランスのロチがこの海港のことを書いた美しい文章を読んでからは、一層私はこの海洋作家に対し深い敬意を覚えたのであった。以後帰国の途次長崎を通る度に、必ず胸がときめき、初恋の恋人に会ったような、或いは何十年も前に書いた恋文を読み返すような気がするのであった。長崎は今ではもうさびれてしまったが、私の思い出の中にはいつまでも天真活発な、処女のように清麗な印象をとどめている。

本日碇泊して、船は又錨をあげた。その日の夜、まわりが絵のように美しい瀬戸内海に入った。日本芸術の清淡多趣、日本民族の刻苦忍耐は、この沿路の風景、海のまわりの果樹園や開墾地を見れば、よくわかる。蓬萊の仙島というのはこの地方を指したのかどうか知らないが、中国から日本へ来て、瀬戸内海を過ぎ、兩岸の山光水色や、陸地の漁家農村を見たならば、あに秦の徐福ならずとも、必ずや神仙のすみかという幻想を起したに違いない。況んや私は当時まさに多情多恨、中国流の年齢で十八歳の青春期にあったのだ！<sup>43</sup>

しかし、郁達夫はすぐに中国人であることの屈辱を感じるようになった。「支那」とは中国またはその一部の地域に対して用いられる地理的呼称、あるいは王朝・政権の名を超えた通史的な呼称の一つである。日本では、江戸時代中期から広まったが、第二次世界大戦後は主に差別的意味合いが含まれる。当時、日本政府は、「中華民国（中国）」というその時期の正式国号を無視し、ことさら「支那」、「支那人」などと呼んで、中国と中国人をさげすむ態度をとった。これは、中国侵略戦争の際に唱えられた「膺懲支那」などというスローガンに端的に示されている。日本の中国人留学生が、日本のメディアに、侮蔑語である「支那」という言葉を取りやめ、国際慣行に則って中国を「中華民国」と呼ぶよう求めた。郁達夫は痛恨の極みである。

日本人は中国人をさげすんでいる。それはわれわれが豚や犬をさげすむのと同じだ。日本人はみな中国人を「支那人」と呼ぶ。この「支那人」なる三文字は、日本では、われわれが人を罵るときの「賤賤」よりもさらに聴きづらいものだ。いま彼は花も恥じらう乙女の面前で「おれは支那人なのだ」と自認せざるをえぬはめになったのである。<sup>44</sup>

彼は「雪夜」のなかにも、「支那」はどれほど屈辱と絶望を与えられたことについて書いた。

風が暖かい早春や、爽やかな晩秋に散歩をすれば、花を摘み、歌を歌い、水を汲み、山に登る同年代の良家の少女たちに出会えるはずだ。声をかければ必ず寄ってくる。話したり笑ったり、草の上に寝転んだり、持ってきたお菓子を食べたり、まるで夢の中か、酔った後のように、いつの間にか一日が矢のように過ぎ去ってしまう。そして、一度このような出会いの後、

<sup>43</sup> 小田嶽夫（1975）『郁達夫傳 - その詩と愛と日本』、中央公論社、12頁。

<sup>44</sup> 郁達夫著、駒田信二・植田渥雄訳（1971）「沈淪」『現代中国文学6』河出書房新社、57頁。

あるいはその最中に、喜びの頂点から、たちまち絶望の淵に落ちてしまうこともある。父や兄に育てられた、男に絶対服従の無邪気な乙女たち、弱国である支那という言葉聞いたとき、平常心やら人に対する好感度を維持できるのか。東洋の日本民族、特に若い女性の口から支那や支那人という名詞を聞いた人の心には、どれほど侮辱、絶望、悲しみ、苦しみが入り混じった感情が湧き上がるのか、日本に来たことのない中国人同胞には、想像もつかないものである。<sup>45</sup>

強国である日本は、郁達夫も含め、貧しく弱い中国から来る留学生に大きなプレッシャーを与えた。

内山完造は大連発行の邦字雑誌『新天地』（1938年9月号）の座談会の中で、「日本に沢山留学するけれども帰ると排日の急先鋒になるという傾向がある」のはどうしてなのかと尋ねられ、「支那人が日本に留学するまえ迄は国家のために命を捨てるのが最高の道徳だとは知らなかった」<sup>46</sup>

「支那」であることは、郁達夫の精神に打撃を与え、男女の関係がオープンな日本で、彼は「支那」という言葉に抵抗があり、本当の愛情を見つけることができなかった。

環境が変わり生活の様式がちがってしまい、言葉は通ぜず、経済行動も監督されて自由がなく、私は東京に住んでから三月の間、手かせ足かせこそないが、まるで牢獄にはいったような気がして、ひとり静かに思えば、家を離れ国を去った悲秋がようやく身を襲い、そぞろ懐郷の病が起きてくるのである。<sup>47</sup>

敏感である郁達夫に、自分は余所者であり、余計者であることを自覚させた。3ヵ月間東京で暮らした後、日本に対する印象が変わった。

### I-1-2 男女関係の新たな体験

郁達夫は、多くの中国人留学生と同じく、思春期から日本に滞在し、成長した。彼らは小さい頃から、伝統的中國の農村文化の中で育ち、田舎から出て触れた日本の文化は、彼らの価値観の形成や日常生活に計り知れない影響を与えた。留学生の中には、日本の文化に対して、受け入れ、共感する者もいれば、抵抗し、批判する人もいた。郁達夫は大きな自由を得たことに恍惚、狂喜しながら、大きな劣等感と孤独に打ちひしがれ、苦悩した。日本に暮らして10年の後、郁達夫は東京帝国大学経済学部を卒業し、作家となった。彼は、日本の急速な発展の中で中国の貧困と後進性を見抜き、受けた屈辱の中から中国の国

<sup>45</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「雪夜」『郁達夫全集』第四卷游记・自传、浙江大学出版社、306頁。

<sup>46</sup> 山本優子（2020）「日中作家の交流と日本留学の影響—創造者を中心に—」『中国語中国文化第17号』、178頁。

<sup>47</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「わが夢わが青春」『現代中国文学6』、河出書房新社、33頁。



際的地位の低さを理解したのである。また、彼が最も悩んだのは、日本の自由奔放な男女関係である。

都市は人間の性欲を解放するのに最適な空間である。物質的に非常に豊かな都市において、激化する社会的矛盾と科学主義が、人間のニヒリズムや世俗的快樂主義をもたらし、人間の理性の神話も感情の神話も崩壊させたのである。本能的な衝動、欲望だけが残った。

フロイトのような学者の研究が欲望の追求を正当化し、進んでいる避妊法が人間の欲望を増進させる。その結果、欲望が日常化され、都市文化における色情の文化と官能小説が生じた。

元来、日本文化において、性は民族の起源であり、崇拝の対象である。

日本の起源神話は、セックスと愛から始まる<中略>古代の人の自然神に対する崇拝は、性的な崇拝も含んでいる、古人は性に対して非常に率直で真剣である。<sup>48</sup>

日本では、神への敬意と賛美の表現としてだけでなく、農業の象徴として、性は宗教の活動の重要な要素である。日本の伝統的な祭りには、性的な崇拝に関わる風習がある。現在でも九州や名古屋などで、巨大な生殖器を神輿に乗せて練り歩く、五穀豊穰、万物育成、子孫繁栄を祈願する祭がある。<sup>49</sup>日本文学における情愛の描写には、そのような特徴が現れている。

平安時代からの紫式部の『源氏物語』、江戸時代の井原西鶴の『好色一代男』、近代の田山花袋の『蒲団』などの私小説、主に性や愛をテーマに、性に対してオープンな態度である。

それからおよそ百年後に活躍した作家三島由紀夫は、明治時代のこうした風潮を、うわべだけ取り繕おうとするものだとして激しい怒りをぶつけている。公衆の面前で裸体をさらすことや混浴など「蛮風」の証となる恥ずべき行為を禁じたのは、日本人が自分から「はしたない」と思ったからではない。<sup>50</sup>

性をテーマにした文学作品の多くは、性的な美しさを描くことで男女の恋愛の風情を表現している。

個人主義が進み、自分とは何かを深く考える姿勢も生まれてきた。作者が日々の生活で感じたことを事細かにつづる「私小説」が大流行したのも、このころだ。理想を真剣に追いかけた明治時代は完全に過去のものとなり、芸術家はロマンティックな恋と妖しいエロチシズムの極致を探ろうと懸命になった。<sup>51</sup>

李欧梵は、日本に滞在した中国人留学生たちについて次のように書いている。

<sup>48</sup> 叶渭渠（2005）『日本文化史』广西师范大学出版社、54頁。

<sup>49</sup> 刘达临（2005）『浮市与春梦—中国与日本的性文化比较』中国友谊出版公司、56頁。

<sup>50</sup> イアン・ブルマ著、小林朋則訳（2006）『近代日本の誕生』株式会社ランダムハウス講談社、59頁。

<sup>51</sup> イアン・ブルマ著、小林朋則訳（2006）『近代日本の誕生』株式会社ランダムハウス講談社、84頁。

こうした若い中国人の大半が、外国の思想、外国の習慣、日本の女性を無制限に受け入れるようになったのは、日本でのことだった。中国人留学生らのための民宿は、貧しい日本人の家庭、年配の女主人と娘が経営することが多く、また、遊女、レストラン、茶屋などがあり、誘惑の応接に暇がない、常にこの青年たちは欲望にかられる。<sup>52</sup>

日本のオープンな男女関係は、大勢の留学生に新たな「異邦体験」を実感させた。

国内にいたときに大半が古い慣習の家庭、精神上に伝統文化に押さえつけられて、退廃的な状態になっていた。日本に着いて、毎月の生活費は実家の仕送りに頼っているが、他の面では家族からの束縛から解放された。いい子ぶりをしなくてもよくなったり、年長者の前にはおとなしい顔をしなくなったり、愛し合えない時代遅れの妻と一緒に暮らさなくても済む。さらに中国社会での若者たちへの様々な圧迫もなくなった。新しい生活環境で自由自在に世界中からの色々な新思想を受けた。個性が段々よみがえって、自分の幸福を求める欲望も芽生えた。若者たちにとっては、最も幸せなことは自由恋愛だ。国内にはとても不道徳に見えた。<sup>53</sup>

これらの中国人留学生は伝統的な観念を持ち、現代的な日本の街に立って、欲望を望みながら怯えた。彼らは中国の田舎から日本の都市に踏みだし、都市のにぎやかさを楽しみながら苦しんだ。何度も街のネオンサインや女性の奔放さに衝撃を受けた。他人が欲望のままに生きて、自分は墮落したくない。

日本の性文化は、郁達夫の意志力に対して強い挑戦である。苦しい葛藤の末に、彼は大胆に性の苦悶を表現した。「雪夜」には、こう書かれている。

日本の風習に慣れ、自分の経済力を確保し、血縁がある兄弟と離れ、一人で東京に住む私は、街を散策したり、ホステルの冷たい灯の下で、最も感じたものは、男女の性的な暗示と祖国の立ち後れに対する大きな悲しみである。<sup>54</sup>

したがって、彼は毎日、小説を読む合間、カフェで一緒に飲む女の子を探す。酒と女の強力な攻撃で、意志の防御が崩れ、娼館へ向かった。その後、郁達夫は消極的で退廃的な性格になり、しばしば娼館を訪れ、酒に溺れたが、理想と野心を忘れなかったため、より多くの後悔と苦痛があったようだ。郁達夫はつきり意識していた。

東京の上流社会、特にインテリ階級や学生階級の間では、性的な解放の新時代がとっくに始まっていたのである。当時の名優衣川孔雀・森川律子らの妖艶な写真、化粧前の半裸の写真、婦人画報の淑女や貴婦人の書き記

<sup>52</sup> 李欧梵（2005）『中国现代作家的浪漫一代』新星出版社、85頁。

<sup>53</sup> 贾植芳（1991）「中国留日学生与中国现代文学」『山西师大学报』社会科学版第4期、42頁。

<sup>54</sup> 郁达夫著、吴秀明等編（2007）「雪夜」『郁达夫全集』第四卷游记・自传、浙江大学出版社、306頁。

し、東京の名士の妾の話など、世紀末のこの過渡期には、若い青年の心を揺さぶる対象や事件は、驚くほど豊富にある。イプセンの社会問題劇、エレンケイの恋愛と結婚、自然主義派の文人の醜悪な暴露、社会主義の刺激的な男女観、これらの問題が津波のように東京に押し寄せ、潔白な魂を持つ、孤高で、意志の脆い外国人の私は、この潮に泡となって、押し流され、渦巻き、溺れて沈んでいったのである。<sup>55</sup>

郁達夫は、何人かの日本女性と関係をもった。例えば、名古屋の下女后藤隆子、大松ホテルの女中植野、京都ホテルの女中玉儿、東京雪儿など。しかし、郁達夫の敏感で劣等感を持つ性格や、様々な理由でうまく恋愛ができなかった。このように、日本社会に溶け込めないことも彼の創作の源泉となった。

### I-1-3 日本の都市に溶け込めない苦悶

日本都市の現代的の実績は、郁達夫と他の中国人留学生にとって大きな心理的な圧力となった。彼らは初めて「弱国子民」という体験を味わった。こういう「弱国子民」という意識は、現代性からの圧力だけではなく、国と国の間の、文化の違いや民族差別などにも原因がある。1896年、日本に留学した最初の中国人留学生の中には、差別に耐えきれずに退学した学生もいた。魯迅の文章には、「中国は弱い国だから、中国人はバカなのは当然、60点以上の成績を取れば、それは彼らの能力オーバーである」<sup>56</sup>と日本人が中国人の知能を疑っていたと書かれているものがある。郭沫若も「我々は日本での留学で西洋の書を読み、東洋のいじめを受けておる。」<sup>57</sup>と書いている。

郁達夫もすぐにこの苦痛を感じた、日本の空間に入ると、郁達夫は自然に殻にこもり、他人の態度が非常に気になった。

私は日本で、世界の競争の中における中国の地位を知った<中略>日本にいて、私はずっと前に中国の今後の運命と4億5000万人の同胞が耐えなければならない煉獄の道を覚悟した。<sup>58</sup>

かつての教育背景と生活体験は郁達夫に精神的にも物質的にも苦痛を与えた、日本の都市空間に溶け込むことが難しく、彼は失望、不安、苦悶を感じ、自分のアイデンティティを見つけることが困難であった。彼は作品の中で、異国における寂しさや無力感を表現することが多い。

「雪夜」の中に、彼が書かれた日本はこうである。

根は深くはないが、枝は広がっており、発明や発見は見当たらないが、進歩は早い<中略>新興国には各所で活気にあふれて雄大で、繁栄する情景が現われている。新興国の人々は闊達であるし、我が東洋の古い国の氣息奄々たる人々にとっては、特に自国の文化の後進性を思い知らされた中国

<sup>55</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「雪夜」『郁達夫全集』第四卷游记・自伝、浙江大学出版社、306頁。

<sup>56</sup> 魯迅（1973）「藤野先生」『朝花夕拾』人民文学出版社、65頁。

<sup>57</sup> 郭沫若（1990）「三叶集・郭沫若致宗白华」『郭沫若全集』（文学編15卷）人民文学出版社、140頁。

<sup>58</sup> 郁達夫（1985）「雪夜」『郁達夫全集4』浙江文艺出版社、305頁。

人留学生にとっては、それは大いなる脅威である。侮辱されて、それは自業自得であるから。しかし、そこまで直接的に言わなくて、脅威であることはまちがいない。<sup>59</sup>

郁達夫の民族的自尊心は、日本で屈辱感を感じたため、この美しい風景が彼に期待する満足感を与えてくれるのかどうかを疑うようになった。彼は次のように書いている。

海が好き、高い山に登って遠望することが好き、世事を忘れて独居するのが好き、大自然を愛して人の世を厭う、こうした私の傾向はその半分は天性であろうけれども、華やかな青春時代に、四面海をめぐるこの島国日本に過ごした幾年かの生活が、無尽の影響を与えたことは疑いない。<sup>60</sup>

彼はしばらく東京に住んでいた後、苦痛を感じるようになる。

環境が変わり生活の様式が違ってしまい、言葉は通ぜず、経済行動も監督されて自由がなく、私は東京に住んでから三ヶ月の間、手かせ足かせこそないが、まるで牢獄にはいったような気がして、ひとり静かに思えば、家を離れ国を去った悲愁がしだいに身を襲い、そぞろ懐郷の病が起きてくるのであった<sup>61</sup>

「沈淪」のなかにもある。

「あの揺れ動く明星の下がおれの故国だ。おれの出生の地だ。あの星の下で、おれは十八年の春秋を過ごした。ふるさとよ、おれはもうお前と再び相まみえることもなくなった。」

歩きながら、彼はひたすら傷ましげな言葉ばかりを心にならべた。しばらく歩いてから、ふたたび西天の明星に目をやると、涙が驟雨の如く流れ落ち、あたりの景色がみな模糊としてきた。涙を拭き、歩みを止め、長嘆息したと、彼はとぎれとぎれにつぶやいた。

「ああ祖国、お前がおれを死なせるのだぞ」

「早く豊かになってくれ！強くなってくれ」

「お前のもとには、なお多くの苦しみあえぐ若者たちがいるのだ。」<sup>62</sup>

郁達夫が最初に日本で完成した短編小説三編「沈淪」、「銀灰色的死」、「南遷」は、1921年に短編小説集『沈淪』の中に収録され出版された。三つの短編は、いずれも日本で生活している中国人留学生の生活を描いたものである。彼らは都市で生活しているが、大自然の生活に憧れている。しかし、いったん都市を離れると、いつまでも名残を惜しむような感情は、都市生活に完全に溶

<sup>59</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「雪夜」『郁達夫全集』第四卷游记・自传、浙江大学出版社、304頁。

<sup>60</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「わが夢わが青春」『現代中国文学6』河出書房新社、32頁。

<sup>61</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「わが夢わが青春」『現代中国文学6』河出書房新社、33頁。

<sup>62</sup> 郁達夫著、駒田信二、植田渥雄訳（1971）「沈淪」『現代中国文学6』河出書房新社、59-60頁。

け込めないしるしである。

「沈淪」の主人公は、汽車が東京駅からだんだん離れるにつれ。

彼はただひとり三等車の車窓にもたれ、黙然と窓外の人家の明かりを数えていた。汽車は暗闇のなかを静かに進行していた。大都会の無数の灯火が、しだいにまばらにうつろいゆくころ、彼はふと胸中万感の思いに駆けられ、思わず目頭の熱くなるのを覚えた。中略。薄暗い電灯のもとで、しばし沈黙の時をすごしたあと、またハイネの詩集をひろげて詩を読みだした。<sup>63</sup>

「茫々夜」の中の于質夫も、住み慣れた大都会を離れると、波止場のそばの古いホテルに住み、都市への郷愁を強く抱いていた。

人間は、居住環境だけでなく自らの住む世界自体へも対処する能力、そしてそれらを改造する能力を、大きく伸ばしてきた。こうして人間は、生物コミュニティという基盤の上に、習慣や伝統に根づいたひとつの制度的構造を、ついにはつくりあげた。<sup>64</sup>

郁達夫は、人物たちの苦しみは、この居住環境の一部であり、この社会で生き延びることに無力であると、冷静に認識している。それ故、にぎやかで、汚くて、混沌とした都市から離れたいが、どこに行けばいいのかわからないのだ。

日本の都市環境と雰囲気、郁達夫の孤独感と漂泊感を生んだ。「沈淪」の中に、見知らぬ都市にきた主人公は、都市の真ん中で砂粒のように、人混みの東京で、孤独感を持って進んでいく。彼は名古屋に到着した時、まだ学校は始まっておらず、学生もいなかった。宿泊したホテルの客は彼一人で、昼間は何かあったが、夜、ホテルに一人になると、恐怖心が襲ってきて、泣きそうになった。それでもこの時、郁達夫が経験した孤独は、表層の孤独である。この後、孤独感をさらに深めていったため、日本人の同級生と対等に付き合えないほどになった。繊細で疑り深い彼は、臆病で無力である。彼は、自分の弱さと国の後進性を憎んでいた。そんな思いから、彼は精神的に苦悶し、日本を恨むようになった。

ルサンチマンとは全く明確な原因と結果とを伴う或る種の心的自家中毒。中略。第一に、その情緒が湧き上がる前に、一度他の人に傷つけられたことがあること。第二に、他人の傷にすぐ反応するのを我慢すること（平手打ちはすぐ打ち返せば恨みっこなし）。第三に、我慢することは、少なくとも一時的な「無能感」「軟弱感」である。<sup>65</sup>

郁達夫は極端な民族主義者ではなかった、「支那人」と侮辱されても反撃できず、我慢の時間が長かったことを悔しむ。この悔恨は漂泊感と危機感と共に、日本を離れるまで彼から消えなかった。帰国の途上、自分に質問した。

<sup>63</sup> 郁達夫著、駒田信二、植田渥雄訳（1971）「沈淪」『現代中国文学6』河出書房新社、44-45頁。

<sup>64</sup> ロバート・E・パーク著、町村敬志、好井裕明編訳（1986）『実験室としての都市——パーク社会学論文選』御茶の水書房、176頁。

<sup>65</sup> 张志扬（1999）「创伤记忆——中国现代哲学的门槛」上海三联书店、198頁。

なんで日本なんぞへ来たのか。なんで学問なぞにあこがれたのか。日本にきた以上、日本人に侮蔑されるのもやむおえないではないか。中国よ、お前はなぜ強くないのか。おれはもう我慢ができないぞ。

故郷には美しい山河があったではないか。花も恥じらう乙女がいたではないか。それなのになぜ東海の島国なんぞへやって来たのだ。<sup>66</sup>

この都市に溶け込めない漂泊感と危機感が、彼の人生の選択に影響を与えた。東京で勉強していた郁達夫の兄は、このような時代だからこそ、医者になるのがいいと考え、郁達夫に医学部進学をすすめた。しかし、郁達夫はその後、医学を捨てて文学の創作に専念することにした。その理由の一つは、郁達夫が日本の都市で体験した苦悶や屈辱は、創作で鬱憤を晴らせたからである。

郁達夫はこの漂泊感と危機感を払拭したいが、うまくいかなかった。その結果、この苦悶から逃れるための一つの方法として、死を考えた。「帰航」のなかで、悲鳴を上げた、「日本、日本、私は死にます。死んでも二度と戻ってこない。」<sup>67</sup>彼の作品の中に、多くの人物は不慮の死を遂げた。「銀灰色的死」の主人公は街中で、脳出血で急死する。「沈淪」の主人公は海に身を投げる。

「ささやかな供えもの」の主人公は水に落ちて溺れる。「唯命論者」の主人公は河へ飛び込み自殺をした。生活の重圧の下で、救いを求める当てがない人々は、大きな代償を払うことになるのである。

## I-2 日本の都市体験は郁達夫の創作を啓発した

郁達夫は日本で創作を始めた。日本の都市生活の深刻な体験と豊富な読書量が、彼の創作意欲を啓発した。日本の文学上の先人たちとの交流や励ましもあり、郁達夫の基本の創作思想やスタイルは日本で形成された。

### I-2-1 豊富な読書量と思考

13歳から来日した郁達夫は、日本文化に対して、衝撃を受けたが、しだいに慣れて、順応した。しかし、精神的な孤独感や苦悶は薄れるどころか、より悩み、より深くなった。彼は大量の時間を小説を読むことで費やし、自分と似たような性格、気質、体験を持つ作家たちから精神的な慰めを求めた。

19世紀末から20世紀初の十数年間の日本滞在で、ヨーロッパの自然主義、ロマン主義、耽美主義、リアリズムなどを吸収した。

この時期の日本文壇は、さまざまな流派があらわれ、多くの優れた作家を生み出した。「安定した文学概念を形成し、文壇の成果が豊富で、日本近代文学の黄金期と呼ばれる。」<sup>68</sup>

<sup>66</sup> 郁達夫著、植田渥雄、駒田信二訳（1971）「沈淪」『現代中国文学6』河出書房新社、41頁。

<sup>67</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「帰航」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、8頁。

<sup>68</sup> 奥野健男（1983）『日本文学史』中央公論社、86頁。

深い中国古典文学の素養と詩人的気質を持ち、文学的感覚が鋭い郁達夫は、こうした環境の中で水を得た魚のようであった。彼は、当初志していた経済学の勉学を諦め、文学作品を読むことに多くの時間を費やした。彼は人気がある日本の作家の名作を読み、そして欧米諸国から日本語に翻訳された作品を読んだ。高等学校の四年間で、東西の近代文学のかなりの部分を読み尽した。

高等学校に四年間在籍したが、合計で読んだ本はロシア、ドイツ、イギリス、日本、フランスの小説を合わせて千冊に及ぶ。その後は東京帝国大学に入ったが、小説を読む癖はなかなか治らない、いまでも、食事と仕事以外で、一番読んだのはやっぱり小説だ。<sup>69</sup>

これだけの読書量は、彼の性格や気質、その後の創作思想、理念、手法などに大きいな影響を与えた。書の選択では、例えば、性の苦悶を感じたから、性的な描写や性的な暴露が多い作品を選ぶようになった、D.H. ロレンス (David Herbert Richards Lawrence) の詩的な性描写がある作品を選び、また、自身の不幸な体験から、悲しい体験をした作家や、苦しみを物語る作品、フョードル・ドストエフスキー (Фёдор Михайлович Достоевский) の小説を選ぶようになる。詩歌が好きなので、テオドール・シュトルム (Hans Theodor Woldsen Storm) を読み、貧困、病気、幻滅、死について深く思考した。孤独で、鬱な彼は、イワン・ツルゲーネフ (Иван Сергеевич Тургенев) も読んだ。内面世界は反逆的であり、表面は退廃的であり、病的でもあるオスカー・ワイルド (Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde) の作品も好きだった。くわえて、日本で流行っていた私小説は、作家の内面世界を中心として、果敢に自分の私生活を暴露し、精神と肉体の衝突を表現したものであり、変態心理さえも描写されており、郁達夫はそれに強く共鳴した。

当時の日本の代表的な私小説作家は、佐藤春夫、田山花袋、葛西善蔵、谷崎潤一郎らである、これらの作家達は郁達夫の創作にかなりの程度影響を与えた。

日本での都市体験は、郁達夫に大きな圧力を与えたが、彼の生命の活力を奮い立たせた。開放的な日本の大正文化の雰囲気の中で、自由と民主主義思想の影響を受け、自我意識を覚醒させ、強烈な創作意欲を抱くようになった。留学生活が終わりに近づいた1921年、「文字ゲーム」のような態度で創作していると自ら書いているが、その時期に創作した作品は、中国文壇に衝撃を与えた。

本を読みながら、郁達夫は人生のさまざまな疑問について思考した。特に、「性の苦悶」と「生の苦悶」を深く探った。

郁達夫は最初に生み出されたのは「性の苦悶」である。彼は生理学的に見ると、自分は「20代の青春が自分の体の中で伸展して、性的な苦悶は抑えきれない。」<sup>70</sup> 心理学的に見ると、長い抑制状態によって、郁達夫は生理的な苦悶を引き伸ばして、内心の苦悶として扱えるようになった。その結果、彼は内心の苦悶を解消するために、大胆な表現方式を選んだ。彼の小説の人物は、ほぼ抑えきれない性的な苦悶を抱えており、創作の過程で、自分の苦悶を発散さ

<sup>69</sup> 郁達夫著、邝雪林等編 (1983) 「五六年来創作生活的回顧—〈過去集〉代序」『郁達夫文集』第七卷 文論・序跋、花城出版社、178頁。

<sup>70</sup> 郁達夫著、吳秀明等編 (2007) 「雪夜」『郁達夫全集』第四卷 游记・自傳、浙江大学出版社、306頁。

せ、解消することが出来た。また、郁達夫は、異国の都市に住み、弱国の民の屈辱を感じながら、努力して生きる人々の「生の苦悶」も描いた。

郁達夫の苦悶に対する思考は日本大正期の有名な文芸理論家厨川白村と似ている。二人とも文芸の起源は人の生命力が抑圧された結果であり、人の苦悶の反映であり、文芸創作は霊肉の衝突、人間の苦悶の表現であると考えている。ともに文芸は自我の真実を暴露し、自我を表現し、主観に忠実であるべきと主張した。

近代の頹廢主義の原因を「外的生活の圧迫」と「内的生活の苦悶」において見るものであった。（言い換えれば、これは、郁達夫が、白村らを媒介にして、近代文学の特徴を、まず圧迫された自我の悲痛の表現——すなわちいわゆる「苦悶の象徴」——という点に見出していたことを意味するとも言えよう。）<sup>71</sup>

厨川白村は「文芸が人間の苦悶の象徴である」という有名な論点を提出した。創作の衝動の源は、生命体の中の苦悶である。創作の目的はこの苦悶を提示するだけではなく、この苦悶を超えるべきである。

強大なる二つの力の衝突から生ずる苦悶懊悩の所産に外ならない。わたくしは文芸の基礎をこの点に置いて解釈して見たいと思ふ<中略>生命の力は人間生活の根本なり。<sup>72</sup>

要するに、生命力が抑圧されて生まれた悩みは文芸の根底をなすという解釈である。彼は、苦悶の原因は社会が「個性の表現」を抑えたためで、個人の生命は現実の中で様々な抑圧を受け、精神的な苦悶を招き、人の精神的な苦悶は「内在生命力」と「外在社会」の間の矛盾から来たと考えている。彼は、文芸は厳粛で沈痛な人間苦の象徴である。

われらの生命は天地万象に普遍なる生命である。しかしこの生命の力が或る個人に宿って、その「人」を通じて表わされる時、それはやがて個性となって活躍する。<sup>73</sup>

すなわち、自由と解放を求めてやまざる生命の力は外部からの抑圧と強制を完全に離れ、絶対自由な心境に立って、個性的な唯一の世界を表現することができる。

この苦悶は生と戦い、生の抑圧に由来し、生まれつきのものであり、最終的には文芸によって表現される。厨川はこのような抑圧と苦悶は生来のものであると考え、次のように述べる。

さう云ふ苦悶を経験しつつ、多くの悲惨な戦ひを戦ひつつ、人生の行路を進み行くとき、われわれは或は呻き或は叫び、怨嗟し号泣すると共に、時

<sup>71</sup> 伊藤虎丸(1961)「沈淪論」『中国文学研究第1号』中国文学の会、70頁。

<sup>72</sup> 厨川白村(1924)『苦悶の象徴』改造社、4-5頁。

<sup>73</sup> 厨川白村(1924)『苦悶の象徴』改造社、7頁。



にまた戦勝の光栄を歌ふ歓楽と讚美とに自ら酔ふことさへ稀ではない。その放つ声こそ即ち文芸である。痛手を負ひ血みどろになって、悶えつつも、また悲しみつつも、諦めんとして諦め得ず、思ひ止めらうとしても止まることの出来ないほどに強い愛慕執着を人生に対して持つときに、人間が放つ呪詛、憤激、讚嘆、憧憬、歓呼の声が即ち文芸ではないか。<sup>74</sup>

芸術家の使命はこの苦悶を掘り起こすことである。厨川白村は文芸に功利価値がないと強調し、作家の自我、個性と生命に対する絶対的で純粋な表現こそが文芸の真の目的であると考えた。

郁達夫も人生の苦しみと苦悶が、彼の創作の根源だと考えている。『蔦蘿集』の自序の中には、「人生は究極の悲哀の結晶であり、世界に快樂があるとは信じられない。」<sup>75</sup>と述べた。日本に留学した約10年間、日本と西洋の作品を貪り読んだ。これらの作品は彼の自我意識を呼び起こして、魂の深いところの苦痛と芸術の衝動を感じさせた。そこで、『沈淪』を発表したのはちょうどその頃だった。「沈淪」を書くことについて、彼はこう書いた。

感情的には、無理な影が映っていません。書かなければならないと思います。このように書くしかないと思います<中略>人生は十八九から二十余まで、ロマンチックな叙情時代を経なければならぬ。私のこのような叙情的な時代は荒々しく残酷で、軍閥の専権の島国で過ごしました。祖国の陸沈を見て、異郷の屈辱を身にしみ、感じて考えて経験したすべでは、失望と悲しみしかない。夫を亡くしたばかりの若い婦人と同じように、力もなく、勇気もなく、悲しみの内に、悲鳴をあげる。<sup>76</sup>

「演劇論」のなかでは、彼は現代人として、二つの問題を抱えていることを提示した。その二つの問題の一つは自我の発見と個性の拡大、もう一つは「恋愛は性」の問題と「生死は運命」の問題である。彼から見ると、芸術は苦悶の象徴である。人の生の苦悶、性の圧迫と死の恐怖を反映する。

個人から社会に対する反抗は、人間の意志が外部生活の対する反抗である。この重い意志が内に転じると、個人の霊肉の闘争になり、あるいは人と神祕の威力（死）の闘争になり、これらの内心の闘争の中から発生した苦悶こそ、絶対的苦悶である。<sup>77</sup>

郁達夫は自分の創作の中でも「苦悶」のテーマを堅持していて、これは彼の初期の生活の経歴と関係がある。彼の初期の作品は「性の苦悶」を反映している。例えば「沈淪」や「南遷」などは、主人公が性に対する苦悶と迷いを表している。「沈淪自序」のなかにも、「沈淪」はひとりの青年の病的心理を描写している、青年の憂鬱症 Hypochondria の解剖と現代人の苦悶である。すなわ

<sup>74</sup> 厨川白村（1924）『苦悶の象徴』改造社、44頁。

<sup>75</sup> 郁達夫著、邨雪林等編（1983）『郁達夫文集』第七卷文論・序跋、花城出版社、137頁。

<sup>76</sup> 郁達夫著、邨雪林等編（1983）『郁達夫文集』第七卷文論・序跋、花城出版社、250頁。

<sup>77</sup> 郁達夫著、邨雪林等編（1983）『郁達夫文集』第五卷日記、花城出版社、57頁。

ち性の要求、霊肉の衝突であると述べている。<sup>78</sup>

後期の「春風沈酔の夜」や「過去」などは、生の抑圧と苦悶の表現である。特に「春風沈酔の夜」は、性の苦悶から生の苦悶になった代表作である。

私は、彼女のこんな単純な態度を見て、心にふと一種不可思議な感情がわきおこった。私は両腕をのぼして彼女を抱きすくめたくなった。しかし、私の理性が私に命令した。

「こら、悪いことをしてはいけない。貴様はこの純潔な処女を毒殺するつもりか。悪魔！悪魔！貴様は愛人をもつ資格なんかないのだぞ！」

<中略>

この少女はじつに可憐だ。しかしおれの今の境遇は、彼女にさえおよびつかない。彼女ははたらきたくないのに、仕事が彼女を強制している、俺は、はたらきたくても仕事がない。

筋肉労働をしようか。あゝ、しかし、おれのこのやせ腕では人力車一台引く力もない。

自殺！おれに勇気があれば、とっくにやっているさ。<sup>79</sup>

「关于小説的話」の中では、「苦悶を描き、性の苦悶よりも重大な生の苦悶を描くことだ、性欲が人生のすべてではないからである。」<sup>80</sup>と述べている。

厨川白村は文学創作の衝動が作家自身の内心の苦悶から生まれると考え、作家はなるべく忠実にありのままに表現するべき、そうすれば、作家の自我と個性が表せる。郁達夫は、作家は自身の社会に対する見方及び自分の感情を、文学を通じて、内心を暴露するべきであり、文学は作家自身の感情や情緒そのものを表現すべきであると強調した。

日本の自由な欲望を表現した文学に触れ、理解し、共感した後、郁達夫は苦悶に対する新たな考えに到達した。文学創作は、苦悶からの脱却という機能を果たし得るのだ。こうして、彼は自分の文学的な命題を打ち出した。初期の郁達夫は個人体験を非常に重視して書き、彼はこのように考えた。

私は全ての作品は作者の自叙伝と思う。<中略>私はある方面の経験がない人は、決してありもしないことをでっち上げることはできない、そして決してこの方面の題材を小説に書いてはいけない。だから、私はプロレタリアの文学は、プロレタリア自身が創作しないといけないと主張する。<sup>81</sup>

郁達夫の言う「経験」そのものは、作家自身と個人生活に直接関係がある心身の経験である。「偽り、不確実なもの、実際と合わないことは、作者が書くべきことではないと思う。」<sup>82</sup>彼から見ると、どの文豪が書いた殺人者か、泥棒は、全部実際の体験者に嘲笑されるだろう。それ以外に、彼はまた日記文学

<sup>78</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）『郁達夫全集』第七卷詩詞、浙江大學出版社、149頁。

<sup>79</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「春風沈酔の夜」『現代中國文學6』河出書房新社、71-72頁。

<sup>80</sup> 郁達夫著、邝雪林等編（1983）「关于小説的話」『郁達夫文集』第六卷文論、花城出版社、86頁。

<sup>81</sup> 郁達夫著、邝雪林等編（1983）「五六年來創作生活的回顧—<過去集>代序」『郁達夫文集』第七卷文論・序跋、花城出版社、180頁。

<sup>82</sup> 郁達夫著、邝雪林等編（1983）「再來談一次創作經驗」『郁達夫文集』第六卷文論、花城出版社、146頁。

を高く評価した、ありもしないことをでっち上げることに反対した。しかし、当時の中国文壇は郁達夫のこういう文学的主張を決して受け入れず、彼は多くの非難を受けた。このため、郁達夫は自分の文学的主張を言い直した。

かつて『過去集』の序で書いた「芸術品は全部芸術家の自叙伝である」という表現は、色んな誤解を招いたので、ここでもう一度説明する。私はあの時、作家にとって経験が一番重要である。経験がない、想像だけで作ったものは、本当の天才作家しかできない、平凡な吾輩は、作品の中で少し力を発揮したいと思うなら、実際の経験と離れず、リアリズム (Realism) の原則を従わざるを得ない。これは私の真意で、これは誰でもが認めるの一つの原則である。<sup>83</sup>

郁達夫の体験を熟知する読者は、彼が作った「質夫」、「文樸」、「彼」、「私」などの人物から、作者自身の影を見つけることができる。

郁達夫の小説には、人間の本能を大胆に表現している、人物の性的な苦悶だけでなく、生の苦悶も描かれている。個人の不幸から人々の不幸を見出す、その苦痛の根源である社会を批判する。

## I-2-2 日本の作家との交流

郁達夫は1914年7月、官費生の資格を得て、東京第一高等学校特設の予科に合格。最初、文哲経政等の第一部に入り、後に医科の第三部に移る。同期に郭沫若、張資平がいた。8月末、長兄一家が帰国し、給費生となる。郭沫若が『論郁達夫』で回想するところによれば、郁達夫は英語、ドイツ語に長じ、中国文学の素養深く、旧体詩の作者として留学生間に知られていたとう。勤勉な学生であったが、このころツルゲーネフの『初恋』と『春潮』を英訳で読み、はじめて西洋文学と接触、以後急速に文学への耽溺が始まり、後には課業を放置して「当時流行のいわゆる軟文学作品」を読むに至る。

東京での短い滞在の後、1915年9月、兄の意思で名古屋第八高等学校第三部医科入学。1916年9月第一部(文科)に転部。

1915年から1919年までの四年間、郁達夫は名古屋で生活した、名古屋の生活環境は彼の人生と創作を一層豊かなものとした。名古屋の生活は、「沈淪」等の作品の素材を提供した。名古屋第八高等学校は、都市から遠く離れているが、新設であったため、設備や教師も優れて、多様な講義と豊富な書籍を提供した。郁達夫に世界を観察するための扉を開いたのである。

名古屋での生活は、彼に人生や創作の思考のきっかけとなった。郁達夫は授業にほとんど出ず、友人たちと酒を飲み、詩を詠むことが多かった。よく一人で田舎に出かけ、公園で漢詩や外国の詩、自作の詩を声に出して朗読していた。

郁達夫は本格的に文学へ没入した。ツルゲーネフからトルストイ(Лев Николаевич Толстой)、ドストエフスキー(Фёдор Михайлович Достоевский)、ゴーリキー(Максим Горький)、チェーホフ(Антон Павлович Чехов)といったロシアの作家、さらにドイツの作家の作品に転じ、高校在学中に読んだに露、獨、

<sup>83</sup> 郁達夫著、卞雪林等編(1983)「達夫代表作」自序『郁達夫文集』第七卷文論・序跋、花城出版社、187頁。

日、英、佛の小説は一千冊程にも及んだ。日本の作品では、近代文学だけでなく、『源氏物語』や近松の作品などにも目を通した。<sup>84</sup>それから長い年月が経って、彼はこの時期で得たものを『文学概论』などの評論書に収録した。特に外国の理論家の各種の文学ジャンルの特徴に対する分析などを重点的に紹介し、世界文学の発展の歴史と各国の文学状況を探求する。彼の『文学概论』の中の外国語資料の参考文献は以下の通りである—M. Arnold、Essays in Criticism、I、II series、M. Arnold、Essays in Literature、W. Bagehot、Literary Studies、2 vols、E. Björkman、Is There Anything New under the Sun?、J. Morley、Studies in Literature、R. G. Moulton、Modern Study of Literature、W. Hazlitt、Spirit of the Age and Lectures on English Poets 等 17 種類あり、「演劇論」では—B. H. Clark、Continental Drama of To-day、Ditto、European Theories of Drama、Goldman、Social Significance of the Modern Drama、A. Henderson、European Dramatists B. Matthews、The Development of the Drama 等 13 種類ある。西洋の研究者の論述以外には、郁達夫は木村毅の『小説研究十六講』、有島武郎『生活と文学』、楠山正雄の『近代劇十二講』などの著作を引用している。このように、郁達夫は西洋と日本の理論資源を参考しながら、著作を書き、その後、中国現代文学の発展に大きな役割を果たした。

1916 年春、日本の漢文学家の服部担風と知り合いになり、服部担風の弟子富長蝶如により、また八高にいる時、郁達夫は服部担風を訪ねた。

先生がすぐに、彼を書斎に通して、面会したのは言うまでもない。彼はそこで、一時間ほど先生と話をした。いろいろの話題が出た。彼が『源氏物語』を読んだということは先生を驚かしたし、『西廂記』を詳しく読んだということは、先生を感心させた。<sup>85</sup>

この訪問を詠んだ詩が 6 月 14 日付新聞の漢詩欄に掲載されている。  
訪担風先生道上偶成（担風先生を訪れ、道のべに偶成る）

行尽西郊更向东，（西郊を行き尽くして更に東に向かう）  
云山遥望合還通。（雲山遥かに望む合しまた通ずるを）  
過橋知入詞人里，（橋を過ぎて詞人の里に入るを知る）  
到处村童説担風。（到る処の村童担風を説く）

この詩は服部担風は次韻の詩で返事した

弱冠欽君来海東，（弱冠にして君が海東に来たるを欽し）  
相逢最喜語音通。（相逢うて最も喜び語音通ずるを）  
落花水榭春之暮，（落花水榭春の暮）

<sup>84</sup> 伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫編（1990）『郁達夫資料総目録附年譜』（下）、東洋学文献センター叢刊、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、217 頁。

<sup>85</sup> 稲葉昭二（1982）『郁達夫その青春と詩』東方書店、144 頁。

話自家風及国風。(話は家風より国風に及ぶ)<sup>86</sup>

その後、郁達夫は服部担風が主宰する「佩蘭吟社」の定期集会に参加し、彼が編集した「新愛知新聞」の漢詩欄で旧詩作を発表し始めた。1916年6月26日「新愛知新聞」でまた二回登稿し、再び読者から高い関心と賞賛を得た。

郁達夫は第八高等学校にいる時に、旧体詩以外に、八篇の口語体の小説とエッセーを書いた、その素材は名古屋の生活に関係がある。郁達夫は「五六年来創作生活的回顧」のなかで、「金丝雀」「桜花日記」「相思樹」「病中歲月」

「芭蕉日記」「晨昏」「雨夜巢」、「一人の留学生と日本少女との恋愛物語を語った小説」について言及した。その中の「雨夜巢」は、当時名古屋で知り合った篠田梅野との交情を描いたものであったようだ。<sup>87</sup>これらの作品は郁達夫の小説のスタイルを定めた。

名古屋での生活の間に、郁達夫はまた多くの旧体詩を創作した。その内容については、主に名古屋と周辺の風景の描写である。『郁達夫詩詞集』の中には、郁達夫が第八高等学校にいる時期に創作した232編の旧体詩が収録されている。その中には、『第八高等学校校友会雑誌』に載せた詩が28編あり、『新愛知新聞』（『中日新聞』の前身）に載せた詩が46編ある。また『文字禪』に3編、『随鳴集』に2編を載せている。

これらの作品は名古屋のことを書いていたが、郁達夫はここで都市文化の衝撃を感じ、多くの作家と同様に、生活の物質化問題について深く思考した。

郁達夫が実際に小説を執筆していた頃、彼は、当時の私小説作家に強い関心を寄せていた。その中で谷崎潤一郎と佐藤春夫などの小説が気に入った。1920年、田漢の紹介で新進作家の佐藤春夫を訪ねるようになる。2人は知り合ってから、日本にいる時はよく会っていた。郁達夫は佐藤春夫を崇拜し、二人は書信のやり取りも多く、いつ訪ねてもよい関係であった。1927年、佐藤春夫が中国にいる間、郁達夫は丁寧に応接した。約一ヶ月間、郁達夫は佐藤と上海文芸界の友人達との面会交流を催し、杭州への遊覧も共にした。1936年3月魯迅が世を去った後、日本に行った郁達夫は東京で佐藤春夫と面会し、その後一緒に「大魯迅全集」の翻訳予備会に出席した。同年、郁達夫は佐藤春夫の住まいを訪ねることになる。二人の友情は日中戦争の勃発と共に危機をむかえた。その契機となったのが、1938年3月に、佐藤春夫が発表した小説『アジアの子』である。その中で佐藤は郁達夫と郭沫若を醜悪化したが、その二人は、自らの国を捨て家族と共に日本へ帰化したという人物像に作り変えた。

常識、言葉使い、教養、抱負などから見ると、日本の文士は優秀な人材である。文人の気節、判断力、正義感是一般人より優れたはずだが、疾風に勁草を知る、日中戦争の時こそ、これら文士の醜態が暴かれた。<sup>88</sup>

憤るあまり郁達夫は「日本の娼婦と文士」という一文を書いた。

<sup>86</sup> 稲葉昭二(1982)『郁達夫その青春と詩』東方書店、104-105頁。

<sup>87</sup> 寇振鋒(2007)「郁達夫「沈淪」における名古屋と名古屋人の描写について」『多元文化』(第7号)名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、115頁。

<sup>88</sup> 郁達夫(2007)「日本的娼婦與文士」『郁達夫全集』第十一卷文論(下)、浙江大学出版社、293頁。

## I-2-3 日本の都市体験に基づく創作

### I-2-3-1 日本の私小説

郁達夫の作品は日本の作家の作品を参考にした。評論家鈴木正夫は、「郁達夫の小説を読んだ日本人は、彼の小説は日本の私小説と共通点があることを感じた」と述べている。<sup>89</sup>

中国の伝統的な小説はストーリーと人物描写を重視する特徴がある、彼はこういう叙述形式を叙情形式に変えた。主人公の心理と感情の変化を重視する、この方法を使って自分の率直で、主観的な感情世界を表す。このような創作方法は中国現代小説に多大な影響を与え、高い思想性と芸術性をもたらした。

『沈淪』を発表した半世紀後、有名な米国籍学者夏志清は次のように評価した。

郁達夫は現代中国小説の初期にはとても重要な作家だ。筆で自分の弱点を完全に暴露出来るのは、彼一人だけだ。この書き方は、現代中国小説の心理と道徳の範囲を広げた。残念ながら、その後彼を真似した人達が欲情と頹廢にたくさん筆を運んでいたが、彼のように素直さと真面目な態度は一人もないのだ。<sup>90</sup>

郁達夫は『源氏物語』を原語で読める数少ない中国人留学生の一人である。この作品は、貴族の華やかな恋愛や男女関係を描いているが、郁達夫はこのような日本の伝統的の審美意識に直接触れることになった。1914年から1919年、彼は当時流行っていた恋愛小説を多く読んだ。彼は夢中になり、「学業を中断して、ホテルで当時の大衆的な軟文学を読むと書いている。」<sup>91</sup>

「沈淪」は郁達夫が名古屋で生活し、自分と周りの人を観察したことを基に創作した作品である。郁達夫は第八高等学校在学中に、何回もいじめられたので、心の中には絶望と恨みが溜まった。「沈淪」の主人公はN市の高等学校の学生である。この「N」は、即ち「名古屋(Nagoya)」の頭文字である。「沈淪」は、東京で執筆したが、その素材の源は彼の名古屋での生活である。名古屋は、彼にとって最も印象深いところであり、その頃の心情や感懐などを描写した。

「沈淪」の主人公は周囲の環境のせいで極度に敏感になり、神経質である。病的な孤独感を抱え、同級生や友人との付き合いに消極的で、「余計者」になった。彼にとって「支那人」というアイデンティティは心理的なタブーになった。彼は常に苦痛を感じ、授業では、真ん中に座っているにもかかわらず、い

<sup>89</sup> 鈴木正夫 (1984) 「郁達夫与日本文学」『复旦学報第6期』、111頁。

<sup>90</sup> 夏志清 (2001) 『中国現代小説史(上)』中文大学出版社、93頁。

<sup>91</sup> 郁達夫著、吳秀明等編 (2007) 『郁達夫全集』第十卷文論(上)、浙江大学出版社、310頁。

つも寂しい思いをしていた。楽しそうに講義を聞いている同級生の姿を見ているうちに、彼の心は浮き雲のように、空想に走るのであった。授業の最後には、生徒全員が話したり笑ったりしていたが、彼だけは眉をしかめ、舌はまるでロックされたように、黙りこくっている。その顔を見て、誰もが彼のそばから逃げ出した。同級生の無視に、彼は彼らを敵だと信じ、いつか復讐に来ると誓った。

「沈淪」の主人公の経歴は、ほとんど郁達夫自身の経歴である。少年時代に、日本に留学して、弱小民族への圧力、個人の感情の抑制、酷いホームシック等ため、孤立し、劣等感を抱く。そして「憂鬱病」を患った。彼は感傷、彷徨、無力感のため、いつしか性的な自慰を始めるに至る。そして女性の入浴を覗き、遊郭で酒を飲むような、放縦な生活をした。しかし、欲望の赴くままの生活は、彼を後悔と苦悶に追いやり、あげくに海で自殺する。「沈淪」の主人公の感受性と体験は郁達夫自身とのものと重なることが多い、これは郁達夫の日本留學生活の真実の記録にみえる。

郁達夫の小説は佐藤春夫の創作に影響を受けたことは疑問の余地がない。二者の作品の創作理念、筋の発展、または芸術の表現手法も多く類似点がある。日本の研究者伊藤虎丸は、「沈淪」は佐藤春夫の『田園の憂鬱』をもとにして書いたと考えている。

私は、まず佐藤春夫氏の小説「田園の憂鬱」との関係を考えるのである。<sup>92</sup>

日本の研究者小田嶽夫は「沈淪」と『田園の憂鬱』と比べて、「一、全体的に見ると、「沈淪」と『田園の憂鬱』は同じ心境を述べる小説である。二、「沈淪」と『田園の憂鬱』の主人公は同じうつ病ある。三、『田園の憂鬱』の冒頭に引用したエドガー・アラン・ポーの詩句は、「沈淪」ではやがて主人公は野原で散歩しながらウィリアム・ワーズワースの詩を英文で読む、そして主人公は自ら中国語に翻訳する。四、「沈淪」には全体の自然描写に非常に筆力を注ぐ。」しかし彼はまた両作品の本質的に差異も指摘した。

「沈淪」が「田園の憂鬱」から多分の影響を示してい乍らも、二つの作品は根本てきには似ても似つかない。後者の「憂鬱」は人生の「退屈」が根底になってい、天下泰平で、「国家」などとはまるきり無縁なのに対して、前者の「憂鬱」は「祖国の劣弱」に根ざしてい、すべてが国家に還原されるところに、本質的な大きな違いがある。<sup>93</sup>

佐藤春夫は郁達夫への影響は多方面である。とくに、佐藤春夫の創作観念、創作手法は郁達夫に深く影響を与えた。

### I-2-3-2 自叙伝の特徴

郁達夫は「文学作品は全部作者の自叙伝である」と強調する。彼の作品の中にはほとんど「自叙伝」の特徴がある。彼の五十余作の小説の中に、四十余作

<sup>92</sup> 伊藤虎丸(1961)「沈淪論」『中国文学研究第1号』中国文学の会、59頁。

<sup>93</sup> 小田嶽夫(1975)『郁達夫傳 - その詩と愛と日本』中央公論社、50頁。

は第1人称を採用した。彼の出身、経歴、個性、気質、人間関係、審美観などを殆ど彼の作品に見える。初期の「沈淪」から、中期の「春風沈酔の晩」、また後期の「遅咲きの木犀」まで、作品の人物は「彼」（「沈淪」）、「伊人」（「南迂」）、或いは「于質夫」（「秋柳」）、「文朴」（「东梓关」）、「老郁」（「遅咲きの木犀」）、「李白時」（「過去」）、そして、一番多いのは「私」。全部作者本人の精神気質を持っている。これらの人物の多くは病的な側面を有し、苦痛の中で自己暴露、自己反省、自己救済を行なおうとして。郁達夫の創作観念の中では、自分の心の解剖を通して、大千世界を表現できると思っている。人生を深く表現すれば、社会を表現することができる。人生を表現するためには、個人の感情が最も真実で、最も確実である。自己描出が重要だと思いが、郁達夫の小説は作家の回顧録や自伝ではない。郁達夫は自分の内面に目を向けているだけでなく、彼の作品の主人公の様々な表現には、その時々苦悩、彷徨、活路を見出せない青年の典型的な心理を表現している。このため、郁達夫の創作の考え方は当時の日本の文学者たちの「自己表現」の主張と一致している。そして彼は「文学に真実性が高いほど、その内容も充実しており健全だ」という言葉は正しい。」<sup>94</sup>という認識をもっていた。

郁達夫は「芸術と国家」の中で、「真」の大切さにも協調した。

芸術の理想は、丸裸の無邪気さだ。東西の平和だ。炎のような正義心、美への陶醉だ。偉大なる同情心であり、忘我である。（中略）第一、私たちはまず「真」から語ろう。芸術の価値というのは、全くこの字にすべてを託されている。これは古今東西問わずに通称されている。文学、美術あるいは音楽では、不運と墮落に落ちた時期、「自然への日帰」や「無垢への日帰」というスローガン。大抵芸術品は自然の再現に過ぎない。自然の美を把握し、そのまま再現するのが芸術家の本分だ。芸術家たちは自然を捉え、その無垢を私たちの五感によってはっきり提示する。それは最も優秀な芸術品だ。自然風景を描写するワーズワース (Wordsworth) の詩でも、田園風景を描くミレー (Millet) の絵でも、嵐のようなベートーヴェン (Beethoven) の音楽でもすべて自然の一部だ。すべては無垢のまま、全く偽りのない。芸術に対する真の大事さは言うまでもない。<sup>95</sup>

郁達夫は真実の自叙伝を提唱する。しかし、事実、真実を重視すると同時に、平面描写を主張せず、事実描写における想像力の重要性を強調している。

人々は、一日に色々なことを経験する。例えば、周りの人との交際や通過した環境、千変万化する心のありかた、他人から受ける経験、そして、読書や観察からの印象など。想像の豊かな人こそ、このような混とんとした瑣末さの中で、そのポイントを摂取して、新しい事実、新しい人物、あるいは新たな境地を作ることができる。たとえ旅行記、伝記、伝説などで

<sup>94</sup> 郁達夫著、卞雪林等編（1983）「文学上の智的価値」『郁達夫文集』第六卷文論、花城出版社、161頁。

<sup>95</sup> 郁達夫著、卞雪林等編（1983）「芸術と国家」『郁達夫文集』第五卷文論、花城出版社、150頁。



も、事実を羅列するだけで、想像力しか関与しないと、偉大な著作になることができない。

想像力があるからこそ、人物や事件の真実を損なわれないうで、経験を増大、削減、補完、変換して美しく、有価値であり、味わいのある真珠にすることができる<中略>慎重にやる、想像を活す、それだけ、完璧な芸術品を作ることができる。

想像力は創造者として必要な能力である、作家、批評家、歴史家、科学者、事業家を問わず、想像力を欠くと、偉大な功績を残すことができない。<sup>96</sup>

これにより、郁達夫の文学は真実を求め、個人の体験を尊重し、同時に自分の思想を注入することができるのである。

「沈淪」は全て郁達夫の生活と思考の断片である。彼は日記の中でこう書いた。

「沈淪」書いたとき、感情的には無理の影は少しもない、私はただ書かなければならないと思った、こう書くべきだった、技巧とか文句とか一切関係ない、人は苦痛を感じた時、思わず叫ぶが、この呼び声は低音なのか高音なのか、かまっていられない。<sup>97</sup>

「沈淪」という作品の中、彼は作者自身であり、代弁者でもあった。名人の詩作を引用し、抒情詩をものすることで、彼が理解を望んでいることを表現している。本当の愛情を望み、祖国への情熱を含めている。「彼」の感情が変化することが作品の中心になる。故に、「沈淪」の中では大した事件は起こらず、ただ時間が流れ、生活のごまごまとした日常が連らなるだけである。作者は自分の主観と感情を重んじ、そのことで魂の真実を読者の目の前にさらす。こんな素直で卒直な作品は中国現代文学史<sup>98</sup>上で独特な貢献をすることとなった。

『沈淪』がまだ出版されていないときは、人に「こういうものは、将来は印刷できるだろうか、中国のどこかにこういうジャンルがあるだろうか？」<sup>99</sup>と述べたが、出版された後には、大胆な描写が文壇を揺り動かし、上海文芸界から猛烈な攻撃を受けた。多くの人々は『沈淪』は淫書だと非難したが、新文学の陣営は極力彼のため弁護した。周作人は『沈淪』は非道徳ではない、ただ「不方正」である、淫書ではない、芸書である<sup>100</sup>と述べている。また、郭沫若はこう述べている。

彼の清新な筆致は中国の枯れた社会の中に春風が吹き込み、すぐに無数の青年の心を目覚めさせた。彼の大胆な自己暴露は、千年万年の裏の中に隠れていた士大夫の虚偽を嵐のようにひきとばした。偽の道学と偽の才子達

<sup>96</sup> 郁達夫著、邝雪林等編（1983）「想像的作用」『郁達夫文集』第六卷文论、花城出版社、192-193頁。

<sup>97</sup> 郁達夫著、吴秀明等編（2007）「忤余独白」『郁達夫全集』第十卷文论（上）、浙江大学出版社、499頁。

<sup>98</sup> 歴史区分の上で1919年の五四運動から現在に至る時代を指す。

<sup>99</sup> 郁達夫著、邝雪林等編（1983）「五年来創作生活的回顧」『郁達夫文集』第七卷文论・序跋、花城出版社版、179頁。

<sup>100</sup> 周作人（2002）『自己的园地』河北教育出版社、61頁。

を激怒させた。なぜか？ この露骨な率直がのおかげで、彼らはいんちきをやるのは難しいと感じるからだ。<sup>101</sup>

### I-2-3-3 郁達夫の小説の中の女性

繊細な郁達夫は、日本の女性に強い劣等感を抱いていた。弱小国の民である自分には、日本女性と恋愛する資格はないと考えた。その気持ちを小説に込め、芸術的な加工はあるが、その感情は真実である。「沈淪」の中で、彼はある日の放課後、帰り道で三人の日本人学生と一緒に歩く、偶々二人の女学生と出会った。

バカ、バカ、彼女らに気があったとしても、それがお前と何の関係がある？彼女らの流し眼は、あの三人の日本人に対してだけのものではないか。ああ、ああ、彼女らはとっくに知っているのだ、おれが支那人だということ。さもなくば、彼女らはおれの方をみてくれたはずではないか。復讐だ、きっと復讐してやるぞ。<sup>102</sup>

支那人だからと無視されることもなく、頑なに二人の女学生に復讐しようとするので、このような細部には、異国から来た孤独な旅行者の内心の苦悶が表れている。

郁達夫は日本女性との日常的な触れ合いを通じて、日本のオープンな性文化を感じた。

日本の女の子はみな優しくて可愛いく中略>一般的な女性は、中国ほど貞操を守ることに頑固ではない。<sup>103</sup>

名古屋の八高在学中に、後藤隆子と関係を持つことになり、その後、東京で雪児という日本女性と一年間同棲した、また名古屋の大松ホテルのウエイトレスの植野と京都のホテルの玉児と一時期交際した。郁達夫の詩や小説には、彼女らの名前がある。「沈淪」の宿屋の娘は隆子、「南遷」の「M」という女性は雪児がモデルだ。<sup>104</sup>

郁達夫は、さまざまな日本人女性との交流の中で感じたことや理解したことを小説に込め、一連の日本の女性像を作り上げてきた。その女性像は、二つのカテゴリーに分類出来る。一つは、主人公が追い求める対象である女性像。このタイプは、純粋で優しく、主人公の憧れの対象である。しかし、異国の地で暮らす孤独と、弱小国家の民の劣等感から、主人公は勇気を出して彼女らを追いかけ、恋に落ちることができない。「銀灰色的死」の中の静児はこういう女

<sup>101</sup> 郭沫若 (1959) 「论郁达夫」『沫若文集』(第12卷)人民文学出版社、547頁。

<sup>102</sup> 郁達夫著、駒田信二、植田渥雄訳 (1971) 「沈淪」『現代中国文学6』河出書房新社、41頁。

<sup>103</sup> 郁達夫著、吳秀明等編 (2007) 「雪夜」『郁達夫全集』第四卷游记・自传、浙江大学出版社、305頁。

<sup>104</sup> 范伯群、曾华鹏 (1983) 『郁達夫評傳』百花文艺出版社、24-25頁。

性である。

静児はすでに 20 歳でした、容姿は普通だが、目は秋の水のようで、鼻は白人みたいに高く、なぜかわからない、一度見た人は、彼女のことを忘れられない。<sup>105</sup>

妻を亡くした後、彼は静児に自分の孤独や苦しみを打ち明け、親友となった。

静児は彼のこと聞いて、時々涙を伴うこともある<中略>まるで数年前からの友人のよう。<sup>106</sup>

最後まで、主人公は静児を追いかける勇気もなく、静児の結婚式が近づくと結婚祝いを買に行き、自分には果てしない悲しみと後悔しか残らないのである。

もう一つの女性像は浮薄のタイプである。郁達夫の彼女たちに対する感情は非常に複雑である。彼は彼女たちのこと、浮薄で、淫靡なものと考えたが、あきらめきれなかった。「南遷」の中の M はこういう女性である。彼女は宿屋の養娘、夫の留守中、自ら主人公伊人を誘う、多感な伊人は彼女に想いを寄せるが、別の客が来たときに再びその客と親しくなるのは、彼にとって予想外だった。伊人は、怒りを感じ、自殺を考えたこともあった。しかし、そのような「浮薄の女」を傷つけた後、伊人は自分への反省と後悔を表現している。

枕元に散らばったピンクの桜の紙を見て、思わず涙が流れました。ふさわしくない！ふさわしくありません！私の理想、野心、祖国への情熱はどうなったのだろう。今、何か残っているのか？また何か持っているのか？<sup>107</sup>

伊人から見ると、自分が日本の女性に捨てられ、軽蔑された最大の理由は、自分は弱小国の民であるからである。

日本の都市体験は、郁達夫に他国での生活の苦しさや無力感を与え、彼は強い漂泊感と危機感を抱かせた。金銭にまみれた物質的な都市空間で、郁達夫は欲望にかられ、またそのような自分を恐れた。彼は性の苦悶と生の苦悶について思考し始める。伝統と現代の対立と不安の中で、やがて郁達夫彼の自己意識が目覚め、日本の都市生活の体験と豊富な読書量が、彼の創作意欲をかき立てた。日本の文学上の先人たちとの交流やはげましもあり、郁達夫の基本の創作理念やスタイルは日本で形成された。

<sup>105</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「銀灰色的死」『郁達夫全集』第一卷小説（上）、浙江大学出版社、30 頁。

<sup>106</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「銀灰色的死」『郁達夫全集』第一卷小説（上）、浙江大学出版社、30 頁。

<sup>107</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「雪夜」『郁達夫全集』第四卷游记・自傳、浙江大学出版社、308 頁。

## II 上海の憂鬱

### II-1 上海の文化的な背景

都市化は、農耕を主とする伝統的な文化に大きな変化をもたらすものである。18世紀末のイギリスの産業革命以降、主要各国では都市化が急速に進んだが、中国も例外ではない。中国では20世紀初頭に現代都市の出現が見られ、上海はその代表的な都市である。清朝の嘉慶年間から、上海は人口、立地、政治、貿易、都市の規模などの面で、中国の多くの都市より優位に立っていた。1843年、「南京条約」に基づき、上海は貿易港として開放され、世界経済の発展の軌跡に足を踏み入れた。1845年、上海にイギリス租界が正式に設立され、次いでアメリカ租界、フランス租界が設立された。上海租界は立法、行政、司法などの面で自治が認められ、フランス租界には独立の領事館や領事裁判所もあった。上海は植民地支配に耐えなければならなかったが、同時に現代文明の洗礼を受けた。租界成立後、租界の内外で現代都市の建設が始まった。この様子を唐振常は次のように書かれている、

1848年に銀行、1856年に西洋風の街、1865年にガス灯、1882年に電気、1881年に電話、1884年に水道、1887年に上海最大の書籍・新聞編集の印刷会社「同文書会」、1896年に中国初の新聞「時務報」、1901年に自動車、1908年に電車…<sup>108</sup>

一方、異国文化の流入により、上海市民は外の人とのコミュニケーションを図るため、外国語の習得に力を注いでいる。同時に、租界内の経営モデルや資本制度は、上海に投資する民族資本を大量に呼び寄せた。また、忻平は次のように書いている、

1910年から1927年、17年の間だけで、上海の人口は128万9000人から264万1000人へと倍増する。中国国内どころか世界でも稀に見るスピードだった。<sup>109</sup>

これからの発展は、こうである、

<sup>108</sup> 唐振常（1993）『近代上海繁华录』商务印书馆、240頁。

<sup>109</sup> 忻平（2009）『从上海发现历史—现代化进程中的上海人及其社会生活 1927-1937』上海大学出版社、30頁。

上海を中心とする沿岸都市の資本主義化がますます顕著になり、それがもたらす社会全体の変化により、都市が国家生活の主体となり始めた。数十年の発展を経て、1930年には、上海の人口は314万人に達した。<sup>110</sup>

1927年7月には、上海は特別市に指定され、蒋介石は上海特別市の成立大会で次のように述べた――

上海の進退は、国家の繁栄とわが党の成否にかかわる問題である。<sup>111</sup>

それ以降、上海は政治、経済、文化の面で大きな発展を遂げ、短期間で中国最大の貿易港、対外関係の拠点となり、世界的に重要な国際都市、金融センター、極東最大の港へと飛躍的に成長した。

1932年から1933年の間に、中国には2435箇所の工場があった、そのうち1200箇所が上海に開設された。製造業での設備投資や機械の使用率や労働力の規模では、上海は中国の半分くらいを占めている。1933年、上海の工業資本は全国の44%、工員の人数は43%、工業総生産は50%を占めていた。<sup>112</sup>

経済の発展、都市制度の完備、人口の増加に伴い、豊かな経済が多文化の融合を促し、上海の現代的な都市文化を形成した。市況が活気を帯びる上海には、一攫千金を狙う商人、開放と自由の風に惹かれた先進的なインテリ、下層社会の農民や市民、流民や無頼まで、外から多くの人が入り込んできた。彼らは上海への資本の流入と労働力の増加をもたらしたが、異なる文化概念と生活習慣も持ち込んだ。東西の知識と新しい思想を持ったインテリたちは、上海の文化市場に新しい作品をもたらした。1930年代の上海の文学界には、新しい文学グループや文芸雑誌が次々と生まれた。同時に、上海の新市民階級は新しい文化の消費者となり、彼らの消費傾向は現代メディアの変化の道筋に影響を及ぼしている。それは作家、読者、出版社が熱狂した時代であり、上海の出版業界は空前の黄金期を迎えた。1931年「上海商業名家」の記録によると、出版機関の急速な発展は、作家の文学活動と読者の積極的な交流と切り離せないことがわかる。

上海の出版社136社、新聞社48社。1930年代には、商務印書館、中華書局、世界書局などを含め、大規模印刷会社の8割が上海に置かれ、中国国内の書籍の9割、新聞・定期刊行物の8割が上海から出ていた。<sup>113</sup>

<sup>110</sup> 张鸿声 (2007) 「从启蒙现代性到城市现代性—中国新文学初期的上海叙述」『郑州大学学报第4期』、24頁。

<sup>111</sup> 唐振常主編 (1989) 『上海史』上海人民出版社、651頁。

<sup>112</sup> 唐振常主編 (1989) 『上海史』上海人民出版社、9頁。

<sup>113</sup> 「百年回首话印刷」『中国图书商报』 [http://www.waterpub.com.cn/info/detail\\_233.html](http://www.waterpub.com.cn/info/detail_233.html) (参照日：2022年9月5日)

そして多くの重要な作家が上海に住み、さまざまな文学活動を活発に行い、新しい文学作品を生み出し、新しい文学の潮流を巻き起こした。大勢の読者層が創作を支援し、他方、市民階級の彼らは都市の生産力でもあった。

オーストラリアの学者チャイルド (Vere Gordon Childe) は『都市革命』 (*Urban Revolution*, 1950) の中で、都市の文明を表す条件の 10 項目を定義した。

①大規模集落と人口集住、②第一次産業以外の職能者 (専門の工人・運送人・商人・役人・神官など)、③生産余剰の物納、④社会余剰の集中する神殿などのモニュメント、⑤知的労働に専従する支配階級、⑥文字記録システム、⑦暦や算術・幾何学・天文学、⑧芸術的表現、⑨奢侈品や原材料の長距離交易への依存、⑩支配階級に扶養された専門工人。<sup>114</sup>

この頃の上海は、このような条件が整っており。人と都市は、互いに惹かれあい、拒絶しあう中で、文学と芸術を生み出すための豊かなインスピレーションやアイデアの源となる。

多くの人々が忘れていて、あるいは知らないだろうが、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間、上海はアジアで最も繁栄し、国際的な大都市であった。上海は、国際金融・貿易だけでなく、芸術・文化の分野でもアジアの他の都市を圧倒する存在感を示している。東京は頭がぼけた軍国主義者の手に委ねられている、マニラはアメリカのカントリークラブのようなもの、バタビア、ハノイ、シンガポール、ヤンゴンに過ぎない、カルカッタだけはちょっとした文化的な雰囲気を持っているが、上海には大きく遅れをとっている。<sup>115</sup>

豊かな文化的背景を持つ上海では、政治動向、地域経済、メディア環境などが多くの中国インテリを惹きつけ、1927 年頃には多くの作家が上海に移住し、稀有な文学現象を生み出していったのである。

上海は近代中国のエンジンであり、同時に中国近代文学の中心であった。ある意味で、1930 年代の文学といえば、1930 年代で上海を中心に起こった文学的事実を指している。<sup>116</sup>

という説さえもある。上海はやがて洗練された文化市場となり、こうしてインテリたちに自己表現の場を提供した。

上海特有の政治、経済、文化の形態と地位は、中国近代文学の雰囲気、スタイル、特質を決定づけた。中国近代文学の中心としての上海の意義は、

<sup>114</sup> 小泉龍人 (2013) 「都市論再考—古代西アジアの都市化議論を検証する」『ラーフィダーン』第 34 巻 84 頁。

<sup>115</sup> 白魯恂 (1992) 「中国民族主義与现代化」『二十一世紀第 9 期』、16 頁。

<sup>116</sup> 旷新年 (1998) 『1928：革命文学』山东教育出版社、284 頁。

上海がある時期の中国近代文学の主要な生態を体現し、ある時期の中国近代文学の発展の方向を表し、ある時期の中国近代文学の生命母体を反映していることにあり、これらの特定の要因は現代化に向かう新しい中国文学にその独特の自然の質感、基本形態、発展方式となった。<sup>117</sup>

中国のインテリたちは、現代的都市の便利さと豊かさを感じながら、都市の複雑な思想の潮流について考えている。彼らは新しい外来文化に接し、都市の工業文明の立場から中国の生活と文化の現実を見ることを学んでいる。現代の商業文化のブームにより、作家たちも積極的に市場と交流し、商業的な創作が始まった。

郑振铎は、当時の作家たちは上海に対して、複雑な感情を抱いていると考えている。

この大都会である上海には、悲しいことがたくさんある。その悲しみ・感傷とは、「都会が諸悪の根源」というような、浅はかでつまらない都会の罵り合いの悲しみではない。私たちは都市に対して悪意がない、むしろ賛美している。私たちは、都市は近代文化の中心と考え、あえて気取り屋に追随して都市を呪うようなことはしない。私たちの感傷は、半分は民族の感情からくるものであり、半分は、あまりに異なる東西の文明の違いを意識した結果なのである。<sup>118</sup>

中国の近代作家張愛玲は、『金鎖記』などの作品で、上海市民の生活に対する観察と想像を表現している。茅盾は、『子夜』で上海への理解と考えを反映させる。

小説の最初の2章で、茅盾は多くの近代化の物質的象徴を描写した。自動車(1930年代のシトロエン3台)、電灯や扇風機、ラジオ、洋館、ソファ、銃1丁(ブローニング製)、葉巻、香水、ハイヒール、美容院、ハイアライ館、グラフトン織(貴重な外国製の薄い紋様があるの絹織物)、フランネルのスーツ、1930年代のパリの夏服、日本とスイスの時計、銀の灰皿、ビールやソーダ、そして様々な娯楽形式、ダンス(フォックストロット、タンゴ)、ルーレット、咸肉庄(私娼窟)、ドッグレース、ロマンティックなハンマーム、踊り子や映画スターなどのしゃれた現代的な施設や商品は、作家の想像の産物ではなく、逆に茅盾が小説の中で描き、理解しようとした新しい世界である。要するに、これらはすべて、中国の現代化のプロセスを象徴している、茅盾と同世代の都市作家がこの発展過程について不安と矛盾を感じた。<sup>119</sup>

<sup>117</sup> 朱寿桐(2004)「论作为中国现代文学中心的上海」『学术月刊』、73頁。

<sup>118</sup> 马逢洋編(1996)「影戏院与“舞台”」『上海:记忆与想象』文汇出版社、126-127頁。

<sup>119</sup> 李欧梵(2001)『上海摩登——一种新都市文化在中国』北京大学出版社、5頁。

西洋や日本の作家からみると、上海はまだ貧しくて後進的である。代表的なものとして、芥川龍之介の『上海遊記』と横光利一の『上海』がある。これらの作品は、当時の日本人が上海を知るための重要なチャンネルとなった。

新感覚派の作家横光利一はかつて二度上海を訪れた、上海に対する見方を小説で表現している。横光利一は1928年4月から約1か月間、上海に滞在した。彼は上海の様々な事物に対して興味を持ったようだ。

私に上海を見て来いと云った人は芥川龍之介氏である。氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかねばいけないと云われたのでその翌年上海に渡ってみた。着いて最初に感じたことは、ここでは総てが銀の上を流れているということであった。この感じは感覚的なもので、いたる所にある錢莊と書かれた両換屋が私に刺戟を与えたのである。私は金塊相場の立つ所を見に行き、金と銀との運動の変化や棉花の売買方法を私に知られる限り知ろうとした。次ぎには租界内の各国の組織と関係とだんだん興味につられて進むに従い、ここは世界で一番新しい形態の街なるのみならず、各民族のどのような認識も伝統も役には立たぬ所だと思ひ、各国がここから本国に持ち帰るものは誤謬を運んでゆくばかりだと気がついた。また同様に支那人自身もこの街に関しては誤りを冒しているに相違ないと思つた。しかも、この理解困難な場所に注意することなくしては、東洋の政治は行い難く、世界の政治も商業も運用不可能な状態になる時が近い将来に必ずあるだろうと考えた。これはむしろ誇張の必要あるほどに重要な所であると思つたが、ヨーロッパへ行ってみて、初めてそれが真実であると認定せられるべきさまざまな埋設物を私は感じる事が出来た。恐らくこの上海という都会にだけは数学は無力である。ここでは科学の隣りに易占の屋台が何の不思議もなく並んでいる。<sup>120</sup>

横光利一は帰国後、『上海』を創作した。小説の原題は『上海』ではなかったが、中の象徴的な建築物や歴史的な出来事から、読者が小説の舞台は上海ということ簡単に連想できる。

だが<一息したかった>にしては、上海の横光はきわめて精力的に動きまわり、資料の収集にも努めていたのである。そして、亡き芥川の期待に十分に答えたというべきほどの努力を傾け、ほとんど全精力を捧げて昭和三年から四年にかけて「上海」を書き進めていったのである。<sup>121</sup>

横光利一は、上海とロンドンは似ていると感じた。彼の文章では、上海は物質主義的で、腐敗した都市であり、また、道徳的、精神的、肉体的に墮落した都市である。この都市は奇妙で、不思議である、人々は利益と快樂を追い求め、人と人の関係は金でつながっている。小説には、金塊相場の喧騒、フランスの無線電信局、薔薇の垣根、腹を映して迂る自動車、ロココ風の馬車が描かれている一方で、上海弄堂<sup>122</sup>の荒廢、汚い落魄の下層階級も書かれている。政治と

<sup>120</sup> 横光利一 (1982) 「静安寺の碑文」『定本横光利一全集』第一三巻、河出書房新社、415頁。

<sup>121</sup> 国松昭 (1986) 「上海論」『東京外国語大学論集第36号』320頁。

<sup>122</sup> 弄堂 (上海地域の方言) では小路、横町の意味で、入り口に門があり、中に数棟から数10棟以上の住



経済の関係から上海を見ると、それは金を追い求める墮落した都市と読み解くのである。横光利一の上海の描写は、その時代や文化を写しているが、原始的でワイルドであるヘテロトピアの都市として描かれている。それでも上海の異国文化、社会階層とイデオロギーを読み取ることができる。

中国の作家と外国の作家がどのようなスタンスで中国を表現するにしても、共通しているのは、上海の都市文化を東洋と西洋が混ざり合ったものとして捉えている点である。上海租界の摩天楼、シティーホール、競馬場、ダンスホール、カフェなど、明らかな「脱中国化」の建築と当時の大衆文化は、上海は2つの顔を持つようになった。一つは「東洋のパリ」と呼ばれる中国で最もモダンな都市、一つは植民地としての国際的な「孤島」の都市である。

横光利一は一九二〇年代の上海を「理解困難な場所」（「静安寺の碑文」）と呼んだが、常識では理解困難な事実が日常的な次元にたちまち還元されてしまう、したたかな街のありようが横光を当惑させたわけだろう。<sup>123</sup>

多文化が共存することで、上海は物質的にも思想的にも西洋化が加速し、租界の区域は中国の行政システムから切り離され、ひいては西洋社会の近代都市モデルを模倣するようになった。

文学的に上海は千切れている、纏めることができない。異なる作家が書いた北京は、雰囲気も同じである。異なる作家が書かれた上海は、まるで別世界、別世紀のように、そして、同じ作家の筆遣いでも、上海は様々な材料の組み合わせであり（化合物ではない）、自己が時間と空間の中で絡み合っている。<sup>124</sup>

そのため、上海という都市のイメージを簡単にまとめることはできない。

## II-2 郁達夫のデビュー

世界各国の文学の発展は、都市と密接に結びついている。ジョエル・コトキン『都市から見る世界史』の中に次のように論じた。

人類の最大の創造物は、いつの時代でも都市だった。都市は人類の想像力の究極の作品であり、大きな意味を持ち、奥深く、しかも耐久性のある方法で自然環境を再形成する能力の証である。実際、私たちの作り上げた諸都市は大気圏外からも見る事ができる。

都市は、人間の創造性の衝動を圧縮して発散させているようなものだ。ほんのわずかの人間しか都市に住んでいなかった黎明期から現代まで、都市は多くの芸術、宗教、文化、商業、技術を生み出す場となってきた。<sup>125</sup>

---

宅がある。

<sup>123</sup> 前田愛（1992）『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫、460頁。

<sup>124</sup> 趙園（2002）『北京：城与人』北京大学出版社、230頁。

<sup>125</sup> ジョエル・コトキン著、庭田よう子訳（2007）『都市から見る世界史』株式会社ランダムハウス講談社、17頁。

バルザックやボードレールが描いたパリ、ドストエフスキーが描いたサンクト・ペテルブルク（レニングラード）は、ほぼ人間と都市が一体となっている。これらの作家にとって、都市文明と環境は新しい創作内容や視点を提供し、豊かな文学形式を生み出してきた。しかし、上海は郁達夫に創作の素材と環境を提供しただけでなく、上海の商業文化も彼に影響を与えた。

上海が国際的な大都市になると、出版業界も早速に発展した。1845年にイギリス租界が成立してから1949年まで、600軒以上の出版社が記録されている。<sup>126</sup>

商務印書館、世界書局、中華書局、開明書店、生活書店などの出版社は、中国にとって重要な出版拠点となった。上海の書店の多くは租界のような特殊な地域にあり、そこでは新聞・作品の発行が純粋な商業活動として行われ、中国の他の都市に比べて、検閲がゆるく、自由度が高かったのである。出版社は、政治など関係なく、金儲けだけが目的である。当時の書籍出版業界は、印刷・出版が高い利ざやを稼げるので、多くの資金と人材が集まった。商務印書館のような大出版社は、数百万円の資金と数千人の従業員、自社の編集局や印刷所、そして全国に支社を持っていた。開明書店や北新書局などの中堅出版社も百人近い従業員を擁していた。<sup>127</sup>

多くの小さな出版社は、生き残りをかけて、出版の見込みのある本や資料を探して回っている。泰東書局の社長もその中の一員である。泰東書局は1914年に設立された。1921年、店主である趙南公が創造社の郭沫若、郁達夫、成仿吾、張資平らを誘い、郭沫若に編集や校閲全部を任せ、泰東書局の舵取りをさせた。

一方、趙南公は郭沫若の編集方針についてほとんど口出しせず、郭沫若に大きな裁量権を与えていた。郭沫若は早速原稿を編集した。1921年8月5日に、『創造社叢書』の第一巻として、「序曲」を含め、全部で54編の詩と「女神之再生」など3編の詩劇を収録し、詩集『女神』を出版した。社会的に大きな反響を呼び、泰東書局の新しい道を開いた。その後、趙南公は郭沫若に『創造社叢書』の編集を続けさせるという決断を下した。9月には郭沫若は日本に戻り、医学の勉強を続けた。彼は上海に戻って郁達夫に『創造季刊』編集の仕事を担当するよう要請した。1921年10月、郁達夫の短篇小説集『沈淪』が『創造社叢書』の第二巻として出版された。その中に、「沈淪」「南遷」「銀灰色的死」の3編を収録されている。

『創造社叢書』は1921年から1930年にかけて、様々な種類の作品を合計60巻出版した。書籍以外には、郭沫若らが雑誌『創造』と『創作週報』を編集した。出版するとすぐに、社会の関心を集めた。

創造社の出版物では、かなり厳しいことも言ったが、それが商務印書館で出版されるとは想像もできないでしょう。だから、この点では、泰東書局に感謝すべきだ。<sup>128</sup>

郁達夫の短篇小説集『沈淪』の出版は、社会に大きな反響を巻き起こした。

<sup>126</sup> 朱联保（1993）『近现代上海出版业印象记』学林出版社、2頁。

<sup>127</sup> 朱联保（1993）『近现代上海出版业印象记』学林出版社、8頁。

<sup>128</sup> 郭沫若（1979）『学生时代』人民文学出版社、167頁。

『沈淪』は、郁達夫の日本留学体験をもとにした自伝のような色合いを持つ作品である。小説の中には、大胆な暴露の描写があり、それについて多くの論争が起こった。

この小説は若い読者に大変受け入れられ、鎮江、無錫、蘇州から夜通しで上海に買いに来る人がいる。主人公を崇拜し、服装や言動を真似する人もいる。更に、文章のスタイルを真似て多くの類似する作品を書く共鳴者などもいる。一世を風靡するベストセラーになった。泰東書局は、『沈淪』を立て続けに10刷以上出し、発行部数は3万部を超えた、当時としては珍しい量の売れ行きである。<sup>129</sup>

上海は郁達夫の作品に出版の機会を与えただけでなく、小説の読者さえも準備した。当時の上海の読者には主に三種類ある、①伝統文化を重視する人。②上海に移住してきた、知識欲や危機感を強く持つ人。③市民階級の人、暇をつぶすための読者。

短篇小説集『沈淪』中、「沈淪」「南遷」「銀灰色的死」の3編の主人公たちは、安定した生活環境や収入がなく、そばには苦しみを吐露できる家族や友人もなく、外で漂泊し、内面が孤独に感を捉えている。

「沈淪」の主人公は最終的に自ら命を絶つしかなく、孤独で無力で貧乏な生活に終止符を打つ。「沈淪自序」のなかにもこう書いている。

「沈淪」はひとりの青年の病的心理を描写している、青年の憂鬱症 Hypochondria の解剖と現代人の苦悶である。すなわち性の欲求、霊肉の衝突。しかし、私の書き方は失敗した。<sup>130</sup>

郁達夫は自分の描写が失敗だったと思ったが、その中のリアルな孤独感、辛さ、苦悶、感傷は、故郷を離れて上海で生活する多くの若者の心に響いた。彼らは、郁達夫の小説に自分自身を投影し、人生のもうひとつの可能性を見出し、それを受け入れたのである。同時に、当時の上海市民の文化は、ロマンス、感傷、暴露などの要素を求めており、それらはすべて郁達夫の小説に見出すことができる。しだかつて、市民階級の多くの読者は郁達夫の小説を歓迎した。

上海の自由な出版環境と読者の美意識の選択は、郁達夫の小説が評価される状況を生み出していた。『沈淪』出版のセンセーションは、郁達夫の創作に大きな励みとなり、創作の道を明確にし、執筆を続けることができるようになった。

## II-3 郁達夫の上海における創作

上海出身の作家張愛玲は、上海を次のように評している。

<sup>129</sup> 郁云（1984）『郁達夫傳』福建人民出版社、55頁。

<sup>130</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）『郁達夫全集』第七卷詩詞、浙江大學出版社、149頁。

上海の伝統的な中国人は近代の変化がもたらした、大きなストレスの下で生活している。それは古い文化と新しい文化の交流が生じさせた倒錯した産物であり、結果として不健康かもしれないが、奇妙な知恵でもある。<sup>131</sup>

上海に対して、郁達夫は矛盾した、そして複雑な感情を抱いた。1913年、中国から日本へ留学した郁達夫は、上海から船出した。初めて見る現代的で繁栄している上海の空間は、彼の心に深い欲望を呼び覚ました。1922年に中国に帰国した後、彼の最初の小説集が上海で出版された。日本で設立された創造社の事業は、上海で発展し輝かしいものになった。

1927年1月、郁達夫は友人の宅で王映霞と出会い、無謀な愛の追求を始めた。最終的に、1928年に上海で王映霞と結婚した。郁達夫の事業と愛情は両方とも上海と密接な関係があり、上海は彼に作家としての自信と激励と人がうらやむような男女愛を味わったが、同時に生活の重圧と漂泊感を彼に与えた。

中国の他の都市と比較すると、上海は最も優れたメディア環境を持っている。ここには、中国国内で最も多くの新聞社や出版社が集中しており、福州路だけで、黎明書局、北新書局、伝薪書局、开明書局、新月書店、群众図書雑誌会社、金屋書店、大众書局、上海雑誌会社、泰東書局、生活書店、中国図書雑誌会社、世界書局などがあり、名実共に「文化街」を形成した。<sup>132</sup>

上海の自由な出版環境は、現代文壇で活躍する多くの作家を惹きつけてきた。彼らは全国から上海に集まり、もともと北平を拠点としていた作家たちも次々と南下し、上海の文壇に空前のブームを巻き起こした。しかし、上海に来た彼らは、封建的な制度と封建的人倫関係で結ばれていたこれまでの絆が、この国際的大都市で、根本的に変わったことに気付いた。元々の生活空間では、親戚や隣人、町の人たちとも顔なじみで、その強い人間関係のネットワークの中で、それぞれが一定の役割と居場所を持っていた。しかし、上海の街角にいる人々は世界中から集まってきており、お互いに見知らぬ者同士である。見慣れた風景や人間関係はなくなり、代わりに、何の関係もない人たちに囲まれた。彼らは、都市の人口密度が高まった一方で、人と人との心理的な距離が伸びていき、一族や血縁によって築かれてきた伝統的な対人関係が希薄化・解消していることに驚いたのだ。

みずしらずの土地で、知人もなく飢えにせまられ職もみつからずというなかで、さらに、さむさ、雨、風、病気もおそってこよう。こうした物質的意味からみた放浪者の性格の実体をはっきりおさえておくことが、放浪者というものを抽象的な精神面にだけおいやる弊害をふせいでくれるだろう。また放浪者とは、血縁・地縁の共同体の一員たることからぬけだした存在であることも、この話からつかまえておきたい。そして、せっぱつまってもなお、うめきながら「生きねばならぬ」と自分にいいきかせる、そういう人生哲学を血肉的にこしらえていっていることから、われわれはここにも中国人特有の生への執着ともいえるべきつよさを見いだすことができる。<sup>133</sup>

<sup>131</sup> 张爱玲 (1997) 「到底是上海人」『流言』花城出版社、2頁。

<sup>132</sup> 吴静 (2004) 「〈现代〉杂志与上海文化」『东方论坛第3期』44頁。

<sup>133</sup> 東京大学文学部・中国文学研究室編 (1967) 『近代中国の思想と文学』大安、389頁。

こういう奇妙な心身の体験は、すでに「小国寡民」の生活に慣れた人々にとっては、まったく信じられないものである。多くの人が都会の紅灯緑酒の中に迷い込み、人の群れはもはや安全や信頼ではなく、むしろ脅威と圧迫感に満ちあふれて、逆に孤独感を強めていく。しかし、上海はまた、そういう人たちにとって魅力的であり、都会を離れて再び田舎で生計を立てようとは思わないのである。

郁達夫もその中の一人である。彼は住み慣れた農村を離れ、最初に向かった大都市が上海だった。郁達夫が初めて上海を訪れたのは、日本へ向かう途中であった。華やかな都会の喧騒は、故郷の富陽とはまったく違う。上海での短い滞在は、17歳の郁達夫は初めて現代的な都市生活を身近に感じ、都市文明を強く印象づけられた。上海で見せた都市の現代性と新しい文化的価値は、田舎から都会に出てきたばかりの郁達夫に「不安と疑惑」を感じさせた。

周囲の女たちのきらびやかな髪飾り、あでやかな衣装、そこから発散するなまめかしい脂粉の香は、初めて上海に出てきた田舎少年の私を窒息させんばかりだった。私はくらくら目まいがしてしまった。<sup>134</sup>

郁達夫は、違う生活様式に戸惑う一方、都市の物質文明に目がとまった。彼は上海で比較的、少し現代都市の現実の一部を実感した。彼は都市文明の繁栄と喧騒の裏に隠れた野蛮や残酷に気づかなかった。

1921年、郁達夫は日本から上海に帰国した。この頃の上海は、中国の田舎から逃避してきた人々の封建的な思想と、国際的・現代的な思想が交錯する半植民地的な都市であった。ここでは、郁達夫は都市に生じる様々な思想の衝突と社会の激動を感じた。郁達夫はすぐに気付いた、国際都市として上海には、十里洋場<sup>135</sup>の繁栄があり、暗闇の影もある。彼は、『沈淪』を出版した喜びを感じたばかりだったが、その後、長い間仕事が見つからず、自分の理想や野望を実現できない苦悶を味わった。この時期の上海は、郁達夫にこのようなイメージを与えた。

金銭の争奪、犯罪の横行、精神の浪費、肉欲の氾濫、天はよもや落下しないであろうし、大地も陥没することはあるまいが、しかしこんなふうにごろごとしてよいものであろうか。この世に生まれてわずか十七年あまりにしかならぬ当時の私の幼い頭には、帝国主義の陰謀、物質文明の頹廢、世界現状の危機、ないしは経世済民の大策等々についての明確な観念などはもちろんなかったけれど、しかし社会の本然の姿、人間の正しい道は、なんとしてもここにはないのだと思った。<sup>136</sup>

租界の外国人の横行闊歩は、彼を激怒させる。

<sup>134</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「わが夢わが青春」『現代中国文学6』河出書房新社、31-32頁。

<sup>135</sup> 十里洋場とは、解放前、外国が中国の都市に設けた広い面積にわたる奢侈で華美な外国人居留地・租界。（特に上海市を指す。）

<sup>136</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「わが夢わが青春」『現代中国文学6』河出書房新社、31頁。

逆上してすぐさま銀行へ走り、百円なり二百円なり電報為替を組んで送ろうとしたが、租界の外国兵に道路を遮断され、銀行の近くを三、四時間も行ったり来たりしたが行くことができなかった。ひどく腹が立ち、武器でも持っていたら一人か二人は殺さずにはすまぬような気分だった。<sup>137</sup>

郁達夫の潜在意識の中では、都会は悪の温床であり、美しいのは田舎だけだ。彼は「移家琐记」の中で、引越しの理由に触れている。

ましてや米は洋場で高く、狭い路地には人が多く、貧乏人の私は三百六十万人の上海市民に挟まれて、自動車、洋家、踊り、酒などの文明の利器を享受できないばかりか、新鮮な空気を吸うために10キロ以上歩かなければならない。<sup>138</sup>

いろいろと文句を言いながらも、郁達夫は上海を離れる勇気がなかった。ここには、出版の機会と熱狂的な読者がおり、そして便利な生活と気の合う仲間もいる。彼は、寂しさや悲しみを吐き出すため、その抑圧と苦悶の全部を作品の中に書くことしかできなかった。

上海の代表的な空間は弄堂、外灘<sup>139</sup>、亭子間<sup>140</sup>などであるが、全て郁達夫の小説の中に表われている。これらの空間は、人物の物語の背景になりつつ、物語の進行上の重要な役割を果たす。郁達夫の上海滞在時の作品は、自分の内的な苦悶だけを注目ではなく、抑圧された下層社会の人々に視線が向けられる。「春風沈酔の夜」、「空虚」、「茫茫夜」、「灯蛾埋葬之夜」等は、当時の上海の階層社会の暗い現実を背景として、社会の実相を暴いている、「沪战中的生活」、「敌机来袭」、「在警报声里」、「全面抗战的线后」、「打听诗人的消息」等では、上海の戦争の苦痛を記録した。1932年、上海の病院で休養していたころ、自身の経験で「马缨花开的时候」を創作し、隠居への憧れを表した。彼の上海での創作は、全体的に上海の現実が直接的にまたは、間接的に反映された哀れで抑圧的な心情が基調である。

これらの作品では、主人公が周囲の世界に抱く不満は、実は郁達夫の不満である。彼は、この汚い都会を離れてこそ、人生の美しさを感じられると信じていた。「还乡记」の中に、列車が出発した後、彼はこう書いた。

現代の物質文明が生み出した貧困は、だんだん大自然に覆い尽くされていく。スラムを通し、大都市に近い小さな町を通し、路の両側には、平坦

<sup>137</sup> 郁達夫著、立間祥介訳（1971）「日記九種」『現代中国文学6』河出書房新社、187頁。

<sup>138</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、170頁。

<sup>139</sup> 外灘とは中国・上海市中心部の黄浦区にある、上海随一の観光エリアである。黄浦江西岸を走る中山東一路沿い、全長1.1kmほどの地域を指す。この一帯は19世紀後半から20世紀前半にかけての租界地区（上海租界）であり、当時建設された西洋式高層建築が建ち並んでいる。

<sup>140</sup> 上海の2階建て住宅の中2階の部屋。下は台所で、大抵は北向きで薄暗くて狭い。

な緑の畑、美しい別荘、きれいな野道と丈夫な農夫<中略>ロマンティックな雰囲気も漂う。<sup>141</sup>

郁達夫の都市生活を描いた小説には、地元の住民の生活の細部や、都市特有の市民意識が描かれることは少ない。特に上海を舞台にした小説では、上海の紅灯緑酒、贅沢三昧の生活や、ダンスホールや競馬場、高級マンションなどの描写は少ない、たとえ書いても、主人公の地位の低さ、貧しい生活を引き立てためである。郁達夫が書き続けてきたのは、彼自身の都市に対する感じ・体験と想像である。

### II-3-1 小説の舞台としての上海の空間

郁達夫が描く上海は、リアルな空間の再現ではなく、すべての風景に彼の主観的な体験が入り込み、感傷と物寂しいの雰囲気に満ちている。その上海を舞台にした小説では、街路、公園、外灘、劇場、亭子間など、田舎と区別される多くの都市空間が、主な描写の対象となる。これらの空間は二つに分類できる、一つは都市の公共空間としての街路や公園、外灘、劇場など、もう一つは亭子間などの都市型のプライベート空間である。これらの都市空間は、作品の中に、孤独と寂寥に満ちた主人公の強烈な個人的、感情的な体験を担っている。

「空虚」の中、于質夫はよく街を漫ろ歩きする。彼の目に映る街路は「深い灰色の埃」と「乱雑」である。路面店に座って窓の外を眺めていると、世の中の喧騒、男女のもつれ、物質世界の繁栄など「自分とは全く関係ない」と感じながらも、騒がしい街で孤立を感じる。

「烟影」の中では、文朴の住むアパートの近くの通りに、空から木枯らしが吹き込み、夕暮れ時の枯葉と灰色の大地を見て、知らず知らずのうちに悲しみを覚えていた。学校から帰宅する子供たちや、街で慌ただしく働く労働者たちの姿は、どこか懐かしさを感じさせる。少年の頃の古くなってぼろぼろの本や街の喧噪を思い出した。上海は文朴にとって通過点であり、少年の頃の故郷こそ、心のふるさとであった。

そのため、郁達夫は上海の都市景観には全く興味がなかった。「落日」の主人公であるYとCは、上海の摩天楼に登ったとき、高層ビルや街の繁栄に気づくのではなく、眼下の人々の喧騒に目を向けた。この人たちは、道路で上の車の間を虫や蟻のように、によろよろ動き、都市で生き延びようと必死になっている。そんな光景が、二人の境遇と結びつき、涙を流しそうになった。小さな人間が大都会で地味に、苦勞して生きていることを嘆いている。

郁達夫の小説の「外灘」もこのような風格を持っている。

静寂な黄浦灘には、通行人はひとりもいない。薄い灰色の街灯の光が、淡い夜に散って<中略>黄浦江で停泊している船は、時々船板と荷物がぶつかる音がして、遠くから車の車輪の音が合わさり、この黄浦江の晩秋の深夜は殊のほか物寂しいのように見える。<sup>142</sup>

<sup>141</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、16頁。

<sup>142</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「茫茫夜」『郁達夫全集』第一卷小説（上）、浙江大学出版社、139頁。

他人から見ればとても繁華で美しく夜景は、主人公にはうら寂しい、氷のようにひんやりとした風景にしか見えない。

「落日」のなかでは、にぎやかな劇場で芝居を見るのは、軽くて柔らかい服を着た貴公子や裕福な家庭の妻や娘たちだ。Yの目から見ると、劇場が娯楽や暇潰しの機能を失い、言いしれない圧迫感や恐怖感だけが残っている。劇場に入ると、「まるで入ってはいけないところに入り込んでしまったかのような、脅迫めいた恐怖が私の胸に起こった。」<sup>143</sup> YとCにとって、劇場は権力の象徴となっていた。彼らは、劇場から短い官能的な喜びを得ることはできても、精神的なつながりを持つことはできなかった。

そして、郁達夫はプライベートな空間について、このように書いている。

鄧脱路の長屋は、地面から屋根までわずか一丈数尺しかない。私のいる二階の部屋はことのほかせまく、背のびをすると、両手がすすけた天井につきぬけそうだった。前の路地からその家の戸口にはいると、そこに家主のいるところで、ボロきれ、ブリキかん、ガラスびん、ふるがねなどがごたごたつんであるなかを身を細めて二足もすすむと、横木がいくつかはずれた梯子が、壁ぎわにかけてある。この梯子段をつたってまっくらな二尺ばかりのひろさのあなぐらにはいり、そこからまた上へのぼるようになっている。まっくらなこの二階はもともと猫のひたいぐらいしかないのを、家主が二間にしきったもので、奥の間の人が私の部屋を通るようになっていたために、私の毎月の部屋代は奥の間よりも何十銭か安かった。<sup>144</sup>

このような狭い空間で、「私のひとりきりの世界である暗い小部屋の、にごった空気は、蒸籠のなかの蒸気のようにむしむしして頭がくらくらした。」<sup>145</sup>

雨風だけを防ぐ部屋に住む「私」は貧しくて苦しい。この亭子間は、華やかな上海とは鮮やかな対比を成す、下層階級の生活の実態を象徴している。「私」はここで、陳二妹と出会い、束の間の慰めと温もりを得た。

郁達夫が上海で得た精神的苦痛を和らげることができる唯一空間は、公園であった。公園は都市の公共空間であり、人の出入りの制限はない。

「蔦蘿行」中の「私」はフランスの公園の芝生で長時間座って、満天の星を眺めていると、公園のダンススタジオから聞こえてくるダンスミュージックが心の痛みを呼び起こし、「私」は公園で慟哭し、公園の芝生で一晩過ごしたりすることもよくある。

「血泪」中に、住むところもない不遇の「私」は、手持ち無沙汰なので、白渡橋の公園に行き、白人の子供たちが遊んでいるのを見たり、時には夜もそこで一夜を明かす。しかし、公園はあくまで「私」の一時的な生息地であり、現実から脱れることはできない。

郁達夫が作品の主人公を混沌とした現実から公園に避難させるのは、自然に親しみ、喧騒と複雑な都市から離れたいたいという彼の心理を表象している。

<sup>143</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「落日」『郁達夫全集』第一卷小説（上）、浙江大学出版社、303頁。

<sup>144</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「春風沈酔の夜」『現代中国文学6』河出書房新社、63頁。

<sup>145</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「春風沈酔の夜」『現代中国文学6』河出書房新社、67-68頁。



## II-3-2 自己アイデンティティの危機

日本での留学体験は、郁達夫に新しい世界をもたらした。その世界は、現代的な都市空間と規則であり、男女関係がオープンで自由な空間である。彼は弱国の民の屈辱と漂泊感を感じながらも、都会の生活に愛着を持っている。それ以来、郁達夫は多くの都市を転々とした、これらの都市空間は彼に新しい時間と空間の観念を与えた。

近現代の中国のインテリは、極めて特殊な条件の下で時間と空間の観念を形成した。時間概念の変化が彼らの空間概念の変化をもたらしたのではなく、空間概念の変化が彼らの時間概念の変化をもたらしたのである。アヘン戦争後、中国のインテリが西洋の世界を発見した、それは新しい空間である。それゆえ、彼らの宇宙観全体が段々古代中国のインテリと全く異なる形に変化した。<sup>146</sup>

都市空間はインテリにとって啓蒙的な意味を持ち、彼らの注意は、外界中心から内界中心へと移行し、独特な視点から世界を観察する。多くの人が社会の変化により、自己中心になり、生活の観察や記録もより個人的で感情的なものになった。空間の変化は、郁達夫の生活に不安を与えた、彼は心の安らぎを求め、仕事を探し、あちこちに漂泊した。そんな体験が、敏感な郁達夫の心を失望と苦悶で満たし、彼は都会の喧騒の中で孤独感に苛まれ、徘徊する。

日本にいても、上海にいても、郁達夫は余計者であった。彼は故郷を離れ、一人で見知らぬ環境の中で生き残るために苦闘している。彼は物質的にも精神的にも、都市から疎外されており、どうしても都市社会と関わることができない。

帰国した郁達夫は、留学経験だけでは上海で安定する職に就けないことを認識した。『沈淪』の出版で有名になったとはいえ、ただ文章を売って、生計を立てていた貧しい人間である。彼は常に半失業ないし失業の状況で、なすすべもなく人生の重荷を背負う。したがって、郁達夫は、自分と同じように経済的にも精神的にも困窮を抱えた現代のインテリを小説の題材にした。

郁達夫の小説の主人公はほとんどが留学から帰ってきた学生である。留学は彼らの学識を豊かにし、帰国後の活躍を夢みた。しかし、現実は残酷で、志を果たすことができないうえ、生きることさえ厳しかった。そのため、ある者は酒に溺れ、ある者は苦悶に堕ち、彼らは一時的な安らぎを求めるようになった。これらの人物はいずれも、郁達夫自身の投影である。当時の社会のインテリに対する、精神的・物質的抑圧を訴えた。しかし彼らは文句を言う以外に解決策を見いだせない。

「在寒风里」の「私」はこのような都市の漂泊者である。彼は住むところもなく、都市を漂泊するが、その一方で、故郷に戻ることを拒んでいる。ようやく家族に促され、しばらく家に戻ったこともあった。そして、都市に帰る際に、子供の頃の小さな神龕を持ち出た。彼は心の底では、この神龕を最高級のおも

<sup>146</sup> 王富仁 (2000) 「時間・空間・人 (一) ——魯迅哲学思想的刍议之一章」『魯迅研究月刊第 1 期』、7 頁。

ちゃとして使おうとしていたのだ。小さな神龕はここでは象徴的なもので、かつて家族皆で作り、大切にされ、家族の幸せと平和を願っていたが、今は隅に捨てられている。故郷とは、「私」の無意識のなかにあり、幼い頃の記憶だけが残っていて、もはや住める場所ではない。都会でどんな大きいなプレッシャーがあっても、都市に留まり、故郷に戻りたくとは思わなくなった。

「空虚」の主人公も、海外留学して、上海に帰ってきた青年である。上海に戻って後、彼は社会が無限の海のようにあり、その複雑さは自分の想像を遥かに超えると感じた。彼は都会での活動は、まるで大海を、数日間も泳いだ後に、挫折感だけをも得たような気がした。まず、彼が恥ずかしくなるくらい、上海の男女の身なりは優れていた。そして、留学から帰ってきた自分は優秀だと思い、好みの仕事が見つかると思っていた。しかし、現実には、当時の中国社会は学歴の価値を重く見てくれず、結局、彼は居場所を見つけられないまま、上海を漂泊する。

郁達夫が描いたインテリは皆、理想と志を持ちながら、暗い現実の中で挫折を味わうことになるが、現実と折り合いをつけようとせず、ジレンマを抱えたままである。その理由は、自己のアイデンティティに危機感を抱いているからである。

郁達夫は、他のインテリと同様、懸命になって都市の中に現代的な思想と意識を探し求め。「五四運動」という新文化運動によって、彼らは「人」と「自我」を発見したが、それでもまだ自己は解放されず、子供の頃から教えられてきた伝統的なイデオロギーに常に束縛されたままであった。彼らは伝統と現代の狭間で途方に暮れ、新旧の思想の衝突という苦悶に巻き込まれ、この時代をどう生き抜くべきかを問うている。郁達夫は「蜃楼」のなか、主人公の陳逸群の口を借りて言う、彼は自分の人生そのものを悲劇だと考えている。この悲劇の根本原因は、この奇形的な時代である。そして、中国に生まれ、不完全なヨーロッパの知識を持って帰ってきた自分はこの奇形的な時代の奇形児である。新しい酒を古い革袋に入れる、結果的に古いものも新しいものもともに生きない。郁達夫も同様に、この現代社会がもたらす矛盾の中で、東西文化の衝突を体験しながら、自分の居場所を見つけられずにいた。

### Ⅲ 北京の余計者

北京は、中国の都市の中で極めて重要な役割と意義を持っている。

もし、歴史的な深い理由があるため、それ自体が「スピリチュアルな質」を持っているならば、またそこに住む人々、かつて住んでいた人々、そして通り過ぎる人々に、目に見えないほど大きな影響を与えることができる都市があるとすれば、それは北京であろう。<sup>147</sup>

五朝古都として、北京の都市文化、人文建築、市民文化などには、奥ゆかしい歴史的背景がある。古代では、ここに国子監と翰林院などの教育行政機関や学芸機関を設けられた。現代では、ここに中国国内でも最高レベルの高等教育機関、図書館、新聞社、研究所があり、インテリたちの生存環境と発展の空間を提供している。

1931年、北平には26校の大学があり、国のほぼ半分を占めていた。国立大学では、北京大学、清華大学、北京師範大学、北平大学などが有名である。私立大学では、燕京大学、輔仁大学、協和大学、中法大学などがある。中学校と高等学校では、1929年に48校、1938年には88校があった。小学校では、1935年に246校があった。北平には2所の最高学術研究機関(北平研究院と中央研究院)があり、国内最大規模の図書館、建物、文化遺産、文献、資料、書籍などが豊富にあり、学術的な研究を行うのに最も便利な

---

<sup>147</sup> 赵园 (2002) 『北京：城与人』北京大学出版社、1頁。

場所となっている、他の専門文化施設も数え切れない。<sup>148</sup>

こうして、北京は中国文化・中国文学の中心となった。

中心は重心であり、バランスと交わる所である。南部の水郷地帯の豊かさと美しさ、北部の草原の荒々しさと大胆さ、西部の砂漠の荒涼とした広がり、東部海岸の暖かさと繁栄など、どれも個性的でユニークなものばかりである。しかし、それらがすべて合流する所——北京、それこそが中華民族の個性と文化のすべてを丸ごと表現できる〈中略〉数千年の文明、百数十年の近代史、身近な現代史、繊細な当代史、すべてがこの京都で錬成されている。<sup>149</sup>

1910年代の中国新文化運動は北京で起こり、北京に新しい洗礼をもたらした。官僚主義を特徴づける権力意識が批判され、独立意識と自由精神を持った新しいインテリが育ってきた。彼らは伝統的な文化的背景を強く持ちながら、外国からきた新しい文化の衝撃を受け入れた。北京は、彼らに深い伝統的な文化環境、自由的・開放的な学術の雰囲気、民主的・科学的の時代であり、安定で裕福な生活環境を提供した。陳独秀、胡適、李大釗、周氏兄弟などは、かつて、北京大学で教えていた。1917年、蔡元培は北京大学学長に就任し、「救国教育」を目指した。

陳独秀は、北京大学の文学部長になっただけでなく、雑誌『新青年』の編集にも携わった。胡適は北京大学の有名な教授となり、プラグマティズムにもとづく近代的学問研究と社会改革を進めたうえに、教室の自由で開放的な文化の雰囲気をつくった。上海で結成された『新青年』は、陳独秀が北京大学に赴任すると、一斉に北京に移り、新文化運動の中核的指導部を形成し、全国に新しい思想を広めていったのである。1921年、北京で北京研究会が設立され、独自の機関誌『小説月報』を発行し、本格的な文学の創作に専念する作家や読者が多く集まり、影響力を持った。その後、「語絲社」など学会が結成されている。『京報』副刊<sup>150</sup>や『晨报』副刊は、新文化運動期に愛国運動を支持し、進歩的な思想を広める新聞となり、北京の文化界に大きな影響を与えた。

1918年、『新青年』が原稿料の廃止を発表し、多くの出版社に模倣された。その結果、このような判断基準が出てきたのである。

どの新聞・雑誌が新文学の定期刊行物かどうか、どの作家が新文学の作家かどうかは、作品の中身を見る必要はなく、出版社が原稿料を払っているかどうか、作家が原稿料を必要とするかどうかだけを見ればいいのである。<sup>151</sup>

この判断基準は、当時の作家や評論家のほとんどが大学に就職し、安定した収入を得ていたため、北京の文化圏において、商業的な功利から離れ、政治か

<sup>148</sup> 「民国时的北京，鲁迅等大学教授月薪的购买力，是如何恐怖的存在」  
[https://m.sohu.com/a/587562708\\_121165106](https://m.sohu.com/a/587562708_121165106)（参照日：2022年9月5日）

<sup>149</sup> 柯云路（1988）『夜与昼（上册）』人民文学出版社、5頁。

<sup>150</sup> 副刊とは新聞の文芸・学芸欄。

<sup>151</sup> 魯湘元（1998）『稿酬怎样搅动文坛』红旗出版社、192頁。

ら独立し精神を持つような雰囲気は自然に形成された。この時代のインテリは、北京大学と『新青年』を中心に動き、他の学会とともに「思想の自由」「包容力」「科学的の民主主義」という時代の精神を推進した。強い批判精神と再構築の意識で、伝統に立ち向かう。しかし、陳独秀の逮捕や新青年団体の分裂などで、新文化運動はすぐに高潮から低潮にながれた。

北京という所では、五四運動の発祥の地でしたが『新青年』『新潮』を支えた人々が散って以来、この1920年から1922年の3年間、寂しく荒涼とした古戦場と化してしまっただのである。<sup>152</sup>

中国の情勢が変化し、社会の政治状況も変化し続けるにつれ、反動的な政権と進歩的な文人や愛国の民衆の間でより大きな矛盾が生まれました。

1927年、軍閥である張作霖が李大昭らを殺害し、『語絲』の出版が差し止められ、『現代評論』などが廃刊に追い込まれ、文人たちが生きるための文化生態が大きく損なわれてしまった。同年、南京国民政府が南京に首都を置き、北京を北平と改称すると、北京は政治・文化の中心地としての地位を失い、民族や階級間の緊張が顕著になり、内外の苦境に立たされることになった。

北平は都市ではあるが、上海でいうところの現代的なメトロポリスではない。上海には賑やかな十里洋場、まばゆいのネオンサインがある一方、北平の風景はみすぼらしく、灰色で無気力である。当時、北平は上海のアンチテーゼとして扱われ、人々よく上海と北京を比較された。魯迅も正面切ってこう言った。

北京は明・清の帝都、上海は各国の租界で、帝都には官吏が多く、租界には商人が多く、文人は北京では官吏に近寄り、上海では商人を身近に見ていたのである。官吏に近い者は官吏を有名にし、商人に近い者は商人を儲けさせ、自分はこれを生業としている。要するに、「京派」が官僚のために太鼓持ち、「海派」は商人の手伝いだったのである。<sup>153</sup>

しかし、より多くの人々が、上海は新しく、テンポが速く、工業社会であると気付いた。その一方、北京は、上海に匹敵するような、国営の大商社がなく、商業的に後進で、静かでのんびりしている。

上海は現代化と商業化を象徴し、中国の伝統的な農耕文明からますます遠くなり、心理的な意味での「故郷」になることはできない。逆に、北京人の優雅で、利益より義理を重んじゆったりとした気質は、中国の文人たちの心の拠り所、精神の支えになり、心理的な故郷となる。

郁達夫は3回北京に行っている。最初は、1919年9月下旬から11月上旬である。外交官試験を受けるためであり、東京帝国大学に入学したばかりの郁達夫は、長兄の郁華の意見を聞いて、外交官と高等文官の試験を受けるために北京に帰った。しかし、郁達夫は試験に合格できず、再び日本に戻らなければならなかった。この年、郁達夫は23歳だった。

2回目は1923年から1926年である。1923年2月で、郁達夫は安慶の教職を辞めた後、一人で北京の長兄の家に住んだ時である。その理由は、「十一月初

<sup>152</sup> 魯迅（1998）「且介亭雜文二集」『魯迅全集』第六卷、人民文学出版社、245頁。

<sup>153</sup> 魯迅（1981）「京派与海派」『魯迅全集』第六卷、人民文学出版社、432頁。

三」に書かれている。「上海で文芸の仕事に失敗した私は、仕方なく同級生たちの親切を受け、しぶしぶ北京に逃げてきた。」<sup>154</sup>北京に滞在する期間に、彼は魯迅や周作人らと知り合いになり、周作人は郁達夫の『沈淪』を大いに褒めたたえ、彼は『沈淪』に対する批判に反論した。1923年10月、北京大学の統計学の講師に招かれた郁達夫は、翌年の春、妻子を連れて北京に渡り、什刹海のそばに住んでいる。彼は完全に北京に住んでいたわけではなく、他の仕事のため頻繁に外地に出た。1925年10月、職を辞め、武昌や杭州や上海を訪れた。1926年の端午の節句に長男が亡くなり、10月に郁達夫は北京を離れた。この時期の郁達夫の小説で北京に言及しているのは、「血泪」「孤独」「人妖」「ささやかな供えもの」「十一月初三」「街灯」「祈愿」などがある。

3回目は1934年8月14日から9月5日までの20日間である。その年の杭州の気温が高かったため、郁達夫が暑さから逃れるために北京に行ったのがきっかけだった。郁達夫の「故都日記」によると、この年の9月初旬、杭州ではまだ華氏100度だったが、北平では80度しかない。そのため、郁達夫は避暑を兼ねて、北京にきた。彼は、本を買ったり、創作をしたり、友人を訪ねたりした。「故都日記」の中には、その時の楽しかった様子が書かれている。北京の秋に心酔した彼は、「故都的秋」や「北平的四季」などの作品を書いた。郁達夫の印象では、北京は「異物と化した故人」であった。彼の作品から、北京の風俗や文化の詳細は見えないが、北京が彼にもたらした感覚と変化を感じることができる。

### Ⅲ-1 行き場のない余計者

北京は典型的な政治都市であり、厳しい階層的な社会環境は新文化運動によって少し変わったが、全体的な雰囲気はまだ郁達夫にとって受け入れがたいものである。しかし、この都市の中華文化は深い蓄積をもっており、その豊かな歴史と優雅な趣味、のんびりした気質と義理人情に厚い文化特性に、郁達夫は深く惹かれた。

ある地域の空間の感覚や体験は、往々に単なる地理的な認識ではなく、感情や記憶、歴史が混ざり合った総合的な体験である。空間は、さまざまな社会の関係と生活がからまる重要なポイントとなり、空間性、歴史性と社会性の三方面からの議論は、一定の浸透力を持つ。<sup>155</sup>

1923年10月に再び北京に来た郁達夫にとって、北京はもはや地理的な概念ではなく、再適応しなければならない新しい空間であった。北京と上海の全く異なる文化的雰囲気は、彼に新しい思考と選択肢を与えた。1923年10月、郁達夫は北京大学で自分の得意とする文学ではなく、統計学を教えており、兄の家を借りて生活していた彼は、退屈な仕事に、不満を覚えた。郁達夫は、自分

<sup>154</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「十一月初三」『郁達夫全集』第一卷小説（上）、浙江大学出版社、384頁。

<sup>155</sup> 丹珍草（2009）「阿来的空間化写作」『百色学院学报第4期』、49頁。

のことを、社会から見捨てられ、悲劇的な運命から逃れられない余計者と感じた。そして、北京に到着して2ヵ月後、郭沫若と成仿吾に手紙を書いた。手紙の中には、彼が北京に着いてから、苦悶が晴れるどころか重くなったと綴られていた。

私は何を望めばいいんだ？ああ、これ私はこれ以上に、何を望もうというのだろう。上京とは、元々袋小路である。北京の空気がいかに腐っているか、街の人々がいかに陰険であることは、私はとっくに知っていたのだ。〈中略〉北京に来てから、清新の時間は一瞬たりともない、汽車を降りる日から今まで、雲から落ちる雨粒のように、ただ沈んでいくだけだ。<sup>156</sup>

実はこの手紙の中で、郁達夫は自分の日常生活はそれほど悪くないとも書いている。北京に来て翌日には散髪をし、新しい服を着て、講義ノートを持って、欣々然たる様子で学校に行った。しかし、それでも苦悶や退屈を感じ、そんな生活に嫌気がさした。

北京、大都会！首都！最良の場所！私は、田舎の多くの盲目の若者と同じように、このような素敵な言葉に騙され、身内にもまさる友人たちと別れ、命まで支え価値がある事業を捨て、辛い旅で疲れ果て、北国の汚濁にまみれた人海のなかを2、3年の間泳ぎ回った。<sup>157</sup>

彼は北京に対する嫌悪と憎悪に満ち、激しい言葉で北京を罵倒した。

美しい北京城、繁華な皇居、私はもうあなたに未練はない！…殺せ！殺せ！死ね！破壊せよ！破壊せよ！私は十分に苦しんだ、お前からの圧搾、屈辱、踏みにじるにもう十分だ、もう十分だ！<sup>158</sup>

この時の郁達夫の気分の変化は、個人的な感情に完全に支配されていたわけではなかった。

新文学の最初の10年には、文壇に感傷的な空気が漂う、作家たちは苦悶、孤独、不安を表現することが多い。小説、新詩、戯曲いずれも、強いセンチメンタルなトーンが貫かれている。感傷はこの時期の新文学の精神的な象徴になった。<sup>159</sup>

この感傷の源は複雑である。西洋の文明と文化の浸透は、若いインテリを目覚めさせ、中国を変革しようという野心に火をつけたのである。しかし、現実の暗さと醜さは彼らに何もさせず、彼らは何もできず、そのため、ほとんどの作家は退廃、不安、苦悶に陥り、感傷的に現実に向かい、何も変えることができなかった。

<sup>156</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「一封信」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、73-74頁。

<sup>157</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「送仿吾的行」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、115頁。

<sup>158</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「給沫若」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、89頁。

<sup>159</sup> 钱理群、温儒敏、吳福輝（1998）『中国现代文学三十年』北京大学出版社。

日本から帰国した郁達夫は、自分の知識を活かして国のために尽くしたいと思っていたが、八方ふさがりになり、国に報いることができない。経済的な原因で、仕方なく北京大学の先生をしたが、大好きな文学ではなく、統計学を教えることを選択せざるを得なかった。そんな現実に対して、彼は自分の人生について思考し、あちこちで漂泊している現状を、明晰に認識した。

1924年、「零余者」を創作した。社会に捨てられ、生活不順な余計者の人物像を描写した。この余計者は、懐に金がなく、心に憎しみを持っている。社会や世の中の役に立たないと思っている。そんな、志はあるが社会に居場所のない、繊細で疑り深く、不合理な社会や悪い習俗に憤りと憎しみをいだく青年に、読者は共鳴した。その後、余計者は、郁達夫の小説の中で重要な象徴となった。例えばもう一つの小説「青烟」も、生活の乏しい青年の、全ての事業と願望は、掴みがたい青い煙のように、社会から排除される余計者の運命にある。

「余計者」（「零余者」）という名詞が初めて登場したのは、郁達夫の訳した19世紀ロシア文学を代表する文豪のイワン・ツルゲーネフの『余計者の日記』<sup>160</sup>である。

ツルゲーネフは、郁達夫にとっては最も影響を受け、一番好きな作家である。郁達夫は留学の時に、初めてツルゲーネフの作品と出会い、その淡いメランコリックなムードとロマンティックな雰囲気虜になった。

古今東西の多くの外国人作家の中で、ツルゲーネフは最も愛らしく、最も親しく、長い付き合いでも飽きない作品というと、ツルゲーネフだ。＜中略＞私は小説を読む、小説を書くきっかけは、完全にこの柔和な顔つきの、ちょっと憂いを帯びた目をした、ほおひげを生やした北の巨人の影響である。<sup>161</sup>

ツルゲーネフの作品を読み、郁達夫はその中に描かれている「余計者」の人物像に惹かれるようになった。

ツルゲーネフの *The Diary of a Superfluous Man* を読むのはこれで3回目だが、大文豪の作品はオリーブを噛むように、噛めば噛むほど味が出る。<sup>162</sup>

郁達夫とツルゲーネフは多くの共通点がある。社会不安の時代に生き、敏感であり、憂鬱であり、繊細である。そして、父親を早くに亡くし、愛や暖かい子供時代を過ごすことなく、複雑な恋愛や結婚を体験したことなど。郁達夫がツルゲーネフの作品に精神的な共鳴を覚えたのは、このためだろう。

ツルゲーネフの多くの小説は、「余計者」である人物が多い、彼らは貴族出身、高い教養、野心と理想を持ち、社会の現実に不満を持っているが、それを変える力がない。一日中長広舌を振るう、上流階級にすぎらない、下層階級にも寄り付かず、などの特徴を備えている。いわゆる社会の「余計者」である。彼の小説「ルージン」（「Рудин」、1856年）の中の主人公は、最も代表的で

<sup>160</sup> *The Diary of a Superfluous Man* (*Дневник лишнего человека*) (郁達夫の訳は『零余者日記』)

<sup>161</sup> 郁達夫 (2017) 「屠格涅夫的<罗亭>问世以前」『郁达夫文论集』吉林出版集团股份有限公司、389頁。

<sup>162</sup> 郁达夫著、吴秀明等編 (2007) 「水明楼日记」『郁达夫全集』第五卷日记、浙江大学出版社、324頁。



ある。

郁達夫が描いた「零余者」はツルゲーネフの「余計者」と気質が似ている。郁達夫が作った人物は、生まれつき敏感、繊細、憂鬱な性格で、伝統的な家庭に生まれ、動乱の時代を生きた。彼らは、祖国が強くなることを憧れながらも行動力に欠け、美しい恋を追い求めるが恋愛は失敗することが多い。こうした人物像は、郁達夫の小説の中では色々の名前をもって登場してくる。「沈淪」「銀灰色的死」、「人妖」の中には「他」。「南遷」の中には「伊人」。「烟影」、「秋柳」、「离散之前」の中には「文朴」。「茫茫夜」、「怀乡病者」、「空虚」の中には「于質夫」。「蔦蘿行」、「胃病」、「血泪」、「青烟」、「街灯」、「ささやかな供えもの」、「微雪的早晨」、「祈愿」、「瓢儿和尚」の中には「我」、「過去」の中には「李白時」、「落日」の中には「Y」である。

これらの人物像は、ひどく痩せこけており、神経質で、非常に繊細である。彼らは高い文化的教養を持ち、現代人の精神を持っているが、自らの運命を掌握する力はない。彼らは社会の暗闇を憎み、自らの惨めさを嘆く、覚醒者として世界を見直した。自分たちが社会にとって余計な存在であることを知りながら、また沈淪するのも悔しいまま、最終的に、苦悶の中でもがくしかない。

1923年に書かれた「蔦蘿行」は、余計者による社会への訴えとも言える。主人公の「私」（我）は生まれつき臆病である、「性の苦悶」だけでなく「生の苦悶」にも持って、落ちぶれる書生である。

普段は責任感が強く、しかも必要のないところで、反対にひどく隠忍自重してしまう僕は、留学中も、本を一冊も著せず、一説を立てることもなかった。生まれつきの臆病で、小さい頃から劣等感にとりつかれていた僕は、新聞雑誌あるいは大勢の大衆の前で、ほんのちょっとの気炎をあげることもできなかった。図書館か、さもなければ喫茶店の中や山水の懷で暮らしていた僕は、現代の青年たちが「科挙の場」のようにみなしていた大衆運動が起こった時、悲壮な演説をしたり、無意味にしゃしゃり出ることなど決してなかった。<sup>163</sup>

この小説は、まるで郁達夫の早期の結婚生活のようで、夫婦の間に愛情はなく、お互いを尊重し理解することもない。「私」は家の重荷を背負い、社会からの圧搾に耐えなければならない。

私の哀愁、私の悲嘆は、道德家と呼ばれる人よりも、数倍の沈痛である。私は墮落者ではなからうか？私は魂のない者ではなからうか？私は人生の運命を見抜くので、自分を楽ませるためにそうせざるを得なかったのである。半年間無職だった結果、日々の夢見る脳にいろいろな体験が加わった。世界には自分と似たような、多くの悲しい男女がいる。私のこの幾つの小説で、スラム街や荒寺にいる哀れな読者を探し出したいだけなのである。<sup>164</sup>

<sup>163</sup> 郁達夫著、白水紀子訳（2000）「蔦蘿行」『中国現代文学珠玉選小説1』二玄社、34頁。

<sup>164</sup> 郁達夫（2017）「〈蔦蘿行〉自序」『郁達夫文論集』吉林出版集团股份有限公司、593頁。

国は衰退し、暗闇の中で腐っていく。国を愛しながらも国に尽くす術を持たない余計者たちが、この激しい競争社会で必死に生き抜いているが、貧しい彼らは、精神も空っぽで、希望が見えない。

この時期に同じ北京に住み、郁達夫よりも生活が貧窮する沈從文（1902年-1988年）は、郁達夫に助けを求めた。郁達夫は沈從文に返信を書いた、当時の社会では大きな反響を呼んだ。

この返信は「ある文学青年に与える公開状」（「给一个文学青年的公开状」）と題され、郁達夫は憤慨に堪えぬ気持ちでこう書いた。

大卒で車に乗り、アヘンを吸う、一攫千金の者はいる。彼らは新しい権力者のために、自分の仕事を安く売る人たちばかりである。後ろには大刀と鉄砲を持っている人たちに支えられて、父親や兄弟は何かの長をやっている。もっと耳苦しい言葉で言うと、彼らはせめて爬烏龜<sup>165</sup>、鑽狗洞<sup>166</sup>の人たちばかりで、君が彼らみたいに後ろ盾があるか、あるいは彼らの真似をすれば、大学を卒業しなくても、食べられるのでは？<sup>167</sup>

郁達夫は、当時の中国の暗い世相を深く認識しており、沈從文の絶望的な苦悶を理解していた。彼はこの手紙で、政治の腐敗に対する憎しみと、社会の不公平に対する無力感を表現した。そして、郁達夫は沈從文が生計を立てるための二つの道を示した。一つは、沈從文が何か普通の仕事をする、例えば土匪になって、人力車を引くとか。しかし、沈從文は書生であり、そんなことはできない。とは言え、新聞社の校閲、家庭教師、門衛、使用人などは、紹介がなければありつけない。もう一つの道は下下の策、泥棒になる。この手紙は暗い現実を暴露し、訴えた。多くの若い読者の共感を呼んだ。

郁達夫は、自分がこの都市での地位や立場を深く自覚している、余計者として、自分の野心やら、志やらに対して無力である。小説「ささやかな供えもの」は、北京の人力車夫の悲運を書き、短編の『駱駝祥子』<sup>168</sup>と評されている。

この車夫はまだ42歳だが、50代に見える。背骨が曲がっていて、深刻な表情をしている。社会から虐待を受け、黙って苦しまなければならず、やがて悲惨な死を遂げる。小説では、車夫と車夫の妻との言い争いの原因が詳しく描かれており、車夫が憤慨した声で「私」に不満を言った。

「こいつがですよ、わたしが苦勞して貯めた三円あまりの錢を、パアッと使っちゃったんです。死体でも包みそうな、こんな布なんか買いくさって…」

いいつつ足で蹴ると、地面に白い布がこぼれた。かれはわたしに挨拶しながらも、眉をしかめてつづける。

<sup>165</sup> 卑怯者、おとなしく従う

<sup>166</sup> 鑽狗洞((慣用語))裏から手を回して権力者に取り入る。

<sup>167</sup> 郁達夫著、吳秀明等編(2007)「给一位文学青年的公开状」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、106頁。

<sup>168</sup> 『駱駝祥子』は中国の作家老舍(1899年-1966年)によって1936年雑誌『宇宙風』に発表された作品。1920年代の北京を舞台に貧しい人力車夫「祥子」を描いた小説。

「わたしの気持ちを、こいつ、ちよともわからねえ。わたしが金を貯めてどうするかって？ボロ車でいいから自分のを買って曳きさえすれば、車宿の借り賃をとられないですむってことですよ！暑けりゃ、うちら貧乏人は裸をさらしても、なんてこたない。なのにこいつはキャラコなんか買いこんで、服つくるってんです。旦那、おこらずにいられますか？」<sup>169</sup>

車夫の願いはそれほど高くはなく、ただ古い人力車が欲しかっただけなのだが、「私」は彼を助けたいと思ったが、自分も無力である。結局、車夫のテーブルにそっと銀時計を置いて、車夫がそれをもって返すと、決して自分のものだと認めない。

### Ⅲ-2 余計者の目に映る都市のランドマーク

人々の都市に対する理解は、まずそのレイアウト、建築、都市文化から始まる。ランドマークとなる建物は、その都市のアイデンティティを担い、都市を理解するための入り口となることが多い。しかし、北京のランドマークは郁達夫にとって何の感情もなく、北京城は郁達夫の創作にとって、北京はただ物語の運び手である。

郁達夫は北京が故郷の感覚が与えてくれたを認めているが、彼の小説における北京の描写は、老舎のような詳しい市民生活の描写はない。このような特性は、二つの要因がある。一つは、郁達夫の小説は「私」の内的世界を中心に描くことが多く、そのために周囲の物事に対する観察がおろそかになる。もうひとつ重要な理由は、北京は郁達夫が生まれ育った場所ではないので、不案内である。北京に住んでも、郁達夫は北京に帰属意識はない。北京を舞台にした小説作品では、北京の特徴は感じられない。特に、余計者の心理を小説の人物に投影しているため、彼らは、北京の街をさまよい、都会の人々から距離を置き、身を局外に置くの視点で世界を観察している。

小説「十一月初三」の中の、退屈な主人公が外に出て、次のような光景を目にする。

玄関を出て、通りを二回ほど走ってみると、革の帽子をかぶり、剣を持った軍人がたくさんいて、うごめいているのは、私と同じように目的のない二本足の獣ばかりでした。棺の前には、楽器を吹奏している人の列がいた。この忙しくて短い午前、車や馬車が並ぶ中、棺桶のようにゆっくりと動いていた。この特異な現象に一瞬目を奪われたが、立ち止まって見ると、無味乾燥であり、仕方なく居酒屋に入った。<sup>170</sup>

郁達夫は普通の地上絵から都市を観察するのではなく、パノラマとして、都市を鳥瞰する。

「地上絵」とは歩行者が都市の奥深くまで歩き、補完し合う空間をつな

<sup>169</sup> 郁達夫著、阿部幸夫訳（1971）「ささやかな供えもの」『現代中国文学6』河出書房新社、80頁。

<sup>170</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「十一月初三」『郁達夫全集』第一卷小説（上）、浙江大学出版社、379頁。

ぎ、粉々の都市を再構築する過程で、広大な都市を深く認識、体験ができる。歩行者の地上絵は日常の行動と密接に結びついている。<sup>171</sup>

しかし、郁達夫の小説では、地上絵ですら都市に対する認識や理解を欠いており、街路に並ぶ風景も余計者の目には美的価値や意味もない。

「怀乡病者」の主人公である質夫は、北京に漂泊している青年である。貧しい彼は、夜更けに街を彷徨う。

冷たい灰色の光の中、いくつかの通りや路地を渡り、玉簾橋を歩いていくと、夢から覚めた子供の泣き声のような、物寂しい喇叭の音が、彼の冷たい二つの耳に届いた。<sup>172</sup>

このシーンは、冷たく哀愁に満ちたもの、主人公の孤独を表現した。質夫は胡同を歩き、玉簾橋を登り、これらのランドマーク的な地理位置は、主人公が場所を通過するだけで、物語は進まない。

「人妖」は家で長煩いをしていた少年が、偶然に街へ出る物語である。「四牌楼大街」「順治門」「東交民巷」「齊化門」など、北京の地名が多くされている。しかし、これらの「北京の地名」を、少年は通り過ぎるだけで、物語の推進や人物の性格と情緒の変化には対応しない。少年は人力車に乗って、周囲をざっと見ただけで、歩行者や街の風景に興味を持たず、ただ、久しぶりの外出に何となく興奮している。

今は午後2時くらい、ちょうど北京城の住民が外に活動する時間であり、人力車が四牌楼大街に通過したら、彼は四方にたくさんの車が走り、歩行者が通っている、車に乗る人は中年の男性や若い女性もいて、彼は今日は特に面白い通りだと感じた。＜中略＞車が順治門を通過すると、病気前によく感じていた高尚で威厳の印象と、人間の忙しさの感覚が蘇ってきた。ただでさえ体つきがぶよぶよして、血の気がなくて青白い顔色が、この長い闘病生活でさらに白くなっていた。<sup>173</sup>

やがて彼の注意力は、偶然に出会った女性に集中し、彼は人力車夫にその女性についていけと言いつけた。その後、彼は通り過ぎるすべての道や建物を無視して、ただ、その女性のばさばさとした髪とすべすべした肌を観察するようになった。

「ささやかな供えもの」の中の「私」は北京で一人暮らしをしている。「私」は一人で異郷の繁華街にいるが、孤独を感じる。この日は暇だったので、地元の風景を楽しむために出かけた。城門から外に出て、またそこから戻ってきた。

平則門を入れて南に折れると南順城街である。南順城街の東側、はじめ

<sup>171</sup> 孙逊主編（2008）「都市空间与文化想象」（都市文化研究第5辑）上海三联书店、81頁。

<sup>172</sup> 郁达夫著、吴秀明等編（2007）「怀乡病者」『郁达夫全集』第一卷小说（上）、浙江大学出版社、172-173頁。

<sup>173</sup> 郁达夫著、吴秀明等編（2007）「人妖」『郁达夫全集』第一卷小说（上）、浙江大学出版社、320頁。

ての胡同が巡捕庁胡同である。

<中略>

一日、わたしは全門外で酔った。知人の家で着たまま半夜を寝てしまい、醒めたときは下弦の月が昇る時刻だった。韓家潭で車を拾い西单牌楼まで曳かせ、西单牌楼で乗り替えのとき、またかれに遭った。半夜の酒は醒め、灰白色の死寂のなかに一、二台の自動車が行き交ってほこりをたてる以外、べつだんの動きもない大通りを、ゆっくりと曳かれて家にもどった。<sup>174</sup>

主人公が歩いた場所にはたくさんの北京の地名が出てくるが、彼はただ通り過ぎるだけで、少しも感情的な停滞はない。郁達夫がこれらの名前を挙げるのは、読者にこの都市の様子を伝えるためであり、それ以上の叙事的作用はない。

郁達夫の他の小説「十一月初三」「街灯」「祈愿」の中には、北京のランドマークとして、例えば劇場と遊郭が書かれている。この二つのランドマークは、当時の北京では非常に目立っていた。

「十一月初三」は、北京で一人暮らしをしている主人公が、誕生日の日に劇場で観劇して、舞台上の芝居に興味を持たず、劇場を出て娼婦と思われる女性に出会う。「孤独」は劇場の騒々しい喧騒よりも、娼婦と弦楽器の奏者、長年離れ離れになっていた父と娘の正常でない恋愛話である。「祈愿」は、可愛くて、哀れな娼婦銀弟の物語である。彼女は「街灯」の中の妓楼「春濃処」を出て、名前を変えて、別の妓楼に移った。しかし、郁達夫はこれらのランドマークに感情を込めず、主人公と物語から距離を置いており、それらはただ物語の背景に過ぎない。

遊郭や劇場は北京の伝統的な文化を示すランドマークであり、郁達夫にとっては単なる憩いの場であった。「ささやかな供えもの」の中には、彼がつまらないと感じ、遊郭や劇場、酒館や茶楼に酔生夢死するが楽しめない。結局、平則門の外に出る。郁達夫は「祈愿」の中で銀弟という娼婦のことを書いた、彼女の生計を立てる手段は穢れているが、銀弟にも感情があり、魂がある。主人公は、自分と他の嫖客と比べ、内なる孤独や怒り、悲しみを更に深めていく。小説中の「私」は、ストーブの前の安楽椅子でタバコを啜えながら、孤独感を強く感じる。

この明るい廂房で、孤独な私のまわりには窓を打つ風や雪の音だけである  
<中略> ああ、孤独だ、孤独だ、この人生永遠の孤独がつきまとう！毎日毎日、この赤と緑の酒色に浸っているが、孤独感が一度も消えたことはない。特に宴会が終わったあと、静かな真夜中、私の体は疲れすぎて動かなくなり、この孤独感はますます深くなる。<sup>175</sup>

郁達夫が見た北京のランドマークは、観察や描写の対象ではなく、彼の感情や考えを表現するための伝達手段である。このような表現は、郁達夫の漂泊の地において、疎外感を反映している。

この疎外感は、一種の「外地の人の創作」とも言える。郁達夫は北京の生ま

<sup>174</sup> 郁達夫著、阿部幸夫訳（1971）「ささやかな供えもの」『現代中国文学6』河出書房新社、78-79頁。

<sup>175</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「祈愿」『郁達夫全集』第二卷小説（下）、浙江大学出版社、44-46頁。

れ育ちではないので、北京で「郷土」を感じても、北京の市民の生活に馴染むことができず、北京人の日常生活を探ることにも興味が持てなかった。郁達夫は自分の感情や運命に関心を持ち、あるいは自分と同じような人生を歩んでいる外地の人に注目している。漂泊者、娼婦、車夫、役者…これらの人々は、身分は低く、不遇である。郁達夫は「われらは皆苦難を味わって集まった者たちだ」という精神的なつながりを感じた。彼の関心は、都市がこの人たちの運命に与える影響ではなく、この人たちの内なる孤独と苦悶である。

### III-3 余計者の逃避

郁達夫は、心の底では自分が「余計者」であることを認めた後、ヨーロッパの「余計者」のように立ち上がって抵抗することはなかった。彼は自分の悲惨な運命の根源を知っているのだが、自分の力の弱さを嘆き、現実逃避して闇の勢力に同調しない道を選んだだけだった。郁達夫が描かれた人物は、常に自分のことを貶して、劣等感を持って、自己憐憫する。

「蔦蘿行」の中の主人公が自分のことをこう言った。

生まれつきの臆病で、小さい頃から劣等感にとりつかれていた僕は、新聞雑誌あるいは大勢の大衆の前で、ほんのちょっとした気炎をあげることもできなかった<中略>生まれつき要領が悪く、交際が下手で、人に取り入るのが不得意な僕は、冷静に言えば、生存競争が激烈で、至る所に落とし穴が隠されている現在の中国社会では、当然生存の資格がない。<sup>176</sup>

「十一月初三」の主人公は、自分の誕生をヒキガエルの誕生と言い、自分の誕生を猫や犬の誕生と比較する。このように過剰なまでに自分を貶めるが、実は現実から自分の弱さ、無能さを逃避させたいのであり、内心のバランスを求めたいのである。これらの人物には、郁達夫の影がある。郁達夫自身は世の中の現状に対し憤りを持つが、性格がどうも弱くて頼りない。彼は社会への不満は口にするが、悪と戦う勇気はない。その結果、彼は世間から遠く離れた場所に逃げ込むことを望むしかない。

また、中国文化では「逃げ込むこと」は「隱遁」と呼ばれる、中国で独特な文化現象である。魏晋時代の名士が、乱世に災禍から逃れ、隱遁することを選択した。世間は、このような逃避を、流れに乗りたくないという高潔の表現として賞讃する。郁達夫は日本でいじめられていた頃から、人の群れから離れ、自然に回帰したいと考えた。彼は兄夫婦に宛てた手紙に書いている。

私は名古屋に来てから、人間に興味を失った。この世を捨てて、谷間に逃げ込み、野人になってしまおう<中略>私はロビンソン・クルーソーのように、無人島で一人暮らしをして、人の世とは付き合わない。私はもうこの世の無常を悟った。全部は形を変えた悪魔だ。<sup>177</sup>

郁達夫が逃亡の願望を抱いた理由はいくつかある。

<sup>176</sup> 郁達夫著、白水紀子訳（2000）「蔦蘿行」『中国現代文学珠玉選小説1』二玄社、34頁。

<sup>177</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「致陳碧岑」『郁達夫全集』第六卷書信、浙江大學出版社、8-9頁。

第一に、郁達夫の革命観は、主流の革命観とは少し違っていた。1926年10月、郁達夫は広州に移り住み、中山大学法学部の教授と出版学主任に就任した。しかし、1ヵ月も経たないうちに、敏感な郁達夫は、革命の事業を成し遂げることはなんと至難のわざなのだろうと思うようになった。そのため、彼は辞職し、広州に戻った。

その後、「廣州事情」に次のように書いている。

そこで、二、三人の友人と南下し、革命発祥の地である広州に行ったのである。そこで古習を改め、熱意と悲しみを全部、革命に身を投じたいと思うが<中略>そこで見たものは、また陰謀と策略、下品で不潔なものばかりだった。妄想だけだ、子供が遊ぶシャボン玉のように、半年もしないうちに、現実の悪風に吹き飛ばされる。<sup>178</sup>

郁達夫の考え方は、彼がいるグループの考え方とは全く異なり、「同志」との距離を置くようになった。彼は広州を出て間もなく、創造社の出版業務などが他のメンバーとの不和で、結局、彼は創造社を去ることになった。

この時の郁達夫は意気消沈し、反動支配階級とかつての戦友たちのおかげで、彼の情熱は完全に消え失せてしまった。1930年3月、上海で左翼作家連盟が結成された。魯迅は、郁達夫を発起人の一人に指名した。しかし、同年11月、左翼作家連盟は投票で、「投機と反動分子」に劃定された郁達夫を除名することを表決した。この追放は、郁達夫に大きな衝撃を与えた。暗い社会、友人の裏切りに対して、郁達夫は魯迅のような戦う勇氣を持たない、彼はただ逃げ出したいだけであった。

第二に、郁達夫は田舎の生活に愛と憧れを持つ。郁達夫は人生の大半を都会で過ごしたが、彼が最も愛したのは静かな美しく自然の景観である。どの都市にかかわらず、描かれた景色に気持ちを込めることができ、叙景と叙情がうまく組み合わせられていることが、古代中国の小説の特徴である。こういう文学の伝統は、郁達夫に深い影響を与えた。郁達夫は『小説論』の中で、小説の背景について語り、自然の風景や天候の描写が小説の最も美しい装飾であると考えた。彼の小説には、景色の描写が多く、静かで、憂鬱な自然は、感傷的であると同時に、その美しさに愛着を感じさせる。

抑圧と憂鬱がみなぎる『沈淪』でも、冒頭の風景描写は色彩豊かで暖かなトーンに満ちている。

紺碧の空は雲ひとつなく、万古不変の白日が、その軌道上をたしかな足どりで移動している。南から吹き寄せる微風が、酔いぎましのシロップのように、かぐわしく頬をなでる。まだ青みの残る稲田の中の、白線状に湾曲した田舎の往来を、彼は縦六寸版の Wordsworth の詩集を読みながら、ゆっくりと歩いていた。人影ひとつないこの広い平野の、いずこからともなく伝わってくる断続した犬の遠吠えが、やわらかく彼の耳を打つ。彼は本から目を離し、夢みるような面持ちで吠え声のする方を見やったが、木の間がくれの、鱗状をした数軒の屋根瓦から、薄絹のようなかげろうの立ち

<sup>178</sup> 郁達夫 (2017) 「<鶏肋集>題辭」『郁達夫文論集』吉林出版集团股份有限公司、349頁。

のぼるのが見えるのみであった。<sup>179</sup>

青い空のした、周りの小草や木が微笑んでいた。この美しさに惹かれて、彼は恋人の膝の上に乗っているような気分になった。

しばらく見とれたあと、彼はふと背後にすみれの息吹きを感じた。さらさらと音をたてた道端の小草が、彼の夢幻境を破った。ふりむくと、その小草はまだ揺れている。すみれの息吹きを帯びたそよ風が、彼の蒼白い顔にあたたかく吹き寄せた。このすがすがしい早秋の世界の中で、この澄みきったエーテルのなかで、彼は全身陶醉したように力の抜けるのを覚えた。それは慈母の懷に眠る心地であった。桃源境に夢みる心地であった。南欧の海岸で、恋人の膝を枕に午睡をむさぼる心地であった。<sup>180</sup>

しかし、この避難所のような場所は、彼の苦悶を解消せず、千の不平がまだ彼の胸に横たわっていた。郁達夫はまた、このように願った。

こここそお前のかくれ家だ。世間の俗物どもはお前を嫉妬し、軽蔑し、愚弄する。この大自然、この万古不変の蒼天白日、この晩夏の微風、この初秋の清気だけが、いつまでもお前の友であり、慈母であり、恋人なのだ。お前はもはや世間に帰って、あの軽薄な男ども女どもと居を共にすることはない。お前はこの大自然の懷の中で、この汚れなき郷間で一生を終えるのだ。<sup>181</sup>

そして、北京に滞在する期間の郁達夫は、「余計者」のアイデンティティを抱き、辛酸をなめ、苦悶する一方で、北京の優雅さと美しい人文環境が彼に栄養を与え、疲れた心身を一時的に回復させることができた。

「故都の秋」と「北平の四季」の中に、郁達夫が描いた北京は、誰でもが憧れるような場所として描かれている。記憶の中のこの都市はもはや、遊郭や劇場だけではなく、他の有意義な文化的な場所でもある。彼は北京の下層階級の暗闇を批判する一方で、自然の美しさや風習を賞賛している。その自然の景色は、彼に世の中の苦悶を暫く忘れさせた。

わたしばかりが渺として身を人ごみの皇城に寄せ、心なごまず、つねに無聊をかこっている。無聊のあまり、城の西北から城南とめぐり、戯園、茶楼、娼家、酒館にあがっては、快樂をむさぼる幾多の同類にたち交ってわれを忘れ、かれらともども酔生夢死を学ぶか、さもなくばひとり平則門外にとびだして、この地の風光を心ゆくまで味わうことにしている。玉泉山の幽静、大覚寺の深邃は、わたしにとってけっして魅力がないわけではないが、ただ一年三百五十九日（旧暦）いつも貧しいわたしには、そんな高尚な情景を我がものにするだけの余分の金はないのだ。<sup>182</sup>

<sup>179</sup> 郁達夫著、駒田信二、植田渥雄訳（1971）「沈淪」『現代中国文学6』河出書房新社、37頁。

<sup>180</sup> 同上

<sup>181</sup> 同上

<sup>182</sup> 郁達夫著、阿部幸夫訳（1971）「ささやかな供えもの（薄奠）」『現代中国文学6』河出書房新社、77-78頁。



この文章の後、郁達夫は、自分が玉泉山と大覚寺周辺の自然の美しさに酔いしれ、感傷的になっている様子を描写した。このような描写は、郁達夫が北京の野趣に魅了されていることを示すが、その一方で主人公の退屈さ、空虚さ、自責の念を表現している。「十一月初三」の中にも平則門の外で起こった、「寸心の荒蕪」というエピソードがある。彼はそこで沙田、荒れ墓、病葉、朝陽に出会った。「微雪の早晨」の中には、直接的に、「黄金みたいな日光」「西山のすがすがしい空気」と書いて、彼が「皇帝であってもこういう快樂はない」と感じた。

郁達夫は、北京の市井や気風とは常に距離を置き、小説では、主人公はよく城外の自然に感動が描かれる。1934年8月、郁達夫は北京で有名な「故都的秋」を書き、その二年後には「北平的四季」を書いた。この二編のエッセーは、北京の自然の風景に対する愛が表現されている。二編のエッセーには、北京の自然美が丁寧に描かれており、そこに込められた感情は、孤独と苦悶であるが、古都への恋しさと讚美が伝わってくる。彼の繊細な筆致は、北京の草木、季節、風景を余すところなく記録しており、読者は文学的な角度から北京を知ることができる。

「故都的秋」では、郁達夫が北京の秋に対する愛は明白だ。「秋、この北国の秋、もしとどめられれば、私の寿命の三分の二を捧げて、三分の一だけを残す。」<sup>183</sup>

郁達夫は詩的な筆致で秋を描いた。

北国のエンジュは秋の気配を感じさせる飾りだ。朝には、落ちた花の蕊が、地面履い尽している。踏みつけると、音もなく、匂いもなく、ただごく小さい、柔らかい触覚…古人が言う「梧桐一葉落ちて天下の秋を知る」思いをはせるとは、こういう深沈たるところにあるのだろう。<sup>184</sup>

灰色の空から涼しい風が吹いてきて、雨が降り出した。ひとしきり雨が降った後、徐々に雲が西に流れていき、再び空が晴れ、太陽が顔を出した。

<sup>185</sup>

北の果樹、秋になると、奇観である。ひとつはナツメの木で、屋角、塀の上、御手水の傍、台所の前などに一株一株と生えてくる。実はオリーブと鳩の卵のような形をしている。小判型の細かい葉の真ん中に、薄い緑黄色を示したとき、秋の全盛期だった。葉が落ち、実は赤く染まり、北西の風が吹いてくる。<sup>186</sup>

朝起きてから、濃いお茶を立て、庭の中に座り、あの高く青い空を眺め、飼っている鳩が青空を飛びまわり、翼に付けられた鳩笛が立てる美しい音

<sup>183</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「故都的秋」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、189-190頁。

<sup>184</sup> 同上

<sup>185</sup> 同上

<sup>186</sup> 同上

が聞こえる。エンジュの木の下に木の葉を通して撒き散らしてきた光を一筋一筋数えたり、崩れ落ちた壁から頭を突き出した朝顔の青い花を静かに見たり、秋の気配を自然に楽しむことができる。<sup>187</sup>

これらの秋の風景には、平和で静か、孤独で悲しいという共通した特徴がある。「故都的秋」のはじめから、「北国の秋は、特に清く、静かで悲哀に満ちている。」秋色の基調として、「清」「静」「悲哀」という言葉で心の秋を表現した。

郁達夫は、北京を長く離れたが、北京で生活の時期に感じた余計者の境遇と情緒は消えておらず、秋の悲哀、社会の悲哀、心の悲哀を一つに融合させ、北京での孤独と苦悶、行間に悲観的な気持ちがにじみ出ている、何をするにも、それをする勇気がないという悲しみを表現した。

その後創作した「小春天气」と「北平的四季」、北京城の風景を描いたもので、ゆったりとした都市生活の中にかすかな哀愁が感じられ、それが情景と融合している。

中国の大都会、私が人生の前半で住んだことがある場所は、数少ない。しかし、一人になって昔を思い起こすと、上海の喧騒、南京の広大さ、広州の無秩序、漢口武昌の乱雑さ、青島の幽寂、福州の秀麗、そして杭州の沈着さえ、北京とは比べものにならない——私が住んでいた頃、北京は典雅で、端麗で、堂々として立派であり、清艶、幽邃である。北部の北平ならば、そこは理想的な都である。<sup>188</sup>

北京の社会環境は、郁達夫に余計者の体験を与えたが、北京の自然の風景は、彼に束の間の安らぎを与えた。世界の混沌から暫し逃れさせてくれたのである。

---

<sup>187</sup> 『北京の秋「この世の楽園」』

<http://japanese.cri.cn/20171027/07ab25b2-b2b7-4af3-94c6-12c0322f20e5.html>（参照日：2022年9月5日）。

<sup>188</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「北平的四季」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、269頁。

#### IV 杭州の倦鳥

杭州は中国の歴史上で重要な都市である。西暦 589 年（隋朝の開皇 9 年）、呉州より杭州が分割設置された。

隋の煬帝はこの地から長江につながる江南河を築いたので、この地は大運河の終点となり、交通・商品流通の拠点となった。またこの地は日本からの遣隋使、遣唐使の上陸地点でもあった。そして江南の社会環境が安定していたため、北から多くの人に移り住み、この地域の経済や文化を繁栄させた。靖康の変で北宋が滅亡した後、南宋を建てた高宗がこの地に逃れ、1138 年から都として、臨安または行在（あんざい、仮の都の意味）と呼んだ。こうして杭州（臨安）は、中国の南半分を支配する南宋の都となり政治都市としても重要なところとなった。この時代にはこの杭州と湖州を中心とした浙江省は、隣接する長江下流の江蘇省（その中心は蘇州）とともに中国で最も穀物生産の豊かな地域となり、「蘇湖（江浙）熟すれば天下足る」と言われた。臨安府は 1276 年に元軍によって占領され、南宋は滅亡する。元代にはこの地はもとの杭州と言われるようになり、都としての地位は失ったが、浙江省の省都として繁栄を続け、豊かな経済力を背景に

大都市として発展を続け、広州、泉州などと並んで外国貿易の拠点ともなった。<sup>189</sup>

明・清時代以降、杭州の地位は低下したが、浙江省の省都であることに変わりはない。1883年、杭州の人口は62万人で、その後も増え続けた。アヘン戦争後、中国の国力は衰退し、人民の生活が困窮し、杭州城や西湖は長年修理されないまま老朽化し、工業や商業も苦戦していた。杭州城は、六朝の古都としての繁栄と活力を失い、大都市としての規模はあっても、現代都市としての栄えるに欠けるところがある。

中国の学者は、中国文学の南北の違いについて次のように述べている。

北の方は肥沃な土地、豊富な地下水をもつ、人々はより現実的であり、文章も写実的である。南の方は洋々たる碧水をもつ、人々はより感性的であり、文章も叙情的である。<sup>190</sup>

フランスの文学者スタール夫人（Anne Louise Germaine de Staël、1766年-1817年）にも似たような見解がある。

南欧の最も美しい言語であるギリシャ語の魅力のすべてをドイツ語が伝えることはできない。＜中略＞ドイツで美しかったのは古代の騎士道精神、その力強さ、その忠誠心、善良さ、それから崇高な感受性につながっていた北方の無骨さである。<sup>191</sup>

中国の他の地域と比べて、江南の美しい湖と山、そして詩的な文化遺産は、この地域の豊かさ、ロマン、美しさを有名にしている。したがって、文人たちからこういう風に見られる。

江南の美しい自然風景は、落ち着かない心や渴き魂を癒し、高ぶった緊張を和らげてくれる。そして、江南の人々の自然と同調する開放的な心、超越的なビジョンは、私たちの心を昇華させ、俗世間や埃っぽい領域を逃れ、万物の霊としての尊厳を取り戻し、人が持つべき独立心、自由心を取り戻させてくれるのです。<sup>192</sup>

杭州は、江南の特徴をもつ都市である。かつて元のフビライの宮廷に仕えた、ヴェネツィア出身の商人マルコ・ポーロも杭州に滞在し、世界最大の都市と賞賛している。

そもそもこのキンサイ市というのは、まちがいもなく世界第一の豪華・富

<sup>189</sup> 「臨安／杭州／キンサイ」『世界史の窓』 <http://www.y-history.net/appendix/wh0303-058.html> (参照日：2022年9月5日)。

<sup>190</sup> 郭紹虞、羅根澤（1959）『中国历代文论选（下）』人民文学出版社年版、573頁。

<sup>191</sup> スタール夫人著、中村加津、大竹仁子訳（2002）『ドイツ論2—文学と芸術』鳥影社・ロゴス企画部、82頁、86頁。

<sup>192</sup> 銭谷融、銭理群、王棟生編（2010）「江南味道」『江南读本』华东师范大学出版社、6頁。

裕な都市だから、全くもって話しいがあるというものである。<sup>193</sup>

中国の伝統文学の中では、杭州は詩的である。西湖、蘇堤、破風橋、雷峰塔、三潭映月、靈隱寺、蘇小小の墓、虎跑、銭塘江など、詩人の心が宿る場所として知られていた。「水光潑潑として晴れてまさに好く、山色空濛として雨もまた奇なり」<sup>194</sup>の西湖と「碧玉の流れる川、両岸は紅霜に染まる」<sup>195</sup>の銭塘江もここにある。これらの詩を読むたびに、人々は一時の安らぎを得ることができる。古くから文人たちが心を癒す空間として利用し、多くの感傷的な詩が残されている。

清朝以降、中国の政治と経済の中心が北京に移るとともに、杭州はメインカルチャーから距離を置き、地域文化もその時から衰えていった。現代の杭州が人々に与える印象は静的な風景画である。杭州の風景と杭州人は詩的な色彩を持っており、喧騒を感じさせず、江南の情調が濃厚である。北京、上海、東京などに比べると、よりリラックスし、閑静である。<sup>196</sup>

郁達夫が暮らした都市の中で、上海や東京をモダンガール、北京をお姫様に例えれば、「上には天国、下には蘇州・杭州がある」の杭州は、箱入り娘ではないだろうか。1911年初め、杭州に到着した郁達夫は詩に詠んでいた。

儿时曾做杭州梦、初到杭州似梦中。笑把金樽邀落日、绿楊城郭正春风。

(儿时かつて杭州の夢を作す、初めて杭州に到るや夢中なるに似たり、笑いて金尊を把りて落日を邀う、緑楊城郭正に春風)<sup>197</sup>

郁達夫は「自然の景色や風景は、人生や芸術に対して大きな影響力と力を持っており、これは真実である。」<sup>198</sup>と考えた。杭州のすべてが郁達夫には新鮮で刺激的だった。「私は田舎から杭州に来て、大観園の香陵と同じように、まだ詩の勉強をしていた。この偽もののような湖と山を見たら、幸せな気持ちになる。」<sup>199</sup>初めて杭州に着いた時の喜びから、郁達夫はこの地を隠遁に都合のよい場所と考えた。その後も病氣療養や危機から逃げ隠れるために何度も杭州を訪ねた。

#### IV-1 詩的な避難所

郁達夫の故郷は浙江省の西部にあり、古代は呉の国に属していた。この地の文化には、明らかに江南の風格がある。隠遁する名士があり、科挙に参加し、俗世に足を踏む文人もある。郁達夫はかつて、16歳の時に自宅で漢籍を学ん

<sup>193</sup> 「臨安／杭州／キンサイ」『世界史の窓』 <http://www.y-history.net/appendix/wh0303-058.html> (参照日：2022年9月5日)。

<sup>194</sup> 蘇軾(1036-1101)の「飲湖上初晴後雨」(1073)の1-2行目。

<sup>195</sup> 郭沫若(1961)「溯銭塘江」『浙江日報』

<sup>196</sup> 陈力君(2006)「现代文学中杭州形象的解读与反思」『中国文学研究第3期』、77頁。

<sup>197</sup> 稲葉昭二(1982)『郁達夫—その青春と詩』東方書店、33頁。

<sup>198</sup> 郁達夫著、吴秀明等編(2007)「山水及自然景物的欣赏」『郁達夫全集』第十一卷文论(下)、浙江大学出版社、227頁。

<sup>199</sup> 郁達夫著、吴秀明等編(2007)「远一程、再远一程—自传之五」『郁達夫全集』第四卷游记・自传、浙江大学出版社、284頁。

だ1年間は「人生で最も実り多く、影響力のある準備期間だった」<sup>200</sup>と語っている。少年時代からの文化的素養は、彼を江南代々の文人たちと同じように、自分の狭い内心世界に拘った。郁達夫は残酷な現実沈淪し、山水に身を隠した江南の隠士を真似したかったが、最終的には剛毅な真の戦士となった。

杭州の山水と伝統的人文は、江南の文化の一部であり、その柔軟な雰囲気は郁達夫を養い、自然から美を感じたと同時に、彼の繊細、敏感の気質も育んだ。郁達夫は自然の美しさに酔いしれながら、自分の運命や国の盛衰に感傷的になる。しかし、郁達夫は自分を戦士ではなく、作家として見ており、政治の嵐が来れば、身を隠して風景にふけることを選び、杭州は彼にとって避難所となった。

杭州は郁達夫の文学を育んだ。1911年に杭州府中学に合格したが、『自傳』によれば学費不足のため、「自述詩」によれば宿舎が無かったため、浙江第二中学堂(嘉興府中)に入学した。自伝の中では、次のように述べている。

当時、杭州の古本屋は豊楽橋の梅花碑のある通りに集まっていた。私は毎週休みの朝に、仰向けになって、一週間のうちに節約できるお金と、最も経済的で役に立つ本を買うことを計算し、幸せを手に入れる予感に包まれたものでした。<sup>201</sup>

これらの本は、郁達夫の文学的素養を高め、文学の深さを感じさせた。

「西湖佳話」の各短編は、二回以上読んでいます<中略>当時はまだその良さを十分に理解できていなかったのですが、読み終わったら、なぜかわからず朧々の後味が、まるで春の日に何十年も前の芳醇な酒を飲んで、酔っているような感じがした。<sup>202</sup>

この年の夏期休暇中、『呉詩集覽』、『庚子拳匪始末記』、『普天忠憤集』を読んで強い影響を受ける。またこのころ『石頭記』、『第六才子書(西廂記)』を手にしたが、『西湖佳話』、『花月痕』の二書が、意識的に中国の小説を読み始めた時期に触れた最初のものであるという。

郁達夫は『紅樓夢』、『西遊記』、『水滸伝』、『西湖佳話』、『西廂記』、『白香詞譜』、『滄浪詩話』、『唐宋詩文醇』、『庚子拳匪始末記』などの小説や詩集を読むことで、文学方面でかなり上達し、投稿を始めたのである。<sup>203</sup>

夏期休暇後、改めて杭州府中に転入。同級生に徐志摩がいた。このころまで

<sup>200</sup> 郁達夫著、吳秀明等編(2007)「大風圈外」『郁達夫全集』第四卷游记・自傳、浙江大學出版社、293頁。

<sup>201</sup> 郁達夫著、吳秀明等編(2007)「孤独者—自傳之六」『郁達夫全集』第四卷游记・自傳、浙江大學出版社、287頁。

<sup>202</sup> 郁達夫著、吳秀明等編(2007)「孤独者—自傳之六」『郁達夫全集』第四卷游记・自傳、浙江大學出版社、287-288頁。

<sup>203</sup> 王觀泉(1985)『席卷在最后的黑暗中：郁達夫傳』天津人民出版社、24頁。

主として漢代の史書を愛読していたが、『滄浪詩話』と『白香詞譜』に触発されて詩詞を作り始め、『全浙公報』、『之江日報』、『神州日報』等の新聞に投稿、採用されるようになる。これによって、自分の創作自認を肯定し、創作の興味を持つようになった。

杭州府中に復学しようと数か月待機していたが、結局9月にアメリカ長老會系のミッション・スクール之江大学予科（原名育英書院）に入学、厳しい教会生活を送った。「毎朝、起きるとすぐに祈り、夕食時にもまた祈り、9時から10時に最も重要な礼拝をし、最後にはまた祈る。」<sup>204</sup>そんな生活に不満と怒りを覚えた、学生運動に参加して、退学処分を受けた。次の春、アメリカ浸礼會が杭州で運営する蕙蘭中学に転学、3か月後、やがて学校の奴隷化教育に不満を持ち、独学を決意して、家に帰って一人暮らしをすることにした。故郷に戻った郁達夫は、9月下旬上海から乗船、神戸に上陸。大阪、京都、名古屋を見物しながら上京、10月から東京で生活を始め、再び杭州に戻るのは1925年である。

郁達夫は、1925年11月、再び杭州に帰国した。この頃の郁達夫は諸般の事情で武昌師範大学から上海に戻ったが、すぐに肺病が再発し、上海を離れて杭州で療養することになった。1927年、郁達夫はまた2回杭州に来た。6月に治療のため、また7月に佐藤春夫の西湖旅行に同行した。

その時の様子は佐藤春夫の「秦淮画舫納涼記」に見られる。「今夜でもう4日いて、明日はいよいよ九江から揚州の方を経て上海へ帰ろうというその前夜を、秦淮の画舫へ案内してやろうというのであった。」<sup>205</sup>佐藤は帰国前に村松へ宛てた手紙の中で郁達夫のことは「郁は君も知ってゐるね。僕は彼に非常に世話になつてゐる。僕は支那人の内では彼が一番好きだよ。最も日本語の達者なせみもあるだらうが」<sup>206</sup>と書いている。

1930年7月初旬、避暑のために杭州に行き、幾つかの小説を書いて、ルソ一の『孤独な散歩者の夢想』を翻訳した。1931年3月、左翼の青年5人が逮捕された後、郁達夫は上海を離れて杭州に避難し、1932年10月、郁達夫はまた肺病が再発し、1か月ほど杭州で療養した。この時期、郁達夫は機嫌がよく、毎日3~4千字の文章を書くことが出来た。1933年4月、郁達夫は家族を杭州に移し、西湖の畔りに「風雨茅廬」を建てた。

杭州は、郁達夫にとって思い出の地であり、憧れの都市であった。他の都市は彼に緊張や不安を与えたが、杭州と向き合うことで安心感を得た。郁達夫の作品には、杭州について書かれたものが多く、詩やエッセイ、小説に、「清冷的午后」、「楊梅燒酎」、「十三夜」、「蜃楼」、「她是一个弱女子」、「遅咲きの木犀」、「瓢儿和尚」、「迟暮」、「唯名论者」、「出奔」などがある。

杭州に関連する作品は、彼の作品の中で大きな割合を占めている。

郁達夫は杭州を離れた後も、心の中ではいつも名残を惜しんでいる。「十三夜」の中には、杭州の風景を詳細に描写している。主人公は惠中のホテルに住んでいて、窓を開けると、空は水彩のように雲翳と遠山が見える。画家の友人

<sup>204</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「孤独者—自傳之六」『郁達夫全集』第四卷游記・自傳、浙江大學出版社、290頁。

<sup>205</sup> 佐藤春夫（1937）「秦淮画舫納涼記」『からもの因縁』勁草書房、86-87頁。

<sup>206</sup> 佐藤春夫（1941）『風雲』宝文社、152頁。

と一緒に三潭映月へ遠足に行った際に彼が描いた「遠山や都市の微形」の美しさ、これが江南の水郷との風雅な出会いとなった。杭州は郁達夫の憧れの地であり、彼は杭州に対する感情を隠し切ることはできない。

ああ、大切に、大切に、杭州の街！もし私が波に溺れても、私の心の最後に映るのは、おそらく子供の頃に愛したのこの美しい湖と山でしょう。<sup>207</sup>

彼は「里西湖的一角落」の中にこう書いた、「この世には西湖より美しく、静かで、素敵なお場所は無いと思う<中略>秋はいい、秋の西湖が一番いい…」<sup>208</sup>。小説「蜃楼」の中には、西湖に対する描写は、古画のような雰囲気、静かで物寂しい風情があり、上品である。

山の下は林はまだ全ての葉を落としておらず、薄い江南の冬が書かれている。湖の中央を横切る長堤も、その前の低い木々も、その中の橋も、すべて月の下に隠れるように、波の上に波紋を描いて、ぼんやりとかすんで見える。<sup>209</sup>

郁達夫は杭州の山水を深く愛していたから、杭州は詩的であると意識し、平凡な一面を無視した。長年の放浪の末、大都会の暗闇には愛想を尽かした。「羈鳥恋旧林、池魚思故淵。（羈鳥は旧林を恋い、池魚は故淵を思う）」の情になり、彼はこう書いた。

失業してから、ネズミや虫みたいに上海という自由な監獄で蟄居していて、もう半年くらい。自然がこんなにみずみずしく育つとは思わなかった<中略>ああ、自然、あゝ、大地、あゝ、生きとし生きる物、私が間違っていた、あなたたちのそばから離れて、あの汚れた人の海の中で、えさを探しに行くべきではなかったんだ。<sup>210</sup>

彼は、贅沢退廃な上海を離れ、詩的な理想郷である杭州に戻ることを決意した。小説「迟暮」の中で、林旭を杭州に移住させ、こう書いた。

長年の放浪に疲れ<中略>大都市で貧しい文人として、生きる気力さえも感じていない、なんの意味もない。林旭は、ある春の朝、雨が降って、薄ら寒く物寂しい日に、妻子を連れて、静かな杭州に残る一生を過ごす。<sup>211</sup>

1933年、家族とともに上海から杭州に移り住んだ郁達夫の生活は、また他の都市とはまったく違っていた。彼は「しばらくの間、美しい山水と愛情にお

<sup>207</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「还乡记」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、32頁。

<sup>208</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「里西湖的一角落」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、291頁。

<sup>209</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「蜃楼」『郁達夫全集』第二卷小説（下）、浙江大学出版社、225頁。

<sup>210</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「还乡记」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大学出版社、17頁。

<sup>211</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「迟暮」『郁達夫全集』第二卷小説（下）、浙江大学出版社、432頁。



ぼれて、仙人のような生活を送った。」<sup>212</sup>郁達夫の日記には、次のように書いている。

朝起きて、憂鬱で退屈だったので、呉山の城隍閣まで歩いて行って、遠くの景色を眺めた。午後、酒を飲んで、微醺、布団の中で Balzac の小説を読んでいたら、そのまま眠った。<sup>213</sup>

それ以外に、郁達夫は来客と食事やトランプをすることも多く、夜中まで遊んでいる。しかし彼はこういう怠惰、安逸な生活に不満だった、「ここ数日、書くべきものは、何も終わっていないので、明日から、もう少し緊張感をもって生活をしよう。」と反省したが、郁達夫はまだ杭州の山水に浸ることをやめなかった。杭州のあまり知られていない場所、例えば玉皇山、皋亭山、西溪、花塢などについて、繊細な描写がある。「超山的梅花」の中には梅が雪の海のような、美しく、「羅浮の仙境」を思い浮かべる。「花塢」の竹、清流が人を惹きつける。「皋亭山」枝が半分だけ残る梅の古木は、梅林より風情を持つ。これらの場所は大抵、彼にとっては不幸からの「逃避の場」である。

「城里的呉山」の中には「杭州に引っ越してから、城隍山の隅で、まるで私の野外の愛人になったように、私は抑鬱の時、仕事の疲れた時を過ごす中略>半日くらい山に行き、一盃茶酒 2 杯を飲む、2 時間休むと、風呂に入ったように、元気が戻る。」<sup>214</sup>「寂寞的春朝」の中でも、城隍山が彼にとって、絶大な威力があり、内心が不快になる時、唯一の逃げ場であると書いた。玉皇山も似たような効果がある、旅から帰ってきたら、「そうすれば、世俗的な悩みは一挙に洗い流される。」<sup>215</sup>

郁達夫は、これらの美しい山水の描写は、景色に対する賛美だけではなく、地理、歴史、文化各方面からの記述もある。例えば「超山的梅花」の中に、「超山は、塘栖鎮の南側に位置する、旧日仁和県（現在は杭州県）の北東 60 マイルの永和郷にある」<sup>216</sup>と書いている。超山への道とは「汽車の道が開通した、清泰門から東にまっすぐ走って、橋司駅から北西に、臨平鎮を経て、臨平山から北に、それから十数キロ走れば着く。」<sup>217</sup>このような地理的位置の詳細な描写は、「花塢」、「寂寞的春朝」、「西溪的晴雨」、「玉皇山」、「龍門山路」などにもある。更に、歴史学や文学誌、地方誌から、その歴史起源や文化的な意義等を調べた。「超山的梅花」を書いた時、『臨安志』、『塘栖志略』、『塘栖考』中の知識を用いて、「玉皇山」を書く際に『玉皇山志』と『游覧志』を参考した。

<sup>212</sup> 陈兰村、叶志良（1998）『20 世纪中国传记文学论』天津人民出版社、53 頁。

<sup>213</sup> 郁達夫著、吴秀明等編（2007）「一月日記」『郁達夫全集』第五卷日記、浙江大学出版社、344 頁。

<sup>214</sup> 郁達夫著、吴秀明等編（2007）「城里的呉山」『郁達夫全集』第四卷游记・自传、浙江大学出版社、177 頁。

<sup>215</sup> 郁達夫著、卞雪林等編（1983）「玉皇山」『郁達夫文集』第四卷散文、花城出版社、70 頁。

<sup>216</sup> 郁達夫著、吴秀明等編（2007）「超山的梅花」『郁達夫全集』第四卷游记・自传、浙江大学出版社、156 頁。

<sup>217</sup> 郁達夫著、吴秀明等編（2007）「超山的梅花」『郁達夫全集』第四卷游记・自传、浙江大学出版社、157 頁。

唐の時代、この山は玉柱峰と呼ばれ、玉龍道院が建っている。宋の時代には玉龍山、または単に龍山と呼ばれた。明の時代、无為宗師が福星観と名付け、この山は玉皇山になった。<sup>218</sup>

「杭州的八月」では、郁達夫が杭州の「八月十八日の錢塘江の大潮」について書いている。彼は『論衡』の中から、錢塘江秋の大潮の起源を探り、古くから錢塘江の大潮の現象を追跡し、そして杭州の人々にとって、錢塘江の大潮の価値と意義を指摘した。これらの要素が加わることで、郁達夫の紀行文は歴史的、地理的な奥行をもった。

#### IV-2 杭州の郁達夫の小説創作への影響

各都市のイメージは、自然の風景、都市の建築物、文化習慣を含んでいる。「都市は物理的な構造物である以上に、心境や道徳的な秩序、儀式化された行為、人と人とのつながりのネットワーク、習慣や伝統の集合である。」<sup>219</sup>

杭州に対する、郁達夫の態度は矛盾している。一方では、杭州の自然の美しさに好感を持ち、美景を書く時に、内心では感謝、興奮、嘆美している。他方では杭州の人たちは、理性的な思考をしており、文章の中でそれについて批判している。「江南の風景は、すべて美しい、江南の人々は、すべて哀れだ。」

<sup>220</sup>「还乡记」の中にも、「ここは私の故郷だが、浙江省のインテリは腐敗しており、教育家や政治家、軍人に尻尾を振って、媚び諂う。そしてその一方で庶民を弾圧して、飽くなき欲望を満たそうとする。それを考えると吐き気がする。」<sup>221</sup>他に、彼は「杭州」を書く時は、「杭」の字の起源を考察した、現代の杭州人の性格が形成される過程を歴史的に分析した。

呉と越の人々は、昔から好戦的で、堅忍不拔、刻苦し、勘繰り、巧知である。美人計の後、好戦的、堅忍不拔、刻苦する等がなくなった。その代わりに、疑心暗鬼や謀略の方が徐々に発達してきた。<sup>222</sup>

それ以来、楚、秦、漢、三国、隋、唐、南宋などいくつかの王朝を経て、現在の杭州人の性格が形成されてきた。

意志が弱く、議論好きで、見掛け倒し、見えを張る。小事にずる賢く、大事にはぼけている。自分の上品さを自慢し、孤高をもって自任する。実

<sup>218</sup> 郁達夫著、邝雪林等編（1983）「玉皇山」『郁達夫文集』第四卷散文、花城出版社、70-71頁。

<sup>219</sup> 張英進著、秦立彦訳（2007）『中国現代文学と電影中の城市：空間、時間と性別構形』江苏人民出版社、5頁。

<sup>220</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「感傷的旅行」『郁達夫全集』第四卷游记・自傳、浙江大學出版社、7頁。

<sup>221</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「还乡记」『郁達夫全集』第三卷散文、浙江大學出版社、15頁。

<sup>222</sup> 郁達夫著、邝雪林等編（1983）「杭州」『郁達夫文集』第三卷散文、花城出版社、271-272頁。

際は享楽をむさぼる、立ち直れない等。<sup>223</sup>

郁達夫は、こういう性格の弱さは、杭州の教育の失敗と見ている。杭州の教育は見直さなければならぬと考えていた。

郁達夫はこのような矛盾する感情を持つが、杭州に対して完全には失望していない。彼には、長年かけて築き上げた帰属意識と一体感がある。自分はこの都市の一つの細胞として、この都市を受け入れる。したがって、杭州は他の都市とかなり異なっている。東京、上海、北京を舞台にした小説では、感情を抑制することなく流れさせ、都市に対する強い孤独感と漂泊感を表現している。主人公は都市の余計者、赤の他人、都市での生存体験は荒れはてや衰れなものである。他方、杭州は故郷の温かさがあり、安心感がある。

郁達夫の杭州を舞台とした小説では、出来事を、淡々と語っている。小説の中の主人公は、もはや感傷や苦痛、憂鬱に満ちた余計者ではなく、人生観は自由闊達である。「碧浪湖的秋夜」中の历鄂、「瓢儿和尚」中の瓢儿和尚、「迟暮」中の林旭がそうである。これらの人物像は、性格的においても、生活スタイルにも、杭州の文化の一部である。

杭州に関連した小説を書く時に、郁達夫は意識的に想像した杭州という空間を構築している。この空間は、これまでの文人による詩的な描写から逸脱しているわけではないが、それでも杭州の多面的文化を深く表現し、解釈しているのである。

#### IV-2-1 杭州の名勝による文脈構成

老舎はかつてこう言った。

ロマンティックな作品の中に、風景を書くことは、美しさの重みを増すことができる。風景は言葉の美しさを最もうまく表現できる<中略>一つの風景には、一つの特別な美しさがある、独特である。<sup>224</sup>

郁達夫が書いた杭州は、江南の風情を漂わせ、淡く清らかな描写は、読者を静かで優しい雰囲気へ導いてくれる。しかし、郁達夫は杭州の風景を描くだけで満足するわけではない、名勝をつなぎ合わせて、文脈を構成し物語を作っている。

「清冷的午后」の中、郁達夫は主人公がいくつかの名勝の間を、歩き回ることによって小説を構成している。主人公は本来清河坊に用事があって最初西湖から出発して、雪の日に歩いたら、愛人の小天王と拱宸橋での甘い恋を回想し、愛人に会いに行く決めて。その後、小天王が他の男との密通の現場を見て、心が苦しくなった。帰り道、銭王寺の湖畔にたどり着くと、悲しさや悔しさの余り湖に飛び込む。人物の活動は場所と密接を関係にあり、喜びや悲しみはすべて西湖の辺りとなっている。西湖の風景は人物の感情と呼応し、互いに響き合う空間を形成している。

<sup>223</sup> 郁達夫著、卞雪林等編（1983）「杭州」『郁達夫文集』第三卷散文、花城出版社、272頁。

<sup>224</sup> 老舎著、胡挈青編（1980）「景物的描写」『老舎論創作』上海文艺出版社、78頁。

「遅咲きの木屋」の構成も似ている。小説の郁君は杭州城駅に着くと、人力車に乗って、旗下の陳列所で降り、湖六段のバスに乗り換え、四眼井を下り、満覺隴水樂洞の茶店で茶を一杯飲んだ後、煙霞洞の石段を踏んで、一步一步山へ登った。翁則生の家を見つける。それから、郁君と翁蓮一緒に五雲山に行った。杭州の山水について、次のように描いている。

この五雲山は、実に高い。寺の楼閣に立って窓を開けて東北を見ると、湖上の群山ことごとく青い土饅頭のようなものである。元来西湖の山水のよさは、芝居の舞台装置よりはたしかに雄大であるが、各地の名山大川に比べては、盆栽のように小じんまり整っている点にあるのである。しかし五雲山の風格はまた全然べつである。山は高く場所が辺鄙なため、普通の足の弱い遊覧者はあまりいかない。これだけでも、五雲山は名山の資格があるのに、まして前面はるかに蜿蜒と青山緑野の間に曲折しているのは、歴史に名高い銭塘江ではないか。それゆえ、もし西湖の山水を一頭の鉄の檻に閉じ込められた白熊に比べるとすれば、この五雲山の峰と銭塘江の水こそは、まさに深山の野鹿である。檻の中の白熊は、ただ臆病な無力者の冒険心を満足させるにすぎないが、深山の野鹿は高原の獅子や虎のごとき雄壮さはなくとも、自由奔放の情はむしろ彼のうちに見ることができるのである。<sup>225</sup>

この段落は、風景の特徴を借りて、二人の関係を描き、二人が歩いてきた山水は、二人の感情が変化する空間となっている。かつて郁達夫は、小説にとって自然景観の描写の意義について、こう書いた、

小説の背景の中で、読者に最も実感を与え、小説を美化しやすいのは、自然の風景や気候の描写である。私たち人間の感情には、晴れの日の晴れの特徴があり、雨の日にも雨の気候がある<中略>自然の風景は春夏秋冬で異なるし、午前や午後、夕暮れや深夜、主人公の気質も、それなりに変化がある。<sup>226</sup>

杭州を舞台にした郁達夫の小説の中で、人と自然が最も織り込まれているのは「蜃楼」である。病氣療養のため上海から杭州に来た主人公は、汽車を降りた後、行き先が決まらず、人力車を頼んで、まず西湖に行った。人力車は杭州の繁華街を走り、荐橋大街、浣紗路を通り、最後に西湖飯店に到着、郁達夫は主人公の眼から、途中の風景を観察した。彼は夜の西湖の明るい月、孤独な燈、荒々しい影と静寂を描き、環境から主人公の心理状態を表現してた。翌日は、岳王廟から、保叔塔、葛嶺、白雲庵、月下老人祠、三潭映月、西泠橋、蘇小小墓、西泠印社、石洞、宝塔…暗くなってからホテルに戻った。主人公の西湖巡りは、感情的描写は少ない、客観的である。例えば、松木場周辺の風景について、

松木場は、古杭州の銭塘門外にいる<中略>苕溪の水を引き、総堀があ

<sup>225</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「遅咲きの木屋」『現代中国文学6』、117-118頁。

<sup>226</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「小説論」『郁達夫全集』第十卷文論（上）、浙江大学出版社、163頁。

り、船で西溪に行くことができ、中略、南方面は主峰であり保叔塔山一宝石山一西には葛嶺、栖霞嶺、仙姑、靈隱諸山が、龍のように、峰は西に向かい、直接北峰と繋いで、西湖の北方面に障壁を立てた。<sup>227</sup>

杭州の山水はこの小説の空間的プロットである、人物がその中で自由に活動し、物我両忘の境地となる。

#### IV-2-2 杭州は小説の舞台となる

「清冷的午后」、「楊梅燒酎」、「十三夜」、「蜃楼」、「遅咲きの木犀」、「碧浪湖的秋夜」、「瓢儿和尚」と「她是一个弱女子」は全部、杭州を背景としての小説である。

「清冷的午后」とは西湖のある店主が、愛人に裏切られ、湖に落ちて命を落とした。「楊梅燒酎」では、杭州で病氣療養中の「私」と、友人との出会い、友人は自分が才能を持ちながら不遇であるために大いに憤っている、発狂しそうな心の痛みを描いた。「十三夜」では、スケッチをするために杭州に来た陳君は、西湖の尼僧に恋慕した。やがて精神分裂病になり、死後は西湖に埋葬された。「蜃楼」では、一人の青年が病氣療養のため、杭州に来てから、出会った女性たちとの恋話であり、蜃気楼のように、「縹緲として孤鴻の影」がある。

「遅咲きの木犀」の翁蓮は杭州の美しい風景の中で生まれ育ち、無邪気であり純粹である。「碧浪湖的秋夜」の主人公歴鄂は、杭州の手詰まりの文人であり、新しい愛情を育み、幸せになる。「瓢儿和尚」の和尚はかつて威風堂々としていたが、最終的には杭州で隠遁生活を選択した。これらの小説では、杭州は人物の活動の背景であるが、実質的な意味はなく、人物の性格や行動の動機に影響を与えていない。「她是一个弱女子」では、杭州人と杭州の風習が人物に与えた影響を書いている。馮世芬はその封建的觀念の束縛を打ち破りたい。叔父の啓蒙と励ましにより、叔父と恋をした、大胆にも、「封建制度が最も深く、最も狭量だった杭州」<sup>228</sup>から逃れた。

「遅咲きの木犀」の中には、こういう風景描写がある。

山の下は緑色のガラスのような青竹で、西に傾いた太陽がこの藪を照らし、一種清新な、そして静寂な淡緑色の光が、清水のようにこのあたりの空気の中にじんんで流動している。<sup>229</sup>

この段落は、「緑」を軸とし、繊細で柔らかな描写は、人物の活動の背景を美しく爽やかに表現している。

そして、江南はお茶の栽培に適しており、お茶を飲むことは江南文化の一部である。杭州城の中やその周辺の山には、茶屋が多く、郁達夫の小説の人物もこれらの茶屋で活動している。「瓢儿和尚」の中には、「私」と和尚、お茶を点てながら、世間話をする。「十三夜」の中では、「私」と陳君と西泠印社

<sup>227</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「蜃楼」『郁達夫全集』第二卷小説（下）、浙江大学出版社、241頁。

<sup>228</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「她是一个弱女子」『郁達夫全集』第二卷小説（下）、浙江大学出版社、300頁。

<sup>229</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「遅咲きの木犀」『現代中国文学6』河出書房新社、118頁。

で「お茶を一杯だけ」で、もう会ったことにした。「遅咲きの木犀」の中の「蓮」は、お茶の中に木犀を入れて、「私」は「茶碗をとって、私に差し出した。私は受けて一口飲んだところ、その茶のなかからも一種人を酔わすような木犀の香りがした。茶碗の蓋をあけ、顔を伏せて茶碗の中を見ると、果たして緑色の茶の中に金色の花弁が浮いている。」<sup>230</sup>「私」はのんびりお茶を飲む、杭州人のように自由自在である。

江南の水郷で、船は主な交通手段だ。若い頃の郁達夫は、船に乗って富陽を離れた。故に、彼の小説の中では、船について何度も書いた。

「逃走」の中に、銭塘江の船について、こう書いている。

昔、帆船が行き来していたころ、F市は船を泊め、休憩する場所だった。しかし、汽船が走るようになった今は、F市の商売が日増しに衰える。<sup>231</sup>

「茫茫夜」の質夫は船から景色を眺めて、長江は「煙や夢みたいな悲しい色」であり、「陸から離れ、いつもより落ち着く」のである。<sup>232</sup>

郁達夫は、移動のために利用する船だけでなく、遊びのための船についても書いている。「十三夜」では、「私」が船頭に誘われて、ハスの実を採るために、船に乗った。「蜃楼」では、船で三潭印月を遊覧する。

#### IV-2-3 水のように弱々しく柔らかい人物像

郁達夫は江南の文化の中で育ち、彼の創作は江南の文化と必然的に結びついている。ある研究者によると、「江南の作家は、家族のこまごまと繁雑であることに中心をおいて、主人公は才子佳人であり、人情の巧み、世俗の巧み、家族の美を描く。」<sup>233</sup>郁達夫の小説も、生活の些細な、平凡な出来事を記録している。このような創作の方式は、物質を享受する江南の文化に通じるのである。そのため、郁達夫の小説のプロットは複雑ではなく、ほとんどが些細な事から人物の内心世界と外界に対する感情を表現している。

郁達夫の初期の小説の人物は、ほぼ無力で、病的である。この審美傾向は、人物の外見だけでなく、脆い精神力にも表れている。これらの人物は、ほとんど孤独で、弱々しいインテリである。彼らの性格は水のように柔らかい特徴があり、早熟である。「早熟な彼の気質が、彼を世人と隔絶した境地に追いやってしまったのである。世人との間の壁はいやましに高くなる一方であった。」<sup>234</sup>このような人物は、後期の小説では減っているが、「春風沈酔の夜」や「她是一个弱女子」では、顔色が蒼白のインテリの青年を描いた。

郁達夫の小説の中の女性は、性的な描写がほどこされることが多いが、後期の小説は徐々に少なくなった、例えば、「春風沈酔の夜」の中で、親切な陳二妹に対して、「私は、彼女のこんな単純な態度を見て、心にふと一種不可思議な感情がわきおこった。私は両腕をのばして彼女をだきすくめたくになった。し

<sup>230</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「遅咲きの木犀」『現代中国文学6』河出書房新社、109頁。

<sup>231</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「逃走」『郁達夫全集』第二卷小説（下）、浙江大学出版社、167頁。

<sup>232</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「茫茫夜」『郁達夫全集』第一卷小説（上）、浙江大学出版社、144頁。

<sup>233</sup> 盛志梅（2003）「试论清代弹词的江南文化特色」、『江淮论坛』第1期、112頁。

<sup>234</sup> 郁達夫著、駒田信二・植田渥雄訳（1971）「沈淪」『現代中国文学6』河出書房新社、37頁。

かし、私の理性が私に命令した。」<sup>235</sup>という一節があり、主人公の思いは抑えられたが、本能的な衝動は残ったままだった。

杭州を舞台にした小説にも、「霊」と「肉」の間にもがく、なかなか「霊肉一致」には至らない。それは彼らの弱々しい内心と大きな関係があると推測できる。「遅咲きの木犀」の中で、「私」は次のように見ている。

彼女の身体は完全に発育し、着ているものは、田舎で縫ったあまり体裁のよくない絹の袷であるが、私の前を一步一步あるいて行くと、そのむっちり突出した臀部、しまった腰、円く傾斜した脛の曲線が、妙な考えを起こさせるばかりか、彼女の両の柔らかな肩や腕など、見ていると私を食欲に誘うのである<中略>私は手をのぼして彼女のそのぼってりした手を握ったまま、黙ってしばらく彼女をみつめていたが、彼女の眼には、すこしもはじらい興奮した跡が見えない。<sup>236</sup>

郁君は一瞬だけでも、率直自然の蓮に邪念が生まれた。郁君は後悔し、彼女に告白した。最後には、活発で無邪気な蓮と純潔の兄妹となる。

「楊梅焼酎」は杭州を舞台にした小説の中では特別である。全文は二人が酒を飲みながら、ささやかな願いや理想を語り合う。お酒のせいもあって、二人とも自分の想像に耽っている。最後に会計する際、二人とも酔っぱらっていて、勘定のこと喧嘩になる。酔いがさめると、お巡りに拘束されていると気付いた。警察署を出るとき、「私」は「多分これが人生でしょう」と感嘆して、アルコールでは現実から逃れられないし、一旦酔うと、より厳しい現実には遭う可能性が高い。ケンカは暴力行為だが、この二人のケンカは普通の争いではない。このような戦いには、いじめや暴力的な圧迫はなく、あるのは、社会の低層にいる弱者の自虐的なぶつかり合いである。この力の争いは、人物の弱さを示している。

この小説では、体がたくましい塾の講師の外見を詳しく描いた。

彼の風貌は七、八年前と少しも変わっていないばかりか、東京の大学予科に入学した当時と比べても、寸分違わぬようだった。口の下まで生やした頬髯もやはり十数年前と同じで、三日前に剃ったばかりのように、ちょうど一、二分の長さにそろい、遠くから見ると、彼のあごは逆さに掛かった黒漆の木魚に似ていた。不思議なことに、私と彼とは四、五年の間ともに学び、帰国してから七、八年会っていないというのに、彼のこの頬髯は、いつ見てもそれ以上に短いことも長いこともなかった。まるで彼の母親が彼をこの地に産み落としたそのときから、この髯はあんなふうを生えており、彼が死ぬまでもずっと、変わらぬかのようにであった。ひとしきり泣いた後のような腫れた眼も、相変わらず学生当時のままで、ただぼんやりと鼻先を見ており、かすかに不可解な笑みを含んでいる。額は依然として広く、頬骨も依然として高く、頬骨の下の頬も依然として深く落ちくぼみ、そこにお猪口がすっぽり入るほどだった。彼の年齢も、学生時代とまるで変わらぬかのように、二十五歳から五十二

<sup>235</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「春風沈酔の夜」『現代中国文学6』河出書房新社、71頁。

<sup>236</sup> 郁達夫著、岡崎俊夫訳（1971）「遅咲きの木犀」『現代中国文学6』河出書房新社、114頁。

歳までの間の、どの年齢だと言われてもそのように見えるのだった。<sup>237</sup>

このような外見では、この人物と先生を結びつけるのは難しい。コントラストが印象的である、人物の外見と内面の矛盾を表現した。

郁達夫はよく自分の感情を小説の主人公に置き換え、主人公らの運命は彼の世界観を表現した。彼の文書の中には多くの教師がいる。「秋柳」なかの闊達な陸校長は、最後には学校を離れる。「茫茫夜」中の質夫は、よい授業をするが、態度や言葉は虚偽である。「蔦蘿行」中の「私」は、人を教えることは、プロレタリアート中の一番苦しい職業だが、教師として生きている。「楊梅燒酎」中の教師は、ボロボロの服を着て、授業に没頭し、友達が来てもわからずにいる。しかし、彼の願望はガラスの加工工場を建て、1万円の利益で家を建て、みんながそこに住むことだ。このような考えは杜甫の『茅屋為秋風所破歌』（『茅屋、秋風の破る所と為る歌』）安得広廈千万間、大庇天下寒士俱歡顔（安くんぞ得ん、広廈千万間、大いに天下の寒士を庇ひて、俱に歡顔せん。）と同じ追求があるが、結局、それは酔っているときにだけ語れる夢であり、現実には不可能であることが分かっている。これらの人物は、外見がどうであれ、心の中でどんなに壮大な志や願望を持ち、どんな体験があっても、結局はその弱々しい、軟弱な性格で、暗い現実には負けてしまう。

#### IV-3 隠遁の夢が打ち砕かれた

郭沫若はかつて郁達夫の生涯について、「志を得ないほど、退廃的なふりをしようとしている。やがて志気や野心が衰え、厄介なことに遭うと、逃げるようになる。」と評価した。<sup>238</sup>郭沫若から見ると、郁達夫は志を得ないまま過ごした一生である。彼は彼の小説の中の「于質夫」と一緒、内心が苦悶であり、個体の自由や命の尊厳を見出すことができず、周囲の暗闇の中で、仕方なくもがいている。彼が杭州で「風雨茅廬」を建てたのは、沈淪の運命から逃げたい、悠々自適の隠遁生活を送るためである。江南界限では仏教と道教が信仰されており、「隠」は仏教と道教の思想の中では、重要な一部分である。浙江の山水は、仙人が隠棲する空間を提供した。江南に隠遁した巖子陵について、郁達夫は「巖子陵が仕官をことわり<中略>財力や地位もその心を動かすことはできないとは、この富春江の山水と関係があるのだろう。」と評価した。<sup>239</sup>消極的な郁達夫は、暗闇に沈淪したくない、山に帰って心の安らぎを得ることを期待していた。

1933年、郁達夫は「瓢儿和尚」を創作した、この小説は彼の隠遁思想、自由に生きたいという希望を表現した。瓢儿和尚はもともとは軍人だったが、世間から離れ和尚として生活した。毎日水を汲んでお茶をたてる、山の中に自由自在で過ごしている。瓢儿和尚はかつての婚約者のことを従容と話せる、寺が取り壊されて山から追放される窮状でも、平然としている。しかし、このような隠遁を郁達夫は求めていない。瓢儿和尚は自ら隠遁することを選んだわけで

<sup>237</sup> 横山悠太の自由帳「郁達夫 楊梅燒酎」『note』 <https://note.com/yokoyamayuta/n/nfa998e5e4605> (参照日：2022年9月5日)。

<sup>238</sup> 郭沫若著、陳子善、王自立編（1985）「历史人物·論郁達夫」『郁達夫研究資料（上）』花城出版社、88頁。

<sup>239</sup> 郁達夫著、吳秀明等編（2007）「烟影」『郁達夫全集』第一卷小説（上）、浙江大學出版社、405頁。



はない、彼は外部の力によって、仕方なく隠遁した。こういう隠遁生活の表面は安らぎ、実際は不自由な心である。

郁達夫自身は杭州で隠遁生活を送っていたが、彼の心はまだ祖国のことを心配している、世の中の騒動はまだ彼を悩ませていた。彼は如何せん現実から逃げられないと気付いた。故に、小説の中の瓢儿和尚は、顎に残された傷跡が本来、栄光の証のはずなのに、「彼の笑顔は「瓢儿を売る」<sup>240</sup>みたい」とからかわれた。郁達夫は和尚の無力さをはっきり認識している。世間から距離を置くことの難しさを冷静に感じていた。郁達夫は抵抗することもできず、隠れることもできず、ただ退廃的に山水や酒に身を沈め、政治の傷と不満を癒す。

1938年、杭州で隠遁する夢が打ち砕かれたので、郁達夫はシンガポールに向けて出発した。

## 結語

郁達夫は生涯に多くの都市を転々としたが、その変遷の過程で、彼の繊細な感性が刺激される一方で、各都市への自身の同化意欲が阻害され、時として深い孤独感を抱くこともあった。日本の名古屋と東京、中国の上海と北京、杭州が、郁達夫の文化・文学を啓蒙し、創作モチーフや創作スタイルに大きな影響を与えた。これらの都市の歴史と文化とその人間中心的息吹は、彼の作品に反

---

<sup>240</sup> 方言：子供が泣きそうな時の顔

映され、彼の人生にとっても大きな財産となった。

郁達夫は中国の田舎から日本の都市に踏みだし、田舎とは全く違う都会の文化を体験した。日本の都市体験は、郁達夫に他国での生活の苦しさや無力感を与え、彼に強い孤立感と危機感を抱かせた。金銭にまみれた物質的な都市空間で、郁達夫は様々な欲望にかられると同時に言い知れぬ恐怖を感じた。そしてさらに性の苦悶と生の苦悶について思考し始めた。東京と名古屋に滞在中の郁達夫は、服部担風など日本の先人たちから指導を受け、西洋や日本の文学的な教養が彼を啓発した。郁達夫は伝統と現代の対立と不安の中で、アイデンティティが目覚め、創作への強い欲求を持つようになった。自由で、民主的で、開放的な日本の大正文化の雰囲気の中で、郁達夫は日本での生活体験を素材とし、ありのままの心境や感情、欲望を吐露していく小説「沈淪」を書いた。

1921年卒業後、郁達夫は上海に戻った。この頃の上海は、近代都市としての特質と中国官僚の腐敗と後進性を併せ持っている。上海に対して、郁達夫は矛盾した複雑な感情を抱いた。上海は彼に作家としての自信と支援を与え、人がうらやむような男女愛を味わったが、同時に生活の重圧と孤立感を与えた。郁達夫は都市における様々な思想の衝突と変化の中に身を置くという、特別な歴史体験をしている。そして、「春風沈酔の夜」その他の作品を生み出した。これらの作品が描いたインテリは皆、理想と志を持ちながら、現実に適応することができず、「余計者」としての自分を認めざるを得なかった。しかし、彼らは現実と折り合いをつけようとせず、ジレンマを抱えたままである。その理由は、自己のアイデンティティがゆらいでいるからである。

かつて郁達夫は、妻子とともに北京に住んだ。古都である北京は上海と異なり、より伝統的であり、深い歴史と文化を持っている。1910年代の中国新文化運動は北京で起こり、北京に新しい潮流をもたらした。官僚主義を特徴づける権力意識が批判され、自立心と自由な精神を持った新しいインテリが育ってきた。彼らは伝統的な文化的背景を持ちながら、外国から来た新しい文化の衝撃を受け入れた。北京は、伝統的な文化環境、自由で開放的な学術の雰囲気、民主主義、科学主義が混合し、他方で、インテリたちに安定的で裕福な生活環境を提供した。北京に滞在した期間の郁達夫は、「余計者」のアイデンティティを甘受し、辛酸をなめ、苦悶した。彼は「青烟」などの小説を書いた。小説の主人公は貧しい青年で、学問的野望は成就せず、社会から排除される余計者の運命にある。しかし、北京の優雅さと人々の柔和な態度が彼に癒しを与え、疲れた心身を一時的に回復させることができた。さらに、北京の自然の風景は、彼に束の間の安らぎを与えた。世界の混沌から暫し逃れさせてくれたのである。したがって、長く離れても、郁達夫にとって北京は懐かしい場所であり、彼は「故都的秋」、「小春天气」、「北平的四季」などを書き、北京の自然の風景に対する愛惜の念を表現している。

また、杭州は、郁達夫にとって思い出の地であり、憧れの都市であった。彼は、贅沢で退廃的な上海を離れ、詩的な理想郷である杭州に隠遁することを決意した。1933年、郁達夫は家族を杭州に移し、西湖の畔に「風雨茅廬」を建て、平和な生活を送りたかったからである。郁達夫の杭州を舞台とした小説では、出来事を、淡々と語っている。小説の中の主人公は、もはや感傷や苦痛、憂鬱に満ちた余計者ではなく、自由闊達な人生観を抱いている。「碧浪湖の秋夜」中の歴鄂、「瓢儿和尚」中の瓢儿和尚、「迟暮」中の林旭がそうである。

これらの人物は、性格の面でも、生活スタイルの面でも、杭州の文化の一部である。

これらの都市文明が彼に豊かな生活体験と精神力もたらし、異なる歴史と文化の背景や景観は、郁達夫に人間性を見直す機会を与えた。都市に対して想像と思考を働かせ、最終的に独特な都市体験の作品を完成し、中国現代文学史に重要なものを残した。そして、郁達夫の都市体験は彼だけのものではなく、当時の他の中国の現代作家たちの都市文明の体験を代表している。

## 参考文献

和文（著者名の五十音順）

### 【図書】

1. 稲葉昭二（1982）『郁達夫 その青春と詩』東方書店。

2. 岩田真治、NHK制作班著 (2015) 『カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年』NHK出版。
3. 伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫 (1989) 『郁達夫資料総目録附年譜』(上) 東洋学文献センター叢刊、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター。
4. 伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫 (1990) 『郁達夫資料総目録附年譜』(下) 東洋学文献センター叢刊、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター。
5. 伊藤虎丸 (1983) 『魯迅と日本人 アジアの近代と「個」の思想』朝日新聞社。
6. 郁達夫・曹禺著、小野忍等編 (1971) 『現代中国文学6』河出書房新社。
7. 丸山昇監修、芦田肇編集 (2000) 『中国現代文学珠玉選小説1』二玄社。
8. 奥野健男 (1983) 『日本文学史 近代から現代へ』中央公論社。
9. 大東和重 (2012) 『郁達夫と大正文学<自己表現>から<自己実現>の時代へ』東京大学出版会。
10. 小田嶽夫 (1975) 『郁達夫傳 その詩と愛と日本』中央公論社。
11. 加藤周一 (2007) 『日本文化における時間と空間』岩波書店。
12. 厨川白村 (1924) 『苦悶の象徴』改造社。
13. コトキン、ジョエル著、庭田よう子訳 (2007) 『都市から見る世界史』株式会社ランダムハウス講談社。
14. 佐藤春夫 (1937) 『からもの因縁』勁草書房。
15. 佐藤春夫 (1941) 『風雲』宝文社。
16. 佐藤春夫著、中村真一郎等編 (2000) 『定本佐藤春夫全集』臨川書店。
17. 陣内秀信 (1992) 『東京の空間人類学』ちくま学芸文庫。
18. スタール夫人著、中村加津、大竹仁子訳 (2002) 『ドイツ論2—文学と芸術』鳥影社・ロゴス企画部。
19. 鈴木正夫 (1994) 『郁達夫—悲劇の時代作家』研文出版。
20. 鈴木正夫 (1995) 『スマトラの郁達夫—太平洋戦争と中国作家』東方書店。
21. 竹内好 (1981) 『竹内好全集』筑摩書房。
22. 東京大学文学部・中国文学研究室編 (1967) 『近代中国の思想と文学』大安。
23. パーク、ロバート・E 著、W・シュラム編、学習院大学社会学研究室訳 (1954) 『マス・コミュニケーション』東京創元社。
24. パーク、ロバート・E 著、町村敬志、好井裕明編訳 (1986) 『実験室としての都市——パーク社会学論文選』御茶の水書房。
25. 樋口忠彦 (1993) 『日本の景観 —ふるさとの原型』ちくま学芸文庫。
26. ブルマ、イアン著、小林朋則訳 (2006) 『近代日本の誕生』株式会社ランダムハウス講談社。
27. 前田愛 (1983) 『近代日本の文学空間』新曜社。
28. 前田愛 (1992) 『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫。
29. 南後由和 (2018) 『ひとり空間の都市論』ちくま新書。

30. 横光利一 (1982) 『定本横光利一全集』第一三巻、河出書房新社。
31. 横光利一 (1991) 『上海』講談社。
32. 横光利一 (1983) 『上海』福武書店。
33. リンチ、ケヴィン著、丹下健三、富田玲子訳 (2007) 『都市のイメージ』岩波書店。
34. ルフェーヴル、アンリ著、斎藤日出治訳 (2000) 『空間の生産』青木書店。
35. 魯迅著、竹内好訳、小野忍等編 (1970) 『現代中国文学 1』河出書房新社。

#### 【雑誌・新聞】

1. 稲葉昭二 (1972) 「八高時代の郁達夫と服部担風」『東洋文化: 東洋文化振興会々報(17)』21-39 頁。
2. 井上薫 (2002) 「郁達夫作品にみる「性(sexuality)」の言説--その「告白」という儀式」『野草(69)』、1-18 頁。
3. 伊藤虎丸 (1961) 「沈淪論 (1)」『中国文学研究第 1 号』、中国文学の会、51-92 頁。
4. 伊藤虎丸 (1961) 「沈淪論 (2)」『中国文学研究第 3 号』、中国文学の会、36-76 頁。
5. 大久保洋子 (2014) 「郁達夫「蔦蘿行」をめぐる初歩的考察: その表現と作家イメージ」『神話と詩: 日本聞一多学会報』日本聞一多学会編 (12)、45-64 頁。
6. 大久保洋子 (2016) 「郁達夫とロバート・バーンズ: 「還郷記」「還郷後記」を中心に」『国学院中国学会報』国学院大学中国学会編 62、165-182 頁。
7. 大久保洋子 (2017) 「郁達夫『文学概説』について: 有島武郎『生活と文学』との比較を中心に」『國学院中國學會報 63』、45-63 頁。
8. 大久保洋子 (2020) 「郁達夫『日記九種』試読: 「寒灰の再燃」をめぐる」『國学院中國學會報 66』、68-85 頁。
9. 大久保洋子 (2021) 「一九二〇年代中期郁達夫における文学論の構想と執筆: 横山有策『文学概論』などを手がかりに」『日本中国学会会報 73』、144-157 頁。
10. 大東和重 (2009) 「郁達夫における大正の自伝的恋愛小説の受容--『懺悔録』・『受難者』・『新生』」『野草(84)』1-20 頁。
11. 岡崎俊夫 (1953) 「中国作家と日本--郁達夫について」『文学 21(9)』、889-894 頁。
12. 国松昭 (1986) 「「上海」論」『東京外国語大学論集第 36 号』、322-307 頁。
13. 桑島道夫 (1995) 「郁達夫における社会と芸術: 滞日期、帰国前後の文芸観に見られる〈反抗〉の考察を中心として」『中国中世文学研究(28)』、95-114 頁。
14. 桑島道夫 (1996.03) 「〈天才主義〉の背景・その 2--郁達夫の「芸文私見」を中心として」『人文学報(273)』、135-147 頁。

15. 桑島道夫 (2000) 「葛西善蔵と郁達夫—「哀しき父」「子をつれて」と「蔦蘿行」の比較を中心として」『アジア遊学(13)』38-53 頁。
16. 荊紅艶 (2013) 「郁達夫における谷崎潤一郎受容:『痴人の愛』と『迷羊』を中心として」『阪大比較文学 7』133-144 頁。
17. 高彩 (2010) 「郁達夫「十三夜」論—臺灣人畫家と西湖傳説の物語」『東方学』東方学会編 119、125-142 頁。
18. 高彩雯 (2012.10) 「旅人としての郁達夫:文化史的角度からの考察」『東京大学中国語中国文学研究室紀要(15)』、96-124 頁。
19. 高文軍 (2000) 「郁達夫研究を通じて見る中日両国の現代文学研究について」『名古屋大学中国語学文学論集 13』、43-63 頁。
20. 高文軍 (2000) 「郁達夫研究を通じて見る中日両国の現代文学研究について」名古屋大学中国語学文学論集 13、43-63 頁。
21. 高文軍 (2011) 「郁達夫的《沉沦》与名古屋地理考(上)」『名古屋大学中国語学文学論集 23』107-116 頁。
22. 高瀬恵利 (2014) 「郁達夫『沈淪』における自己プロデュース」『高知大國文 45』39(12)-50(1) 頁。
23. 胡金定 (1993.09) 「郁達夫の小説」『阪南論集人文・自然科学編 29(2)』、1-8 頁。
24. 胡金定 (1994.03) 「郁達夫詩試論」『阪南論集人文・自然科学編 29(4)』、21-29 頁。
25. 寇振鋒 (2007.3) 「郁達夫「沈淪」における名古屋と名古屋人の描写について」、『多元文化』(第7号)、103-117 頁。
26. 小泉龍人 (2013) 「都市論再考—古代西アジアの都市化議論を検証する」『ラーフィダーン』第34巻 83-116 頁。
27. 饒秋玲 (2017) 「郁達夫作品翻訳から見る中日の言語文化の違い」『札幌大学女子短期大学部紀要 64』、127-135。
28. 鈴木正夫 (1976) 「創造社脱退前後の郁達夫」『北海道大学文学部紀要 24(2)』103-146 頁。
29. 曾小蘭 (2022) 「身辺小説から見た郭沫若と郁達夫の革命文学:両者における留学時代の体験から」『比較文化研究(146)』、71-82 頁。
30. 宋新亜 (2019) 「記憶としての旧制高校:郁達夫「茫茫夜」の"同性愛"論争をめぐる」『野草(102)』、43-59 頁。
31. 宋新亜 (2020) 「初期創造社の翻訳観の誕生:郁達夫の旧制高校での留学経験をめぐって」『野草(105)』、98-119 頁。
32. 高橋みつる (1990) 「郁達夫「茫茫夜」「秋柳」における妓楼描写について」『名古屋大学人文科学研究 19』、29-43 頁。
33. 高橋みつる (2002) 「郁達夫『蜃楼』の未完の背景をめぐる」『愛知教育大学研究報告』人文・社会科学編 51、224-216 頁。
34. 陳齡 (2000) 「郁達夫と金子光晴—郁達夫と日本文人の交遊」『愛知文教大学論叢』愛知文教大学紀要編集委員会編 3、155-182 頁。
35. 陳齡 (2002) 「小田嶽夫と郁達夫:杭州との関連を中心に」『名古屋大学中国語学文学論集 14』、1-20 頁。
36. 陳敏 (2022) 「理想化と抑圧のはざまを生きる女工:郁達夫「春風沈

酔の夜」を再読する」『名古屋大学人文学フォーラム 5』、407-418 頁。

37. 張洋 (2013) 「郁達夫の文学における「自我」研究」『比較日本文化学研究(6)』、48-59 頁。

38. 張志晶 (1999) 「中日近代文学の相互交流、影響関係の考察—郁達夫を中心に」『教育研究所紀要(8)』、67-73 頁。

39. 趙敏 (2013) 「郁達夫における佐藤春夫「詩的精神」の受容:『沈淪』と『田園の憂鬱』の比較から」『比較文化研究(107)』75-89 頁。

40. 趙敏 (2014) 「郁達夫における田山花袋の受容—「自我と自己周辺」の事実による創作方法の比較から」『宇都宮大学国際学部研究論集 37』、91-102 頁。

41. 中沢けい (2020) 「太宰治と郁達夫」『季刊文科(80)』、61-64 頁。

42. 畠山香織 (2017) 「なぜ「日本の生活」を論じるのか」『京都産業大学論集. 人文科学系列 50』、301-320 頁。

43. 范文玲 (2014) 「郁達夫小説における女性身体描写の特色:—創造社作家群と比較して」『お茶の水女子大学中国文学会報 33』37-52 頁。

44. 范文玲 (2017) 「郁達夫「沈淪」の主人公は本当に「自殺」したのか:新たな読みの可能性を探る」『野草(99)』、78-100 頁。

45. バートル、エルドン (2017) 「郁達夫における日本耽美派の受容:『沈淪』『過去』をめぐる」『東洋学研究(54)』、167-176 頁。

46. 山本優子 (2020) 「日中作家の交流と日本留学の影響—創造者を中心に—」『中国語中国文化第 17 号』、178 頁。

47. 欒殿武 (2008) 「郁達夫の「南遷」に描かれた房総の風景と人々」欒殿武、『城西国際大学日本研究センター紀要(3)』、61-71 頁。

48. 李麗君 (2001) 「郁達夫と田山花袋:『沈淪』『空虚』を『蒲団』の比較をめぐる」『比較社会文化研究 9』59-69 頁。

49. 林麗婷 (2013) 「「アジアの子」試論:時代に迫られた留学生たち」『同志社国文学 79』80-91 頁。

50. 劉靚 (2016. 3) 「郁達夫「沈淪」における風景描写から見る語りの視点」、『表現文化研究(12)』、19-26 頁。

51. 劉靚 (2017) 「郁達夫「銀灰色的死」の自然描写:英文付記に注目して」『表象文化の比較総合的研究』プロジェクト編(13)、49-56 頁。

52. 呂輝菲 (2019) 「郁達夫の描いた日本人女性:その『沈淪』と田山花袋『少女病』との比較研究」『名古屋大学人文学フォーラム 2』、267-276 頁。

## 【論文】

1. 高文軍 (2000) 『日本的郁達夫研究』 名古屋大学文学博士論文。

2. 佐藤一郎 (1991) 『中国文章論』 慶應義塾大学文学博士論文。

3. 申英蘭 (2007) 『郁達夫と日本文学の関係試論』 京都大学文学博士論文。

4. 徐光興 (1998) 『在日留学生の異文化適応過程とメンタルヘルスに関する研究』 名古屋大学教育学博士論文。

5. 竹内好 (1933) 卒業論文「郁達夫研究」(『竹内好全集』第 17 巻に収録)。

6. 張競 (1991) 『中国文学における「情」と「恋愛」：その比較文化史的研究』東京大学学術博士論文。

7. 趙敏 (2014) 『郁達夫における大正文学の受容』宇都宮大学国際学博士論文。

8. 陳齡 (2002) 『郁達夫と日本文学者の交渉』名古屋大学学術博士論文。

9. 范文玲 (2016) 『郁達夫小説に見られる西洋への憧憬：女性表象を中心に』お茶の水女子大学博士論文。

10. 李麗君 (2013) 『郁達夫作家形成期研究』九州大学比較社会文化博士論文。

### 【オンラインデータベース】

1. 『北京の秋「この世の楽園」』  
<http://japanese.cri.cn/20171027/07ab25b2-b2b7-4af3-94c6-12c0322f20e5.html> (参照日：2022年9月5日)。

2. 「臨安／杭州／キンサイ」『世界史の窓』  
<http://www.y-history.net/appendix/wh0303-058.html> (参照日：2022年9月5日)。

3. 横山悠太の自由帳「郁達夫 楊梅焼酎」『note』  
<https://note.com/yokoyamayuta/n/nfa998e5e4605> (参照日：2022年9月5日)。

### 中文 (著者名ピンインのアルファベット順)

#### 【図書】

1. 陈兰村、叶志良 (1998) 『20世纪中国传记文学论』天津人民出版社。

2. 陈平原、王德威 (2005) 『北京：都市想象与文化记忆』北京大学出版社。

3. 范伯群、曾华鹏 (1983) 『郁达夫评传』百花文艺出版社。

4. 郭沫若 (1951) 『历史人物』新文艺出版社。

5. 郭沫若 (1979) 『学生时代』人民文学出版社。

6. 郭沫若 (1990) 『郭沫若全集』文学編 15 卷、人民文学出版社。

7. 郭少棠 (2005) 『旅行：跨文化想像』北京大学出版社、2005 年版。

8. 郭绍虞、罗根泽 (1959) 『中国历代文论选 (下)』人民文学出版社年版。

9. 洪治纲 (2017) 『中国当代文学思潮十五讲』浙江大学出版社。

10. 柯云路 (1988) 『夜与昼 (上册)』人民文学出版社。

11. 旷新年 (1998) 『1928：革命文学』山东教育出版社。

12. 老舍著、胡挈青編 (1980) 『老舍论创作』上海文艺出版社。

13. 李芳民 (2006) 『故事的来源、场景与意味—唐人小说中佛寺的艺术功能与文化蕴涵』商务印书馆。

14. 李欧梵 (2000) 『现代性的追求』三联书店。



15. 李欧梵 (2001) 『上海摩登——一种新都市文化在中国』北京大学出版社。
16. 李欧梵 (2005) 『中国现代作家的浪漫一代』新星出版社。
17. 刘达临 (2005) 『浮市与春梦——中国与日本的性文化比较』中国友谊出版公司。
18. 龙迪勇 (2015) 『空间叙事学』生活·读书·新知三联书店。
19. 鲁湘元 (1998) 『稿酬怎样搅动文坛』红旗出版社。
20. 鲁迅 (1973) 『朝花夕拾』人民文学出版社。
21. 鲁迅 (1981) 『鲁迅全集』第六卷、人民文学出版社。
22. 马逢洋编 (1996) 『上海：记忆与想象』文汇出版社。
23. 倪祥妍 (2013) 『日本小说家与郁达夫』北京大学出版社。
24. 齐梅 (2014) 修士论文『论郁达夫小说中的空间』南京大学。
25. 钱谷融、钱理群、王栋生编 (2010) 『江南读本』华东师范大学出版社。
26. 钱理群、温儒敏、吴福辉 (1998) 『中国现代文学三十年』北京大学出版社。
27. 孙逊、杨剑龙编 (2008) 『都市空间与文化想象』(都市文化研究第5辑) 上海三联书店。
28. 唐振常 (1993) 『近代上海繁华录』商务印书馆。
29. 唐振常主编 (1989) 『上海史』上海人民出版社。
30. 童晓燕 (2011) 『日本影响下的创造社文学之路』社会科学文献出版社。
31. 王观泉 (1985) 『席卷在最后的黑暗中：郁达夫传』天津人民出版社。
32. 王自立、陈子善 (1982) 『郁达夫研究资料』(上) 天津人民出版社。
33. 王自立、陈子善 (1982) 『郁达夫研究资料』(下) 天津人民出版社。
34. 王风、蒋朗朗、王娟编 (2014) 『解读文本五四与中国现当代文学』北京大学出版社。
35. 吴福辉 (1995) 『都市漩流中的海派小说』湖南教育出版社
36. 夏志清 (2001) 『中国现代小说史(上)』中文大学出版社。
37. 忻平 (2009) 『从上海发现历史——现代化进程中的上海人及其社会生活1927-1937』上海大学出版社。
38. 许子东 (2018) 『现代文学课』上海三联书店。
39. 叶渭渠 (2005) 『日本文化史』广西师范大学出版社。
40. 郁达夫 (1983) 『郁达夫文集』花城出版社。
41. 郁达夫 (2017) 『郁达夫文论集』吉林出版集团股份有限公司。
42. 郁达夫著、吴秀明等编 (2007) 『郁达夫全集』浙江大学出版社。
43. 郁云 (1984) 『郁达夫传』福建人民出版社。
44. 张爱玲 (1997) 『流言』花城出版社。
45. 张英进著、秦立彦译 (2007) 『中国现代文学与电影中的城市：空间、时间与性别构形』江苏人民出版社。
46. 张志扬 (1999) 『创伤记忆——中国现代哲学的门槛』上海三联书店。
47. 张震 (2013) 『个体的探寻——郁达夫独创性问题研究』浙江工商大学出版社。
48. 赵园 (2002) 『北京：城与人』北京大学出版社。
49. 周作人 (2002) 『自己的园地』河北教育出版社。
50. 朱联保 (1993) 『近现代上海出版业印象记』学林出版社。

## 【雜誌・新聞】

1. 白魯恂 (1992) 「中国民族主义与现代化」『二十一世纪第 9 期』、13-26 頁。
2. 陈力君 (2006) 「现代文学中杭州形象的解读与反思」『中国文学研究第 3 期』、74-78 頁。
3. 大久保洋子 (2005) 「郁达夫小説研究在日本」『中国现代文学研究丛刊』第 5 期、216-235 頁。
4. 丹珍草 (2009) 「阿来的空间化写作」『百色学院学报第 4 期』45-50 頁。
5. 韩洪举 (2018) 「郁达夫对现代小说理论的贡献及其艺术论探析—兼论郁达夫小说创作中的江南时空故事书写」『河南大学学报：社会科学版』第 2 期、96-102 頁。
6. 何琛、段小軍 (2018) 「论郁达夫笔下的上海空间意义生产」『社会科学版』第 4 期、重庆科技学院学报、92-94 頁。
7. 贾植芳 (1991) 「中国留日学生与中国现代文学」『山西师大学报』社会科学版第 4 期、38-47 頁。
8. 李航春 (2012) 「郁达夫与北京—郁达夫行旅系列之一」『中文学术前沿』第 1 期、82-89 頁。
9. 李晖 (1993) 「从郁达夫〈迷羊〉看二十年代安庆城市风情」『阜阳师范学院学报：社会科学版』第 3 期、57-61 頁。
10. 鈴木正夫 (1984) 「郁達夫与日本文学」、『复旦学报第 6 期』、111-113 頁。
11. 刘茂海 (2007) 「新时期以来郁达夫其人其作研究综述」『西北第二民族学院月报』、哲学社会科学版、110-116 頁。
12. 龙迪勇 (2008) 『空间叙事学：叙事学研究的新领域』《天津师范大学学报：社会科学版》第 6 期、54-60 頁。
13. 龙迪勇 (2009) 『空间叙事学：叙事学研究的新领域(续)』《天津师范大学学报：社会科学版》第 1 期、58-63 頁。
14. 盛志梅 (2003) 「试论清代弹词的江南文化特色」、『江淮论坛』第 1 期、109-112 頁、126 頁。
15. 王富仁 (2000) 「时间·空间·人 (一) —鲁迅哲学思想的刍议之一章」『鲁迅研究月刊第 1 期』、4-14 頁。
16. 王富仁 (2000) 「时间·空间·人 (二) —鲁迅哲学思想的刍议之一章」『鲁迅研究月刊第 2 期』、4-14 頁。
17. 王富仁 (2000) 「时间·空间·人 (三) —鲁迅哲学思想的刍议之一章」『鲁迅研究月刊第 3 期』、4-16 頁。
18. 王富仁 (2000) 「时间·空间·人 (四) —鲁迅哲学思想的刍议之一章」『鲁迅研究月刊第 4 期』、4-16 頁。
19. 王富仁 (2000) 「时间·空间·人 (五) —鲁迅哲学思想的刍议之一章」『鲁迅研究月刊第 5 期』、4-20 頁。

20. 吴静 (2004) 「〈现代〉杂志与上海文化」 『东方论坛第3期』、42-47頁。
21. 吴晓东 (2012) 「郁达夫与中国现代“风景的发现”」 『中国现代文学研究丛刊』第10期、80-89頁。
22. 张斌 (2013) 「郁达夫小说中的城市景观」 『现代中文学刊』第1期、27-34頁。
23. 张鸿声 (2007) 「从启蒙现代性到城市现代性—中国新文学初期的上海叙述」 『郑州大学学报第4期』、23-28頁。
24. 张文斌、瞿华兵 (2019) 『郁达夫小说的安庆书写』 安徽工业大学学报、社会科学版5期、40-42頁。
25. 朱寿桐 (2004) 「论作为中国现代文学中心的上海」 『学术月刊』第6期、65-73頁。

### 【オンラインデータベース】

1. 「百年回首话印刷」 『中国图书商报』  
[http://www.waterpub.com.cn/info/detail\\_233.html](http://www.waterpub.com.cn/info/detail_233.html) (参照日：2022年9月5日)
2. 「民国时的北京，鲁迅等大学教授月薪的购买力，是如何恐怖的存在」  
[https://m.sohu.com/a/587562708\\_121165106](https://m.sohu.com/a/587562708_121165106) (参照日：2022年9月5日)
3. 中国「知網」：中国学术情报データベース(CNKI:China National Knowledge Infrastructure)  
<https://www.cnki.net/> (参照日：2022年9月5日)

付録1 (本論で言及した小説の和中对照表)	
和訳タイトル	簡体中文タイトル
「青い煙」	「青烟」
「胃病」	「胃病」
「祈り」	「祈愿」
「遅咲きの木犀」	「迟桂花」
「懐郷病者」	「怀乡病者」
「街灯」	「街灯」
「過去」	「过去」
「寒風の中」	「在寒风里」
「彼女は弱い女子」	「她是一个弱女子」
「花塙」	「花坞」
「銀灰色の死」	「银灰色的死」
「帰郷記」	「还乡记」
「帰郷後記」	「还乡后记」
「帰航」	「归航」
「玉皇山」	「玉皇山」
「空虚」	「空虚」
「烟影」	「烟影」
「故都の秋」	「故都的秋」
「孤独」	「孤独」
「故都の日記」	「故都日记」
「広州事情」	「广州事情」
「小春日和」	「小春天气」
「杭州の八月」	「杭州的八月」
「ささやかな供えもの」	「薄奠」
「サイレンとともに」	「在警报声里」
「西溪の晴雨」	「西溪的晴雨」
「春風沈酔の夜」	「春风沉醉的夜晚」
「秋柳」	「秋柳」
「十一月初三」	「十一月初三」
「十三夜」	「十三夜」

「蜃楼」	「蜃楼」
「上海戦争での生活」	「沪战中的生活」
「詩人の消息を聞く」	「打听诗人的消息」
「出奔」	「出奔」
「城内の呉山」	「城里的吴山」
「寂寞たる春の朝」	「寂寞的春朝」
「清冷の午後」	「清冷的午后」
「雪夜」	「雪夜」
「全面的な抗戦の裏側」	「全面抗战的线后」
「沈淪」	「沉沦」
「血涙」	「血泪」
「遅暮」	「迟暮」
「超山の梅花」	「超山的梅花」
「蔦蘿行」	「莛萝行」
「敵機来襲」	「敌机来袭」
「灯蛾を埋葬する夜」	「灯蛾埋葬之夜」
「逃走」	「逃走」
「南遷」	「南迁」
「合歓木の花咲く時」	「马缨花开的时候」
「東梓関」	「东梓关」
「人と化け物」	「人妖」
「引っ越し雑話」	「移家琐记」
「瓢儿和尚」	「瓢儿和尚」
「微雪の朝」	「微雪的早晨」
「北平の四季」	「北平的四季」
「碧浪湖の秋夜」	「碧浪湖的秋夜」
「茫々夜」	「茫茫夜」
「迷える羊」	「迷羊」
「唯名論者」	「唯命论者」
「余計者」	「零余者」
「楊梅焼酎」	「杨梅烧酒」
「落日」	「落日」

「離散の前」	「离散之前」
「里西湖の片隅」	「里西湖的一角落」
「龍門山路」	「龙门山路」

付録 2 郁達夫年譜

西暦	年齢	出来事	発表作品（小説、随筆、評論）	歴史
1894				3月、朝鮮に甲午農民戦争起こる 8月、日清戦争起こる。
1895				3月、日清戦争終結 4月、下関条約締結。 朝鮮の「独立」を承認。 遼東半島・台湾・澎湖島の割譲、2億両の賠償金（清国政府の歳入総額の2.5年分）、片務的最恵国待遇、海港場における企業経営権を得る。 この賠償金を基礎に日本は金本位制を確立。 露・独・仏下関条約に三国干渉。
1896	0歳	(清の光緒二十二年、明治二十九年)十二月七日(陰歴十一月三日、丙申年、庚子月、甲子日、甲子時)浙江省富陽県満州弄(今込夫弄)に出生。父郁企曾33歳、母陸氏30歳、兄郁華12歳、郁浩5歳、姉郁鳳珍2歳		
1897	1歳			

1898	2歳	父病歿、家計を支えるための苦勞が原因だという。郁達夫は自伝の『一』で、「私はまだ一年にも達しない前に、もう栄養不良のため胃腸を患ってしまった。病気は一年余続き、衰弱から発熱し、発熱からひきつけ、家中みんな小さい生命のために精根を使い果たし…父もこのため病んでなくなった。」これ以後多忙な母に代って達夫の世話をしたのは、翠花という若い女中と信心深い寡婦の祖母(戴氏。？～1923)であった。		ドイツ膠州湾、ロシア旅順・大連、イギリス九竜半島・威海衛をそれぞれ租借。戊戌の変法とその失敗。 京師大学堂設立。
1899	3歳			12月、義和団「扶清滅洋」を唱え事件を起こす
1900	4歳			6月、義和団、北京の列国公使館を包囲。清朝列国に宣戦。中国人民10万人が参加。 8月、欧米7か国と日本が義和団鎮圧のため軍を派遣、8カ国連合軍北京占領。 9月 義和団事件の最終議定書、清と11カ国との間に締結。 10月 孫文ら惠州挙兵。
1901	5歳			義和団事件終結 9月、辛丑条約(北京議定書)締結。中国半植民地化を決定的にする。
1902	6歳	春節の前に近くの羅家の私塾に入り、旧式の教育を受け始める。師は葛實哉。		
1903	7歳	孔子廟に附設された奎星閣書塾に移る。師は張惠卿。		



1904	8歳	富陽県公立書塾「春江書院」入学、中国古典を学ぶ『自述詩』六、「九歳題詩四座驚」「九歳詩を題して四座驚く」。 自伝の『三』に、「私が初めて書塾へ行って勉強した年齢ははっきりいえないが、おおよそ七、八歳の頃であった」、「初めて県立小学校に入学したその年の暮、私の平均点は八十点を超えていたので、思いがけず校長と知事の抜擢を受け、私と四人の同級生は一級飛び越して二年上の級に入れられた。このごくあたりまえのことが、県城内では意外に人々の視聴をゆさぶり、私たちの家庭にまでかなりの騒ぎをひき起こしたのだった。」 初めて詩を賦し四圍の者を驚かせたが、早熟の子の大成しがたいことを知る母親を嘆かせる。		2月、日露戦争起こる (清国局外中立宣言) 11月、上海に光復会会 成立。反満革命論など。 若き日の魯迅も参加。
1905	9歳			9月、日露戦争終結。 孫文東京で中国革命同盟会結成
1906	10歳	春江書院が正式に改組された富陽縣小学堂に入学、英語、数学、地理なども学び始める。		
1907	11歳	塾から富陽県立高等小学学堂に変更 『史記』、『漢書』、『紅樓夢』、『六才子』などを学ぶ		
1908	12歳	成績優秀により2学年上級に特別進級。		10月、西太后死亡、宣 統帝(愛新覺羅溥儀) 即位
1909	13歳			
1910	14歳			

1911	15歳	<p>1月、高等小学学堂を卒業、賞品『吳梅林詩集』を得る。</p> <p>2月春、杭州に出、浙江第一中学堂(通稱:杭州府中)に合格。『自傳』によれば学費不足のため、『自述詩』によれば宿舎が無かったため、浙江第二中学堂(嘉興府中)に入学。</p> <p>この年の夏期休暇中、『吳詩集覽』、『庚子拳匪始末記』、『普天忠憤集』を讀んで強い影響を受ける。またこのころ『石頭記』、『第六才子書(西廂記)』を手にしたが、『西湖佳話』『花月痕』の二書が、意識的に中国の小説を讀み始めた時期に觸れた最初のものであるという。</p> <p>夏期休暇後、改めて杭州府中に轉入。同級生に徐志摩がいた。このころまで主として漢代の史書を愛読していたが、『滄浪詩話』『白香詞譜』に觸發されて詩詞を作り始め、『全浙公報』、『之江日報』、『神州日報』等の新聞に投稿、採用されるようになる。</p> <p>秋、辛亥革命のため学校は休校となり、帰省して難を避け、獨学に勵む。</p>		辛亥革命起こる
1912	16歳	<p>杭州府中に復学しようと抗州に数か月待機していたが、結局9月にアメリカ長老会系のミッション・スクール之江大学預科(原名育英書院)に入学。数か月後ストライキ事件の首謀者の一人として退学処分を受ける。</p>		<p>1月、中華民国成立、孫文臨時大統領に就任。宣統帝退位、清朝滅ぶ。</p> <p>3月、袁世凱臨時大統領就任。臨時約法公布。</p> <p>7月、第三次日露協約。日本の特殊權益の分界線は内蒙古まで延長。この時「満州問題」は「滿蒙問題」となった。</p> <p>8月、中国同盟会改組、国民党成立。</p>

1913	17歳	<p>春、アメリカ浸礼会が杭州で運営する蕙蘭中学に転学、3か月後、やがて学校の奴隷化教育に不満を持ち、獨学を決意して、家に帰って一人暮らしをすることにした。</p> <p>9月下旬、北京高等審判庁の推事に任職して、日本に司法を視察するため派遣された兄郁曼陀と一緒に日本に留学した。上海から乗船、神戸に上陸。大阪、京都、名古屋を見物しながら上京。</p> <p>10月から東京で生活を始め、小石川(中富坂町7番地)に長兄一家と同居。</p> <p>11月神田正則学校に入学。ここで中学の正課の補習を受けるとともに、夜は日本語の学習に通う。猛烈な受験勉強を開始。</p>		
1914	18歳	<p>張資平『曙新期的創造社』（『現代』第3巻第2期）によると、東京高等工業学校、千葉醫科専門学校を受験していずれも失敗したという。</p> <p>7月、官費生の資格を得て、東京第一高等学校特設の予科に合格。最初、文哲経政等の第一部に入り、後に医科の第三部に移る。同期に郭沫若、張資平がいた。</p> <p>8月末、長兄一家帰国、給費生となる。</p> <p>郭沫若が回想するところによれば（『論郁達夫』）、英語、ドイツ語に長じ、中国文学の素養深く、旧体詩の作者として留学生間に知られていたとい。</p> <p>勤勉な学生であったが、このころツルゲーネフの『初恋』と『春潮』を英訳で読み、はじめて西洋文学と接触、以後急速に文学への耽溺が始まり、後には課業を放置して「當時流行のいわゆる軟文学作品」を読むに至る（『五六年来創作生活的回顧』）</p>		<p>5月、袁世凱新約法公布。</p> <p>6月、孫文、中華革命党結成。</p> <p>7月、第一次世界大戦勃発。</p> <p>8月、日本、ドイツに対して宣戦布告。9月山東半島上陸。11月青島陥落。</p>
1915	19歳	<p>9月、兄の意思で名古屋第八高等学校第三部医科入学。</p> <p>毎月支給される官費は33元、この間に後藤隆子という「沈淪」中のモデルと思われる娘と知り合い</p>		<p>1月、日本21ヶ条の要求を袁世凱に提出。中国人民の反日運動激化。</p> <p>9月、陳独秀、雑誌『新青年』創刊</p>

1916	20歳	春、日本の漢文学者の服部担風と知り合いになり、服部担風が主宰する「佩蘭吟社」の定期集会に参加し、彼が編集した「新愛知新聞」の漢詩欄で旧詩作を発表し始めた。9月経費、時間的拘束などの事情により、第三部（医科）から第一部（文科）に転部、長兄と齟齬をきたす。	旧詩集『乙卯集』を編む（未出版、原稿散逸） 前年により本年にかけて白話小説「金丝雀」を執筆（原稿散逸）	胡適ら文学革命提唱
1917	21歳	6月下旬、名古屋を離れて帰国し、病気中の祖母を見舞い。 8月の初めに富陽に帰り、孫荃（1897-1978）と婚約した。 9月初、日本に戻る。 秋、病んで二ヶ月入院、歳暮、熱海に遊び		
1918	22歳	5月、中国人留日学生が「中日軍協約」に反対するため、学生ストライキ行方。郁達夫は積極的に呼応する。 8月、郭沫若、成仿吾らと知り合いになり、文学好きの友達になった。 この年、雪子という女性（後に娼婦に売られた由）と二度程同棲生活を送る。		
1919	23歳	6月、名古屋第八高等学校卒業 9月初め、長兄の勧めによって帰国し外交官試験、高等文官試験に応じたが失敗 10月、東京帝国大学経済学部に入學。 11月中旬、東京に戻る。本郷区東片町135番地、野村方に下宿しており、後に上野池の端の趙心哲方に転居。支給される官費は月額72元。	「相思樹」などの白話小説を試作（原稿散逸） 「兩夜巢」（小説）（断片）1919年2月—4月間で創作した、早期試作である（未発表）死後『郁達夫全集』小説（上）浙江大学出版社2007で収録された。	5月、反帝国主義を掲げ、「五・四運動」（排日運動）開始。 6月、排日運動取り締まり、学生運動禁止の大総統令により学生の大規模逮捕。 10月 孫文が中華革命党を中国国民党に改組。
1920	24歳	7月、一時帰国、孫荃と結婚した。 この年、田漢の紹介で新進作家の佐藤春夫（1892-1964）を訪れるようになる。	「園明園の一夜」（日本語小説）1920年6月3日作（拠陳其強「郁達夫年譜」浙江大学出版社1989年版）本来の計画は1920年10月に、郁達夫と四名日本の同窓を一緒に創立した日本文芸雑誌「寂光」の創刊号に発表するが、実現なかったの故に、未発表作である。	

1921	25歳	<p>6月8日、留学生仲間だった、郭沫若や成仿吾、張資平らと東京第二改盛館の郁達夫寓所で、文学団体創造社を結成し、「創造季刊」を出版することを決定。</p> <p>9月から一時帰国、安徽省の安慶法政専門学校で教職に就く。</p> <p>10月15日、処女小説集「沈淪」が上海泰東図書館から出版された、「創造社叢書」の第三種である。</p>	<p>「银灰色的死」（小説）（最初発表の時、署題名はT.D.Y.）、1921年7月7日-9月13日『时事新报』副刊『学灯』に発表。</p> <p>「沉沦」（小説）一九二一年五月九日改作、1921年10月に上海泰東書局出版して小説集『沉沦』に収録された。</p> <p>「胃病」（小説）（最初発表の時、題題名は「友情与胃病」。1927年『郁达夫全集』第二卷「鸡肋集」に収録した時、「胃病」に変わった）1921年上海『平民』周刊第七十四至第七十七期に発表。</p> <p>「南迁」（小説）一九二一年七月二十七日作、小説集『沉沦』に収録された。</p> <p>「夕阳楼日记」（評論）一九二一年五月四日夜半、1922年8月25日『创造』季刊第一卷第二期に発表。</p> <p>「施笃姆」（評論）最初『文艺论集』に発表した時、題題名は「&lt;茵梦湖&gt;の序引」、『敝帚集』に収録した時、「施笃姆」と変った。</p> <p>一九二一、七、二一、午后于日本东京之函馆旅馆。1921年10月『文学周刊』第十五期に発表。</p> <p>「「沉沦」自序」（評論）千九百二十一年七月三十日叙于东京旅次、达夫。1921年10月15日上海泰东书局初版“创造社丛书第三种”小説集『沉沦』に発表。</p>	中国共産党結成
1922	26歳	<p>1月、安慶から上海に移り</p> <p>3月15日、主編の「創刊季刊」が創刊され、5月1日に泰東図書館から正式に発行される。郁達夫はこの雑誌に小説「茫茫夜」と論文「芸文私見」を発表した。</p> <p>3月末卒業試験のため日本へ戻り、無事東京帝国大学経済学部経済学科を卒業し、経済学士を取得した。一旦東京帝国大学文学言語学科に学士入学するも、7月最終的に帰国した。</p> <p>5月11日、沈雁冰は「時事新報・文学旬報」の第三十七期から三期連続で「損」というペンネームで「「創造」私に与えられた印象」を連載する。郁達夫の『芸文私見』などの文章に対して反批判を行い、『創造』季刊創刊号の各文を評論している。創造社と文学研究会の間で激しい論戦が起こった。</p> <p>7月20日、神戸から乗船、最終的に帰国。</p> <p>9月17日、胡適は「努力週報」第12期で「編集余談一罵人」を発表し、郁達夫と創造社の他のメンバーの「浅薄退屈」を非難し、創造社と胡適派の文人の筆戦を引き起こした。</p>	<p>「茫茫夜」（小説）一九二二年二月、1922年3月15日『创造季刊』第一卷第一号に発表。</p> <p>「怀乡病者」（小説）一九二二年四月初二日午前五時作于东京之酒楼、1926年4月16日『创造月刊』第一卷第二期に発表。</p> <p>「空虚」（小説）（最初発表の時、題題名は「风铃」、『达夫短篇小说集』に収録された時、「空虚」に変わった）一九二二年七月改作、1922年8月25日『创造季刊』第一卷第二期に発表。</p> <p>「血泪」（小説）一九二二年八月四日于上海、1922年8月8日-13日「时事新报·学灯」に発表。</p> <p>「孤独」（一幕物）（最初発表の時、題題名は「孤独的悲哀」、『达夫全集』第三卷「过去集」に収録された時、「孤独」に変わった）一九二二、十月三十一日。1922年11月25日『创造』季刊第一卷第三期に発表。</p> <p>「春潮」（小説）（最初発表の時、四節しかない、文末には「続く」って明記したが、作者は続書いてなかった、集に収録もしなかった）『创造季刊』第一卷第三期に発表。</p> <p>「采石矶」（小説）一九二二年十一月二十日午前、1923年2月1日『创造季刊』第一卷第四期に発表。</p> <p>「归航」（隨筆）（最初発表と『达夫全集』第三卷「过去集」に収録した時、題題名は「中途」、『达夫散文集』に収録した時、「归航」と変った）一九二二、七月二十六日、上海。1924年2月28日『创造季刊』第二卷第二期に発表。</p> <p>「艺文私見」（評論）1922年3月15日『创造』季刊第一卷第一期に発表。</p> <p>「编辑余談」（評論）『创造』季刊に発表した時署題名はT.D.Yである。一九二二、二、三、午后达夫记。1922年3月15日『创造』季刊第一卷第一期に発表。</p> <p>「「一个流浪人的新年」跋」（評論）1922年3月15日『创造』季刊第一卷第一期に発表。「一个流浪人的新年」は成仿吾作。</p> <p>「「茫茫夜」发表以后」（評論）1922年6月22日『时事新报·学灯』に発表。</p> <p>「「女神」之生日」（評論）一九二二、七月三十一日、上海。1922年8月2日『时事新报·学灯』に発表。</p> <p>「答胡适之先生」（評論）九月二十一日夜半记。1922年10月3日『时事新报·学灯』に発表。</p> <p>「写完了『芑萝集』的最后一篇」（評論）一九二三年七月最后的一日、1923年10月18日上海「中华新报·创造日」第八十六期に発表。</p> <p>「赫尔惨」（評論）十二年八月二十日、1923年7月26日『创造周报』第十六号に発表。</p> <p>「文艺赏鉴上之偏爱价值」（評論）王自立、陈子善编『郁达夫研究资料』第740页（天津人民出版社一九八二年版）本文は一九二三年八月二十六日作、最初は一九二三年八月十二日『创造周报』第十四号に発表。（どちが正解なのが不明）。</p> <p>「集中于「黄面志」（The Yellow Book）的人物」（評論）一九二三年九月二十五日、1923年9月23、30日『创造周报』第二十、二十一期に発表。</p>	

<p>1923 27 歳</p>	<p>2月初め、安慶法政専門学校教員の職を辞し、家族とともに上海に戻る。 2月17日、周作人の招待で、魯迅を訪問。 5月15日、胡适和解を求める書信を認め、17日郁達夫もこれに答える。 5月19日、「文学上の階級闘争」を発表、初めて中国の文芸界で文学は階級闘争のために奉仕すべきだと提唱した。 10月初め、北京大学から統計学の講師として郁達夫を招聘したい旨の電報が届く。成仿吾は賛成、郭沫若は反対したが、結局北京行を決意した。 11月2日、郁達夫が抜けて人手不足したことから、新聞社の経営上の行詰りことから、「創造日」は休刊して、全部で101期。 11月初め、沈從文と知り合いになり、同情と助けを与えた。 11月16日、「晨报副刊」で「一人の文学青年への公開状」を発表した。12月13日、「現代評論」は北京で創刊され、執筆し始める。</p>	<p>「莛萝行」(小説)(1936年の時、アメリカ有名な作家、記者エドガー・スノー(Edgar Snow)主編の英文版現代中国短編小説選『Living China: Modern Chinese Short Stories』に収録された時、題題名は「紫藤と莛萝」)。一九二三年四月六日清明节午后、1923年5月1日『创造季刊』第二卷第一号に発表。 「青烟」(小説)一九二三年旧曆五月十日午前四時、1923年6月20日『创造周报』第八号に発表。 「春风沉醉的晚上」(小説)一九二三年七月十五日、1924年2月28日『创造季刊』第二卷第二期に発表。 「秋河」(小説)(大正)十二年旧曆七月初五、1923年8月19日『创造周报』第15号に発表。 「落日」(小説)一九二三年九月十日上海、1923年9月16日『创造周报』第19号に発表。 「离散之前」(小説)一九二三年九月、1926年1月10日『东方杂志』半月刊第二十三卷第一卷に発表。 「人妖」(未完稿)(小説)1923年12月1日北京『晨报副刊·晨报五周年纪念增刊』に発表。 「还乡记」(隨筆)一九二三年七月三十日、1923年7月23日—8月2日上海『中华新报·创造日』第二期に発表。 「立秋之夜」(隨筆)八月八日夜十二時、1923年8月11日上海『中华新报·创造日』第十九期に発表。 「诗人的末路」(隨筆)一九二三年八月十二日、1923年8月14日上海『中华新报·创造日』第二十一期に発表。 「还乡后记」(隨筆)一九二三年八月十九日、1923年8月17日—8月21日上海『中华新报·创造日』第二十四期—第二十八期に発表。 「苏州烟雨记」(隨筆)(病氣の原因で中止)1923年9月19日—9月26日上海『中华新报·创造日』第五十七期—第六十四期に発表。 「海上通信」(隨筆)十月八日夜三時于天津の旅館内。1923年10月20日『创造日报』第二十四号に発表。 「文学上の階級斗争」(評論)十二年五月十九日、1923年5月27日『创造周报』第三号に発表。 「自我狂者须的儿纳」(評論)最初発表の時題題名は「Max Stirner 的生涯及其哲学」、『文艺论集』に収録された時「自我狂者须的儿纳的生涯及其哲学」と変った、『敝帚集』に収録された時「自我狂者须的儿纳」と変った。六月十一日、1923年6月16日『创造周报』第六号に発表。 「艺术与国家」(評論)一九二三、六月十七日、1923年6月23日『创造周报』第七号に発表。 「批评与道德」(評論)美国独立纪念日(一九二三、七、四)、1923年7月14日『创造周报』第十号に発表。 「『创造日』宣言」(評論)作者は『创造日』のため書いた発刊詞、署題題名は创造社同仁。七月二十一日、1923年7月21日上海『中华新报·创造日』第一期に発表。 「『莛萝集』自序」(評論)『莛萝集』の序文。『莛萝集』は1923年10月上海泰东图书局出版した、作者の小説、散文集、創造社「辛荑小丛书第三种」。一九二三、七、二八午后叙于上海的贫民窟里、1923年9月3日上海「中华新报·创造日」第四十一期に発表。 「写完了『莛萝集』的最后一篇」(評論)一九二三年七月最后的一日、1923年10月18日上海「中华新报·创造日」第八十六期に発表。 「赫尔惨」(評論)十二年八月二十日、1923年7月26日『创造周报』第十六号に発表。 「文艺赏鉴上之偏爱价值」(評論)王自立、陈子善编『郁达夫研究资料』第740页(天津人民出版社一九八二年版)本文は一九二三年八月二十六日作、最初は一九二三年八月十二日『创造周报』第十四号に発表。(どちが正解なのが不明)。 「集中于『黄面志』(The Yellow Book)的人物」(評論)一九二三年九月二十五日、1923年9月23、30日『创造周报』第二十、二十一期に発表。 「文学上の階級斗争」(評論)十二年五月十九日、1923年5月27日『创造周报』第三号に発表。 「自我狂者须的儿纳」(評論)最初発表の時題題名は「Max Stirner 的生涯及其哲学」、『文艺论集』に収録された時「自我狂者须的儿纳的生涯及其哲学」と変った、『敝帚集』に収録された時「自我狂者须的儿纳」と変った。六月十一日、1923年6月16日『创造周报』第六号に発表。 「艺术与国家」(評論)一九二三、六月十七日、1923年6月23日『创造周报』第七号に発表。 「批评与道德」(評論)美国独立纪念日(一九二三、七、四)、1923年7月14日『创造周报』第十号に発表。 「『创造日』宣言」(評論)作者は『创造日』のため書いた発刊詞、署題題名は创造社同仁。七月二十一日、1923年7月21日上海『中华新报·创造日』第一期に発表。 「『莛萝集』自序」(評論)『莛萝集』の序文。『莛萝集』は1923年10月上海泰东图书局出版した、作者の小説、散文集、創造社「辛荑小丛书第三种」。一九二三、七、二八午后叙于上海的贫民窟里、1923年9月3日上海「中华新报·创造日」第四十一期に発表。 「写完了『莛萝集』的最后一篇」(評論)一九二三年七月最后的一日、1923年10月18日上海「中华新报·创造日」第八十六期に発表。 「赫尔惨」(評論)十二年八月二十日、1923年7月26日『创造周报』第十六号に発表。 「文艺赏鉴上之偏爱价值」(評論)王自立、陈子善编『郁达夫研究资料』第740页(天津人民出版社一九八二年版)本文は一九二三年八月二十六日作、最初は一九二三年八月十二日『创造周报』第十四号に発表。(どちが正解なのが不明)。 「集中于『黄面志』(The Yellow Book)的人物」(評論)一九二三年九月二十五日、1923年9月23、30日『创造周报』第二十、二十一期に発表。</p>	
--------------------------	--	---	--

1924	28歳	<p>2月28日、『創造季刊』第2巻第2期発行、これをもって停刊。          春、妻子を北京に来させる。          5月、語糸社の非難を受ける。中旬、再び北京に戻る。</p>	<p>「薄奠」(小説)一九二四年八月十四日作于北京、1924年12月5日『太平洋』第四巻第九号に発表。          「秋柳」(小説) (「秋柳」は「茫茫夜」の続編、1922年7月に東京で作、「风铃」の後の二三日)一九二二年七月初稿一九二四年十月改作、1924年12月14、16、24日『晨报副镌』に発表。          「十一月初三」(小説)一九二四年的誕生日作于北京、1924年12月13日—1925年1月3日『现代评论』週刊第一、二、三、四期に発表。          「零余者」(隨筆) (最初発表の時、題題名は「零余者的自觉」、『达夫全集』第一巻「寒灰集」に収録した時、「零余者」に変わった。(大正)十三年正月十五日、1924年6月15日北京『太平洋』第四巻第七号に発表。          「一封信」(隨筆) 1924年1月25日『东方杂志』半月刊第二十一巻第二号に発表。          「北国的微音」(隨筆) (最初発表の時、副名「寄给沫若和仿吾」がある)一九二三年(作品内容から作時間は1924年で判断できる)、三月七日午前三時、1924年3月28日『创造日报』第四十六号に発表。          「读上海一百三十一号的「文学」而作」(散文)七月二十五日午前4時、1924年7月29日北京『晨报副镌』に発表。          「给沫若」(隨筆) (最初発表の時、題題名は「给沫若的旧信」、『达夫全集』第三巻「过去集」に収録した時、「给沫若」に変わった)一九二四年七月二十九日北京。1926年3月16日『创造月刊』第一巻第一期に発表。          「小春天气」(隨筆) (大正)十三年旧历十月初七日、1924年11月11日—14日『晨报副镌』に発表。          「给一位文学青年的公开状」(隨筆)一九二四年十一月十三日午前二時、『达夫全集』第一巻「寒灰集」に発表。          「介绍一个文学的公式」(評論)一九二四年五月在W城讲、湘君记。1925年9月10日『晨报副镌·艺林旬刊』第十五号和同年9月11日『晨报副镌』に発表。          「读了瑯生的译诗而论及于翻译」(評論)十三年六月二十二日、1924年6月29日『晨报副镌』に発表。          「我承认是“失败了”」(評論)十三年十二月二十三日、1924年12月26日『晨报副镌』に発表。</p>	<p>1月、中国国民党第一次全国大会。第一次国共合作成立。</p>
1925	29歳	<p>1月、武昌師範大学文科教授として北京を離れる。          10月、大学の事情により、一時北京に行き二週間を過ごす。その後、また武昌に赴任したが間もなく辞職し上海へ去る。          10月31日、『呪甲寅十四号の評新文学運動』が『现代評論』第二巻第四十七期に発表され、魯迅が章士釗を批判する闘争に附和する。</p>	<p>「骸骨迷恋者的独语」(隨筆) (大正)十四年一月在北京、1928年2月『达夫全集』第四巻「奇零集」に発表。          「送仿吾的行」(隨筆)一九二五年五月在武昌、1925年6月6日『现代评论』週刊第一巻第二十六期に発表。          「新建叙伦堂记」(隨筆) 时中华民国十四年岁次乙丑仲冬月。乙丑年(1925年)統修『富春惠爱孙氏宗谱』に収録され、乙丑晚秋郁達夫記、中華民國十四年歲次乙丑仲冬月。          「咒「甲寅」十四号の評新文学运动」(評論)九月二十三日、1925年10月31日『现代评论』第二巻第四十七期に発表。          「诗论」(評論)本文中の「诗的意义」と「诗的内容」は1925年5月20日と30日『晨报副镌·艺林旬刊』第五、六期に発表、1926年6月は「诗的外形」と一緒に『文艺论集』に収録され、『敝帚集』に収録された時、三篇を合并して「诗论」を名付け。部分的に1925年5月20日和30日『晨报副镌·艺林旬刊』第五、六期に発表。          「戏剧论」(評論)第一章「戏剧之一般概念」は「戏剧的一般概念」を名付け部分的に1925年10月30日武昌大学『艺林』半月刊第十九期に発表。</p>	<p>3月、孫文、北京で死去。          5月、5・30排外運動起こる。          広東国民政府成立</p>

<p>1926</p> <p>30歳</p>	<p>2月、上海にあって再び創造社の活動に参加。  3月18日、南方革命に憧れて、郭沫若、王独清と共に広州中山大学の文科教授に赴任。  6月初、息子の龍児が北京で病気がひどくなり、北京に行く。  6月19日、北京に到着したが、龍児は14日に亡くなり、苦痛は止まらない。  10月、広州に帰任。  11月、中山大学の職を辞す。  12月15日、広州より乗船上海行き、郊外の上海芸術大学構内に住む。</p>	<p>「寒宵」（小説）（本篇は「街灯」と一緒に『创造月刊』に発表の時、題題名は「寒灯」）（大正）十四年五月十七日武昌、1926年3月16日『创造月刊』第一卷第一期に発表。  「街灯」（小説）（大正）十四年五月十九日武昌、1926年3月16日『创造月刊』第一卷第一期に発表。  「烟影」（小説）一九二六年三月十六日、1926年4月25日『东方杂志』半月刊第二十三卷第八号に発表。  「南行杂记」（随筆）（大正）十五年四月十二日、1926年5月16日『创造月刊』第一卷第三期に発表。  「一个人在途上」（随筆）一九二六年十月五日在上海旅館内、1926年7月1日『创造月刊』第一卷第五期（此期行期出版）に発表。  『小说论』（評論）一九二五年十一月、武昌師範大学離職後、“在上海杭州流轉的中间”、以“四天功夫写成的”、1926年1月上海光华書局で出版。  「卷头语」（評論）一九二六、二月二十一日、达夫。1926年3月16日『创造月刊』第一卷第一期に発表。  「尾声」（評論）一九二六、二月二十二日达夫记、1926年3月16日『创造月刊』第一卷第一期に発表。  「『小说论』及其他」（評論）一九二六年三月一日上海、1926年3月16日『洪水』第二卷第十三期に発表。  「郭沫若『瓶』附记」（評論）三月十日达夫附记、1926年4月16日『创造月刊』第一卷第二期に発表。  「历史小说论」（評論）十五年三月十一、1926年4月16日『创造月刊』第一卷第二期に発表。  「編輯者言」（評論）十五年三月十二日达夫編后志、1926年4月16日『创造月刊』第一卷第二期に発表。  「『文艺论集』自序」（評論）『文艺论集』、1926年6月上海光华書局版に発表。  「全集自序」（評論）「达夫全集」は作者生前自分で編集した、一九二七年六月至一九三三年八月、七卷を出版した。第一卷『寒灰集』、第二卷『鸡肋集』、上海創造社出版部で出版；第三卷『过去集』、第四卷『奇零集』、上海開明書店で出版；第五卷『敵帚集』上海現代書局で出版；第六卷『薇蕨集』、第七卷『断殘集』上海北新書局で出版、一九三三年八月の前の大部分作品を収録され。本文は1926年7月に『创造月刊』第一卷第五期に発表した時、題題名は「&lt;达夫全集&gt;自序」である；『寒灰集』に収録された時に、目錄の中には「全集自序」が、本の中には「自序」という。一九二六年六月十四日旧端午節序于上海的一家小旅館内、1926年7月『创造月刊』第一卷第五期に発表。  「兰生弟的日记」（評論）「兰生弟的日记」は徐祖正の小説、長い手紙の形式を作した日記体小説。本文はその序文である。1926年8月28日『现代评论』第四卷第九十期に発表した時に、題題名は「读&lt;兰生弟的日记&gt;」；『奇零集』に収録された時に「兰生弟的日记」と変わった。十五年七月二十七日、1926年8月28日「现代评论」第四卷第九十期に発表。  「『手套』附志」（評論）1926年9月4日「现代评论」第四卷第九十一期に発表。  「非編輯者言」（評論）一九二六年十月八日达夫记于上海、1926年7月1日『创造月刊』第一卷第五期に発表。</p>	<p>蒋介石、北伐開始</p>
------------------------	---	---	-----------------



1927	<p>31歳</p> <p>1月14日、王映霞と出会い、彼女を求め始めた。 4月8日、「方向転換の途中」を著し、蒋介石独裁の高圧政策を批判した。同日は『「鴨緑江上」の読後感』も著し、蒋光慈の小説を肯定し、「烈風豪雨のような荒々しさと偉大さ、力強さ、感動的な文学」と呼びかけた。 4月11日、「公开状答日本山口君」を著した。 4月12日、蒋介石が「四・一二」政変を起す。郁達夫「午後は友達を訪問し、蒋介石の高圧政策に言及したら、みんなが怒るだけで、あえて言わない。」 5月10日、ある宴会で国民党当局が、彼に「党の仕事を手伝ってくれ」ということでの「交換条件」として、「創造社の不封を保証する」ことがあって、彼は病気に託して断った。 5月23日、ある人は郁達夫を誘って「委員をしないか」と、断固拒絶した。 5月28日、病気を口実に杭州に身を隠す。 5月29日、国民党当局は創造社出版部に捜査に行き、従業員数人を逮捕し、郁達夫の杭州の住所を調べた。 6月5日、王映霞と婚約した。 7月31日、成仿吾は上海に到着した。郁は「創造社出版部の事務をすべて差し出す」「これからは手を離す」。 8月15日、上海で「申告」と「民国日報」に掲載され、創造社を脱退することを表明した。文芸論著『文学概説』は上海商務印務館から出版され、百科文庫の第137種とする。 9月3日、「農民文芸の提唱」を書く、文芸は「最大多数、最優を占め」の農民階級を表現すべき、「農民の生活、農民の感情、農民の苦痛」を描写するべきとする。 10月5日、北新書局の李小峰が魯迅を招いた宴会に参加し、魯迅と再会した。 10月6日、宴席を設けて魯迅を歓迎した。その後、魯迅とさらに親友・戦友になる。</p>	<p>「過去」（小説）一九二七年一月十日在上海、1927年2月1日『創造月刊』第1巻第6期に発表。 「清冷の午后」（小説）一九二七年一月十八日在上海、1927年2月1日『洪水』半月刊第三巻第二十六期に発表。 「微雪の早晨」（小説）（最初は『教育杂志』に発表した時に題題名は『考试』、1928年『达夫全集』第四巻「奇零集」に収録した時、名を「考试前后」に変わった、同時に『达夫代表作』に収録した時、「微雪の早晨」に変わった。）一九二七年七月十六日、1927年7月20日『教育杂志』月刊第19巻第7号「教育文艺」欄に発表。 「祈愿」（小説）一九二七年八月十三日、『达夫全集』第三巻「過去集」で収録された。 「迷羊」（小説）（未完）一九二七年十二月二十九日达夫志、1927年11月—1928年1月1日『北新半月刊』第二巻第一から第五号に発表。 「打听诗人的消息」（隨筆）一九二七年二月二十日、1927年2月16日『洪水』半月刊第三巻第二十七期に発表。 「关于编辑、介绍以及私事等等」（評論）一九二七年一月十日、1927年2月1日『創造月刊』第一巻第六期に発表。 「编辑后」（評論）1927年1月16日「洪水」第三巻第五十二期に発表。 「无产阶级专政和无产阶级的文学」（評論）一月十七日、1927年2月1日「洪水」半月刊第三巻第二十六期に発表。 「「鴨緑江上」読後感」（評論）一九二七年四月八日、1927年3月16日「洪水」半月刊第三巻第二十九期に発表。 「公开状答日本山口君」（評論）一九二七年四月十一日在上海、1927年4月1日「洪水」半月刊第三巻第三十期に発表。</p>	
1928	<p>32歳</p> <p>1月16日、『北新半月刊』第二巻第六号に「ルーツ伝」を発表し、魯迅と梁実秋の論戦に協力した。同月、王映霞と結婚した。結婚後嘉禾里の一四三号を借りて住み、その後一四四号に住む。 2月16日、「北新半月刊」第二巻第八号に「翻訳説明就答算答弁」を発表し、さらに梁実秋と議論した。同月、錢杏村に紹介され、太陽社に秘密加入した。 8月16日、『北新半月刊』第二巻第十九号に『社会に対する態度』を発表し、自分が創造社を離れた原因を詳しく説明し、創造社作家魯迅を批評攻撃した。</p>	<p>「二诗人」（小説）（最初は『小説月報』に発表した時、「二诗人」と「滴鸾声中」两部分しかない、「到街头」は『北新半月刊』に発表、『达夫全集』第六巻「薇蕨集」に収録した時、前の两部分合并し、題題名は「二诗人」になった）一九二八年三月五日、1927年12月10日『小説月報』第18巻第12号と1928年4月1日『北新半月刊』第二巻第十号に発表。 「逃走」（小説）（初発表した時、題題名は「孟兰盆会」收入『达夫全集』第六巻「薇蕨集」時、改題題名は「逃走」）一九二八年九月作、1928年9月20日『大众文艺』月刊第一期に発表。 「在寒风里」（小説）一九二九年一月作、1928年12月20日『大众文艺』月刊第四期に発表。 「灯蛾埋葬之夜」（隨筆）一九二八年八月作、1928年9月20日『奔流』月刊第一巻第四期に発表。 「故事」（隨筆）一九二八年十月作、1928年11月15日『白华』第一巻第二期に発表。</p>	<p>蒋介石、国民政府主席 就任</p>

1929	33歳	7月、魯迅と北新書局の印税紛争の調停人なり、魯迅と林語堂の衝突の和事者となる。 10月6日、安徽省教育庁長の程天放が郁達夫を「墮落文人」と攻撃し、「赤化分子」リストに入れる、郁達夫は自分に迫害を加えるつもりであることを知り、すぐに船に乗って上海に帰る。	「马蜂的毒刺」（随筆）一九二九年四月作、1929年1月20日『大众文艺』月刊第五期に発表。	内戦頻発
1930	34歳	2月10日、杭州に行き、富陽に一時滞在する。 2月13日、中国自由運動大同盟が上海で設立され、発起人となる。 3月2日、中国左翼作家連盟が上海で設立され、魯迅から発起人の一人に指名される。 11月に「左聯」の担当者に手紙を送り、「左聯」の会議には頻繁に参加できないと表明。その結果、「左聯」を除名される。	「纸币的跳跃」（小説）（「烟影」の続編）一九三〇年七月、1930年6月6日『北新半月刊』第四卷第十二号に発表。 「没落」（断片）（小説）（未完）1930年6月14日上海『草野』週刊第2卷第11期「中国现代名家作品专号」（上）と同年6月21日第2卷第12期同一专号（下）に発表。 「杨梅烧酒」（小説）一九三〇年八月作、1930年7月1日『北新半月刊』第四卷第十三号に発表。 「十三夜」（小説）一九三〇年十月一日、1930年10月1日『北新半月刊』第四卷第17号に発表。	中国左翼作家連盟結成
1931	35歳	1月17日、李初梨が上海東方旅社で党の会議に参加した時に逮捕され、郁は積極的に助ける。 12月19日、周建人、胡越之らが集議組織した上海文化界の反帝抗日大連立大会に参加した。	「蜃楼」（小説）（未完稿である、集に収録したこと単独出版したことはない、中の第1章から第4章、第4章の最後の一節除いて、1926年6月『创造月刊』第四期に発表したことがある）1931年3月至5月『青年界』第一卷第一期から第三期に発表。 「志摩在回忆里」（随筆）一九三一年十二月十一日（附記 一九三一年十二月十九日）、1932年1月1日『新月』第四卷第一期“志摩纪念号”に発表。	
1932	36歳	1月1日、「新月」第四卷第一期に徐志摩を悼む文章「志摩在回忆里」を発表した。 1月7日、暨南大学で「文学漫談」をテーマとして講演を行い、青年学生に「文学を使って宣伝し、わが国の大衆を喚起し、彼らを起こして帝国主義に反抗させよう」と呼びかけた。 2月4日、魯迅、茅盾らと共同で「上海文化界が世界に訴える書」を発表し、帝国主義が「一二八戦争」を發動することを非難した。 2月8日、戈公振、陳望道らが中国の著作家抗日会を組織し、編集委員と国際宣伝委員会委員を担当した。 4月20日、中編小説「彼女は弱い女だ」が上海湖風書局から出版。ほどなく国民党に拘束された。 7月5日、「芸芸論の種々」を著し、「文学は大衆化しなければならない」と強調した。 7月10日、文化界人集会を開催し、柳亜子、茅盾ら32人と連名で南京国民党当局に連絡、環太平洋産業同盟秘書の牛蘭夫婦の釈放を要求した。9月に林語堂が編集した「論語」が創刊され、特約寄稿者として雇われた。創刊号で随筆「釣台の春昼」を発表し、蒋介石の「中央党帝」の暴行を訴えた。	「她是一个弱女子」（小説）一九三二年三月达夫记、1932年4月20日上海湖風書局に発表。 「马缨花开的时候」（小説）一九三二年六月、1932年8月1日『现代』月刊第一卷第四期に発表。 「东梓关」（小説）（「烟影」兩篇の続篇）一九三二年九月、1932年11月1日「现代」月刊第二卷第一期に発表。 「迟桂花」（小説）一九三二年十月在杭州写、1932年12月1日「现代」月刊第二卷第二期に発表。 「碧浪湖的秋夜」（小説）一九三二年十月在杭州写、1933年1月1日『东方杂志』月刊第三十卷第一号に発表。 「瓢儿和尚」（小説）一九三二年十二月、1933年1月10日「新中华」月刊创刊号に発表。 「沪战中的生活」（随筆）一九三二年五月、1932年4月1日『读书杂志』月刊第二卷第四期に発表。	1月、上海事変勃発。 3月、1日「満州国」成立。9日清朝廢帝溥儀執政に就任。 日本の傀儡国家。 文学大衆化運動起こる。

1933	37歳 1月、宋慶齡、蔡元培、楊杏佛らがリーダーをしている中国民権保障同盟に加入。同月、「小林の被害激日本警視庁のため」を著し、日本のファシズム当局が日本の無産階級（プロレタリア）作家小林多喜二を殺害した野蛮な行為に抗議した。 4月3日、民権保障同盟全国執行委員会と上海分会の連席会議に出席し、中共党員の廖承志、羅登賢らの救出を検討した。 春、宋慶齡が開いた民権保障同盟の会議に参加し、スメドレー(Agnes Smedley)に、「私は一人の戦士ではなく、一人の作家です。」と話した。 5月15日、筆頭著者として「横死の小林遺族のために募金の趣意書」を発表した。 5月23日、蔡元培、楊杏佛らと連合し南京国民党政府に連絡して、作家丁玲と潘梓年の逮捕に抗議した。 8月16日、「中国作家歓迎バルビュス代表団の掲示」に署名した。遠東反戦会に参加する外国代表団を歓迎する。 12月30日、魯迅は王映霞のため詩幅「阻郁达夫移家杭州」を書く。	「返暮」（小説）一九三三年五月二十日、1933年7月1日「文学」月刊创刊号に発表。 「光慈的晩年」（随筆）一九三三年三月二十五日、1933年5月1日『現代』月刊第四卷第四、五期合刊に発表。 「移家琐记」（随筆）1933年5月4日至6日『申报·自由谈』に発表。 「暗夜」（随筆）1933年6月7日『申报·自由谈』に発表。 「杂谈七月」（随筆）1933年8月27日『申报·自由谈』に発表。 「杭州的八月」（随筆）1933年9月27日『申报·自由谈』に発表。 「二十二年旅行」（随筆）一九三三年十二月、1934年1月1日『十日谈』旬刊「新年特辑」に発表。	
1934	38歳 5月1日、雑誌『春光』が発起した「中国はなぜ偉大な作品が生まれなかったのか」という討論に文章を書いて参加し、魯迅の『阿Q正伝』と茅盾の『子夜』はいずれも偉大な作品だと述べる。 9月、陳望道が編集する「太白」半月刊が創刊され、編集委員を務めた。 12月5日から『人間世』に自伝（一）から（八）までを発表した	「婿乡年节」（随筆）1934年3月3日「人言」周刊第一卷第三期に発表。 「北航短信」（随筆）一九三四年七月十三日、在青岛。1934年7月19日杭州『东南日报·沙发』第2033期に発表。 「故都的秋」（随筆）一九三四年八月、在北平。1934年9月1日天津『当代文学』月刊第一卷第三期に発表。 「祝赵母王太夫人的寿」（随筆）一九三四年十二月十日、1934年12月11日杭州『东南日报·沙发』に発表。 「两浙漫游后记」（随筆）一九三四年十二月、1935年1月5日『太白』半月刊第一卷第八期に発表。	中国共産党軍、大西遷（長征）開始

1935	39歳	<p>3月18日、目加田誠と小川環樹が自宅を訪問。 5月20日、一子耀春、病死。 7月、杭州の官場弄般若堂の辺の土地を買って、「風雨茅芦」を建設することを始める。 10月、「達夫短編小説集」（上、下）を上海北新書局から出版。 12月1日、増井経夫婦が訪問。</p>	<p>「唯命论者」（小説）一九三五年二月、1935年3月15日「新小説」月刊第一卷第二期に発表。 「出奔」（小説）1935年11月1日「文学」月刊第5巻第5号に発表。 「雕刻家刘开渠」（随筆）一九三五年一月廿四日、1935年4月1日『漫画漫话』創刊号に発表。 「寂寞的春朝」（随筆）一九三五年二月四日、1935年2月6日杭州『东南日报·沙发』第2229期に発表。 「追怀洪雪帆先生」（随筆）一九三五年二月四日、1935年3月1日『现代』月刊第六卷第二期に発表。 「春愁」（随筆）一九三五年二月十五日、1935年3月5日『文饭小品』半月刊第二期に発表。 「惜掌之歌」（随筆）三月十七日、1935年3月20日杭州『东南日报·沙发』第2270期に発表。 「记耀春之殇」（随筆）（最初発表した時、題名は「记耀春」。『达夫散文集』に収録した時、「记耀春之殇」に変わった）一九三五年五月念（廿）二日、1935年5月25日杭州『东南日报·沙发』第2335期に発表。 「上海的茶楼」（随筆）1935年12月『良友』第112期に発表。 「住所的话」（随筆）1935年7月1日『文学』月刊第五卷第一号に発表。 「送王余杞去黄山」（随筆）（民国）二十四年九月、1935年9月21日杭州『东南日报·沙发』第2453期に発表。 「记曾孟朴先生」（随筆）1935年10月16日杭州『越风』半月刊第一期に発表。 「雨」（随筆）1935年10月27日『立报·言林』に発表。 「王二南先生传」（随筆）1935年11月16日、12月2日杭州『越风』半月刊第三、第四期に発表。</p>	
1936	40歳	<p>2月2日、福建省政府主席陳儀の招きに応じて、福建省に行く。 2月7日、福建省政府参議に任命される。 6月12日、福建省政府公報室主任に任命される。 9月25日、福州路致中学で「国防統一戦線下の文学」を講演し、「国防文学」と「民族革命戦争の大衆文学」の二つのスローガンについて自分の見方を語った。 10月19日、魯迅が亡くなった。連夜許広平に連絡する。 10月20日、上海に行く船で《魯迅の死に対する感想》を書く、「魯迅は死んだが、彼の精神は中華民族と一緒に永遠にいるべき。」 10月22日、魯迅の遺容を仰ぎ見る、葬儀に参加。 10月24日、随筆「懷魯迅」を書いた。 11月13日、福建省政府のため印刷機を購入することと日本の文芸界から講演に招待されたことを口実に、来日し、郭沫若と一緒に帰国、抗戦することを誘い。日本に到着数日後、郭沫若と一緒に日本改造社の歓迎会に出席し、「大魯迅全集」の翻訳と出版について討論した。 11月29日と12月6日に郭沫若を二回訪問した。</p>	<p>「玉皇山」（随筆）（民国）廿四年十一月、1936年1月『文学时代』第一卷第三期に発表。 「怀四十岁的志摩」（随筆）1936年1月1日『宇宙风』半月刊第八期に発表。 「江南的东景」（随筆）一九三五年十二月一日、1936年1月1日『文学』月刊第六卷第一号に発表。 「记风雨茅芦」（随筆）一九三六年一月十日、1936年2月15日杭州『黄钟』第八卷第一期に発表。 「浙江的今古」（随筆）1936年1月16日杭州『越风』半月刊第六期に発表。 「记闽中的风雅」（随筆）一九三六年三月末日、1936年4月1日『立报·言林』に発表。 「记富阳周芸皋先生」（随筆）1936年5月『越风』半月刊第十三期に発表。 「北平的四季」（随筆）一九三六年五月廿七日、1936年7月1日『宇宙风』半月刊第二十期に発表。 「饮食男女在福州」（随筆）一九三六年六月二日、1936年7月『逸经』半月刊第九期に発表。 「日本的文化生活」（随筆）一九三六年八月在福州、1936年9月16日『宇宙风』半月刊第二十五期に発表。 「怀鲁迅」（随筆）一九三六年十月二十四日在上海、1936年11月1日『文学』月刊第七卷第五期に発表。</p>	

1937	<p>41歳</p> <p>1月3日厦門から離れる。厦門での滞在期間中、厦門大学の学生は厦門国民党当局に南普陀を経た大通りの名前を「魯迅路」と改名することを要求した、魯迅を記念するため、郁は彼らを支持したが、結果なし。</p> <p>3月1日、日本の改造社が出版した『大魯迅全集』のため、『魯迅の偉大』の一文を書き、「改造」第19巻第3号に発表された。</p> <p>5月18日、郭沫若に連絡、国民党当局の意見を伝え、帰国することを願う。</p> <p>7月27日、郭沫若は日本から上海に帰り、抗戦に参加した。郁達夫はわざわざ上海に迎えに行った。</p> <p>10月20日、「小民報・怒吼」に『魯迅先生の逝世一周年』を発表。「魯迅先生を記念する一番いい方法は先生の遺志を絶やさず、帝国主義侵略者と暗黒勢力と奮闘することにあると思います。」</p>	<p>「里西湖的一角落」（随筆）一九三七年三月四日在福州、1937年『越風』増刊第一集「西湖」に発表。</p> <p>「福州的西湖」（随筆）一九三七年七月、在福州、刊1938年7月1日广州『宇宙風』第七十期に発表。</p> <p>「全面抗战的线后」（随筆）1937年9月福州『閩政与公余』旬刊第一号—第三号に発表。</p> <p>「魯迅先生逝世一周年」（随筆）（民国）廿六年十月十九日、1937年10月20日福州『小民報・怒吼』に発表。</p>	7月、日中戦争始まる。 第二次国共合作
1938	<p>42歳</p> <p>1月初、母の陸氏が昨年12月31日に餓死したという悲報を聞いた。</p> <p>3月9日、郭沫若の招待に応じて、武漢に行って軍委員会政治部第三庁少将設計委員を任職した。</p> <p>3月27日、武漢で中華全国文芸界抗敵協会設立大会に参加し、理事に選ばれた。</p> <p>5月9日、『日本の娼婦と文士』を書いた、日本軍閥の味方佐藤春夫を痛烈に非難した。</p> <p>5月14日、文芸界の人士の『給周作人的一封公开信（周作人にあげる1通の公開の手紙）』に署名した、周作人は民族の罪人に墮落しないよう、厳粛に告げる。</p> <p>8月1日、戴望舒が編集した香港の「星島日報・星座」創刊号に「抗戦周年」を発表し、抗戦必勝をアピールした。</p> <p>12月18日、偕王映霞と長男郁飛は福州を離れて、シンガポールに行った。</p>	<p>「平汉陇海津浦的一带」（随筆）「五四」記念日、1938年5月漢口『抗战文艺』第一卷第二期に発表。</p> <p>「黄河南岸」（随筆）1938年7月1日『烽火』第十七期に発表。</p> <p>「回忆魯迅」（随筆）1938年香港『星島周刊』第一期で最初の一部分を発表、停刊のため中止。1939年3月—9月に上海『宇宙風乙刊』創刊号、第九期、第十一期と第十二期で連載。同年6月—8月再びシンガポール『星洲日報半月刊』第二十三期、第二十五期と第二十七期連載、内容は正文の第七部分から始め、終わりまで、『宇宙風乙刊』の連載と比べると第八から十二部分を増やした。</p> <p>「必勝的信念」（随筆）（最初発表の時、題名は「岁朝新語」、同月十三日シンガポール『星洲日報・繁星』で「必勝的信念」に変わった）—一九三八年十二月廿三日在惊涛骇浪中写、1939年1月1日香港『星島日報・星座』第154期に発表。</p>	

1939	43歳	<p>1月1日、マレーシアのペナン島に行って「星洲日報」の創立式典に参加した。同日、「星洲日報」に政論估敵（敵を見積もる）』を發表し、敵の動きと虚弱さの本質について透徹な分析を行った。</p> <p>1月9日、「星洲日報」の朝刊「晨星」と夕刊の「繁星」の副刊の主編になる。</p> <p>1月15日、「星洲日報週刊」と「文芸」の副刊の主編になり。</p> <p>1月21日、「星洲日報・晨星」で『几个問題』（いくつかの問題）を發表し、星馬文化界の論戦を引き起こした。</p> <p>2月5日、「星洲日報」の「文芸」週刊誌の主編になる。</p> <p>2月9日、「星洲日報・繁星」に「滿江紅—福州于山威武毅公祠新修落成作用岳武穆公原韻」を發表し、祖国防衛の豪情を述べた。</p> <p>3月22日、「星洲日報・晨星」に「雑談近事・捐助文協的事情（雑談近事・寄付文協の件）」を發表し、晨星の投稿者たちに原稿料の一部または全部を「文協」に寄付するよう呼びかけた。</p> <p>11月23日、長兄の郁曼陀が上海で日偽スパイに暗殺された。</p>	<p>「一二八」的当时」（隨筆）1939年1月30日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「与悲鴻的再遇」（隨筆）1939年3月2日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「在警報声里」（隨筆）1939年4月重慶『抗战文艺』第四卷第二期に發表。</p> <p>「记广怡法师」（隨筆）1939年5月20日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「欧洲人的生命力」（隨筆）1939年7月1日シンガポール『总汇新报・世纪风』に發表。</p> <p>「再见王莹」（隨筆）十月一日、1939年10月2日シンガポール『星洲日報・本坡新闻』に發表。</p> <p>「鲁迅逝世三周年纪念」（隨筆）1939年10月15日シンガポール『星洲日報星期日・文艺』に發表。</p> <p>「诗人的穷困」（隨筆）1939年12月27日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p>	蒋介石、軍政兩權を握る
1940	44歳	<p>2月、王映霞と協議離婚。</p> <p>3月24日、上海弁護士公会で盛大な追悼会が行われ、郁達夫遠くから挽聯を送った。</p> <p>4月7日、「星洲日報週刊」の「教育」を編集し始める。</p> <p>4月19日、「星洲日報・晨星」に林語堂への手紙「嘉陵江上伝書」を發表し、林語堂との真摯な友情と国民党権力に対する不満を表現した。</p> <p>7月上旬、「星洲日報」の主筆である関楚瑛が辞任して帰国し、郁達夫が主筆に代わって3カ月余り、社説を書く責任を負う。</p> <p>7月から8月にかけて、足病のため青年詩人馮蕉衣に「晨星」の主編を依頼した。</p> <p>秋、シンガポール英政府情報部の中国人職員、李筱瑛と知り合う。</p> <p>10月11日、武吉智馬青山亭で行われた青年詩人馮蕉衣の葬儀に参加した。</p> <p>10月17日、「星洲日報・晨星」で『記念詩人馮蕉衣（詩人馮蕉衣を記念する）』という特集が掲載された。</p>	<p>「悼胞兄曼陀」（隨筆）1940年2月21日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「印人张斯仁先生」（隨筆）1940年4月1日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「“文人”」（隨筆）一九四〇廿四月、1940年4月19日『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「悼诗人冯蕉衣」（隨筆）1940年10月17日シンガポール「星洲日報・纪念诗人冯蕉衣特辑」に發表。</p>	

1941	45歳	<p>2月23日、星華籌賑会主催の劉海粟展の開幕式に出席した。</p> <p>3月14日、首席は「星華芸工作者致僑胞書」を發表して、国民党の当局が皖南事変を發動することに抗議して、団結して抗日することを要求した。</p> <p>4月から、英政府情報部が出版した「華僑週報」を主編した。</p> <p>5月9日、「星洲日報・晨星」に青年作者の温梓川の短編小説集「美麗的谎（美しい嘘）」を紹介した。</p> <p>8月、林語堂の「瞬息京華」を翻訳し、「華僑週報」に連載を開始し、三、四ヶ月後に中止した。</p> <p>12月27日、陳嘉庚指導のシンガポール華僑抗敵委員会成立大会に出席し、執行委員に選ばれ、文芸株主任を兼任した。</p>	<p>「紫罗兰女士速写像题记」（隨筆）1941年1月11日『星洲日報』本坡版に發表。</p> <p>「劉海粟教授」（隨筆）1941年2月22日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「看京戏的回忆」（隨筆）1941年5月31日シンガポール『南洋商報』に發表。</p> <p>「郭外长经星小叙记」（隨筆）1941年7月11日シンガポール「星洲日報・本坡要聞」に發表。</p> <p>「为郭沫若氏祝五十诞辰」（隨筆）1941年10月24日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「印光法師塑像小记」（隨筆）1941年10月27日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「为郭沫若氏祝五十诞辰事」（隨筆）1941年11月7日シンガポール『星洲日報・晨星』に發表。</p> <p>「敬悼许地山先生」（隨筆）1941年11月8日香港『星島日報・星座』に發表。</p>	
1942	46歳	<p>1月6日、星華文化界抗敵連合会設立大会に出席し、主席に選ばれた。</p> <p>2月4日、日本軍がシンガポールを侵攻し始め、国民党政府がシンガポール領事館で帰国パスポートの発給を拒否したため、胡愈之、王任叔らと海を渡ってオランダ領の小島—巴美吉里汶に撤退した。</p> <p>2月6日にオランダの小島の荷属別の小島石叻班讓転属した。</p> <p>2月9日に望嘉麗に移転した。</p> <p>2月16日、望嘉麗の対岸の保東村に移転して、ひげを蓄え始め、インドネシア語を学び、長期にわたり隠れる。『乱離雜詩』を書き始める。</p> <p>3月初め、王紀元と保東村近くの彭鶴嶺に移り、雜貨店を開設し、名前は趙德清と改名し、店主を務る。</p> <p>4月中旬、船でスマトラ島西部に行く。</p> <p>5月初め、スマトラ島西部高原小市鎮巴爺公務に到着し、富商として現れ、広東華僑が開設した海天旅館に泊まり、後に小さな洋館を借りる。</p> <p>5月末に、巴爺公務の華僑長の所で、日本語に精通していることを暴露。</p> <p>6月初め、武吉丁宜に行かされ、日本憲兵分隊に通訳を担当した。</p> <p>9月に趙豫記酒場を開設して、任頭家（オーナー）となる。</p>		

1943	47歳	2月、肺病を装って憲兵分隊の通訳をやめ、巴爺公務に戻って酒場を主宰し、やがて製紙工場と小型石鹼工場を設立する。 9月15日、華僑の娘何麗と巴東で結婚した。その後子大雅、女美蘭。		
1944	48歳	2月、漢奸洪根培などに密告され、真実の身分が日本の憲兵によって発見された。胡愈之、沈茲九と張楚琨らは直ちに移転しなければならないと主張した。本年は、巴爺公務公道で、漢奸の洪根培という者に二つのびんたを打った。		
1945	49歳	2月、遺言を書いた。 8月16日、ラジオから日本が無条件降伏したと聞いて、嬉しくて、手紙を書いて綿蘭の胡愈之などに知らせて勝利の到来を迎える準備を始め、現地の華僑組織を招集して連合軍準備委員会を歓迎した。 8月29日 (1) インドネシア人による拉致、殺害 (2) 華僑仲間による本国秘密送還 (3) 日本憲兵に拉致されるのを恐れた自発的失踪 (4) 日本憲兵による殺害 などの推測がある。 学者鈴木正夫によると、郁達夫は日本憲兵によって殺害。		日本無条件降伏、日中戦争終わる。国共内戦始まる。
1946				
1947				
1948				
1949				1月、蒋介石、総統辞任。人民軍北平入城。 4月、国共和平交渉。共産党、国民党に無条件降伏を迫る。蒋介石これを拒否。人民軍進撃。南京陥落。 5月、上海占領。 10月、中華人民共和国成立。 12月、国民党、台湾に逃亡。



## 付記

郁達夫（1896—1945）、名は文、幼名は蔭生、達夫は字。父郁企曾（字士賢）、母陸氏。

郁達夫の曾祖父郁品三（字宝珍）と祖父郁聖山（字仰高）は、当時この町で有名な漢方医師で、郁達夫の父郁企曾（字士賢）も兼職漢方医でした。

郁達夫は自伝の『一』「悲劇的出生」の中で、彼の家は「小さな町に住んでいる、代々の読書人の家柄、洪楊（太平天国）の後、一度も出世したことがない没落な郷紳一家でした。」、「小さな町の中産の家」とも書いた。

郁風（姪）や郁雲（息子）によれば、郁家は代々教師と医師とを兼ねていたらしく、郁達夫の父も塾の教師をするかたわち医療に当たり、また後には行政書士や税理士のような仕事をしていた。

郁達夫の母はかつて言った「祖先は宋の皇帝の医者です、大官でした。皇帝は郁家の子孫は絶対名医が出ると言いました。」しかし郁聖山は早々に死亡、洪楊の後の時期で、郁企曾は幼年で父を亡くして、医道はその私塾の教師をした、その父の名気に及ばないので、家の暮らし向きも悪くなった。郁企曾若い時には、私塾の教師をして、その後、富陽県役所で司事という仕事手に入れた。この家の収入は主に三つところから、郁企曾の給料（兼職も加えて）、祖先が残した一冊半の「荘書」（土地を測量、土地売買）の収入、祖先が残した十余ムーの畑、自家では六ムーの穀物を植えて、農繁期だけ人を雇う。残り半分ぐらいは土地がやせているので貸したがしたが収入は少ない。だが郁企曾は37歳で死んだ、その後は貧乏の家になった。

母陸氏については、郁興民（甥）の手紙に「陸家県の人」とあるほかは名前も分かっていない。夫と死別した後、他家の縫物や洗濯をして子供を育つ。

長兄郁華（1884-1939）は成績優秀で、1905 日本に留学。1908 年 7 月早稲田大学清国留学生部教育及び歴史地理学科を卒業、引き続き法政大学専門部法律科に入学、1910 年 7 月卒業。後は帰国して、8 月北京で留学生を対象とした官吏採用試験を受験し、中等の成績で合格、七品小京官となり、外務部に勤務する。1912 年 5 月京師高等審判庁の推事に任命され、1913 年 6 月、司法制度視察のため日本に派遣されることになり、妻陳蔭と郁達夫を連れて一緒に 9 月東京到着。

郁達夫は中国文学史上最初に、自分の全集を編集する現代作家である。生前は七巻本「达夫全集」（1927—1933 年間）と近十万字の「达夫自选集」（1933 年）、1935 年後、また分類して「达夫日记集」、「达夫短篇小说集」、「达夫游记」、「达夫散文集」などを出版した。

20 世紀 80 年代以後、三聯書店香港分店、花城出版社は 1982—1984 年間 12 巻「郁达夫文集」を出版した、1981 年後、浙江文芸出版社は、郁達夫の長男郁天民と杭州大学中文系沈绍鏞など整理編集の「郁达夫诗词抄」、「郁达夫游记集」、「郁达夫译文集」、「郁达夫小说集」、「郁达夫散文集」、「郁达夫日记集」、「郁达夫文论集」、「郁达夫书信集」など分類全集を出版した、その上、1992 年 12 巻「郁达夫全集」を出版した。

全集は小説、随筆、評論、雑文 2 巻、詩詞、翻訳文、手紙と日記。ここで参考したの 2007 年版は、浙江文芸出版の分類整理と 1992 版の全集を基

礎として、調整補充をした、現在最も完備の全集版である。

## 謝辞

私は2016年4月日本大学芸術学研究科文芸学専攻に入学し、佐藤洋二郎教授のもとで研究し、多大なご指導ご鞭撻を賜りました。2018年で修士論文「佐藤春夫の郁達夫への影響」を作成にあたり、佐藤洋二郎教授、堀邦維教授に多くのご鞭撻を頂きました。その経験が私のその後の研究にとって大きな啓発と励みとなりました。ここに深謝の意を表します。

2018年4月、博士後期課程に進学し、さらに郁達夫の研究を継続することになりました。本論の作成にあたり、終始懇切丁寧なご指導を賜りました、日本大学芸術学部百木逸楊教授、堀邦維教授、植月恵一郎教授、上田薫教授、佐藤洋二郎教授、鈴木保彦教授に深謝申し上げます。

特に堀邦維教授、植月恵一郎教授には、多くの御助言、御指導を頂き、発表論文「中国における郁達夫作品に関する先行研究とその考察」、「厨川白村と郁達夫の文芸観の比較」、「「物の哀れ」と郁達夫」執筆の際には様々な御助言、御指導を賜わり、心から御礼申し上げます。

そして、温かいご支援を頂いた日本大学芸術学研究科の先生方々にも、厚く御礼申し上げます。

最後に、私の長年の留學生活を応援してくれた両親に心から感謝します。

